

国道322号線バイパス関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ

冥加塚遺跡

福岡県文化財調査報告書

第 77 集

1 9 8 7

福岡県教育委員会

冥加塚遺跡

田川郡川崎町所在遺跡群の調査

1987

福岡県教育委員会

序

国道322号線バイパス建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、昭和56・57・60年度の3次に渡って実施されました。

この報告書は、3次の調査で明らかになった田川郡川崎町冥加塚遺跡の発掘調査の記録であります。

冥加塚遺跡からは、弥生時代、古墳時代の集落跡と墓地遺構が発見され、この地方の歴史を知る上で貴重な資料を、わたくしたちに提示してくれています。

本書が古代解明の一助となれば幸せに存じます。

発刊にあたり、本文中に記名した方々をはじめ、種々の協力をいただいた関係各位に深甚の謝意を表する次第であります。

昭和62年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 友 野 隆

例 言

1. 本書は国道322号線バイパス建設に伴って昭和56・57・60年に福岡県教育委員会が行った田川郡川崎町所在の埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 本書の執筆分担は次のとおりである。
 - I 栗原和彦
 - II 飛野博文
 - III-1 川述昭人
 - 2 伊崎俊秋
 - 3 飛野博文
 - 4 飛野博文
 - IV 飛野博文
 - 付編 川述昭人
3. 遺物の復原は、福岡県教育委員会岩瀬正信氏の指導のもと九州歴史資料館で実施した。
4. 遺構の実測は各担当者が行い、遺物の実測は伊崎俊秋と飛野博文が実施し、平田春美、原富子氏の援助を得た。挿図の製図は豊福弥生・鶴田佳子・原田和枝の諸氏にお願いし、松嶋邦子・塩足里美・関久江氏の援助があった。遺構写真は各担当者が撮り、遺物写真は九州歴史資料館の石丸洋氏が撮影した。
5. 方位は特記しない限りすべて磁北である。
6. 本書の編集は、川述昭人・伊崎俊秋・飛野博文が行った。

本文目次

I 調査の経過	1
II 位置と環境	4
III 冥加塚遺跡の調査	6
1. 第1次調査	6
1) はじめに	6
2) 遺構と遺物	6
3) 小結	20
2. 第2次調査	21
1) はじめに	21
2) 遺構と遺物	21
3) 小結	44
3. 第3次調査	45
1) はじめに	45
2) 遺構と遺物	45
3) 小結	60
4. ま と め	61
IV 岩鼻古墳の調査	63
付編 号四郎窯跡採集遺物	69

図 版 目 次

冥加塚遺跡

- 図版 1. 上、冥加塚遺跡遠景 下、第 1 次調査区
- 図版 2. 第 1 次の調査（拡張部分）
- 図版 3. 上、埋甕 下、1 号土壇墓
- 図版 4. 2・3 号土壇墓
- 図版 5. 4 号土壇墓、1・2 号袋状竪穴
- 図版 6. 3～5 号袋状竪穴・土壇
- 図版 7. 土壇検出状態
- 図版 8. 上、1 号住居跡全景 下、1 号住居跡の柱穴とピット
- 図版 9. 1 号住居跡カマド
- 図版 10. 上、第 2 次調査区全景 下、4 号住居跡周辺
- 図版 11. 上、3 号住居跡 下、4 号住居跡
- 図版 12. 2 号住居跡
- 図版 13. 上、1 号掘立柱建物 下、1 号土壇
- 図版 14. 上、1 号墳全景 下、1 号墳石室
- 図版 15. 上、第 3 次調査区西半 下、同東半
- 図版 16. 上、5 号住居跡 下、同カマド
- 図版 17. 上、6 号住居跡 下、7 号住居跡
- 図版 18. 上、8 号住居跡 下、9 号住居跡
- 図版 19. 上、6 号袋状竪穴 下、3 号土壇
- 図版 20. 第 1 次調査出土遺物
- 図版 21. 第 2 次調査出土遺物 ①
- 図版 22. 〃 ②
- 図版 23. 〃 ③
- 図版 24. 第 3 次調査出土遺物 ①
- 図版 25. 〃 ②
- 図版 26. 〃 ③

岩鼻古墳

- 図版 1. 上、岩鼻古墳現況 下、同 調査後

挿 図 目 次

冥加塚遺跡

第1図	冥加塚遺跡周辺地形図 (1/5,000)	3
第2図	周辺遺跡分布図 (1/50,000)	5
第3図	冥加塚遺跡遺構配置図 (1/400)	6～7
第4図	埋竈遺構実測図 (1/20)	7
第5図	埋竈遺構出土土器実測図 (1/4)	7
第6図	1・2号土壇墓実測図 (1/30)	8
第7図	3・4号 ♪ (1/30)	9
第8図	1～5号袋状竪穴実測図 (1/30)	11
第9図	1号袋状竪穴出土土器・石器実測図 (1/3)	12
第10図	2号袋状竪穴出土土器 (1/3)	13
第11図	3号袋状竪穴出土土器実測図 (1/3)	13
第12図	4号 ♪ (1/3)	14
第13図	5号 ♪ (1/3)	14
第14図	1号住居跡実測図 (1/60)	15
第15図	1号住居跡カマド実測図 (1/30)	16
第16図	1号住居出土土器実測図 (1/3)	17
第17図	♪ 石器実測図 (1/3)	18
第18図	1号溝出土土器実測図 (1/3)	18
第19図	2号溝 ♪ (1/3)	19
第20図	3号住居跡実測図 (1/60)	22
第21図	3号住居跡出土土器実測図 (1/3)	23
第22図	3号住居跡出土石器実測図 (1/2)	24
第23図	4号住居跡実測図 (1/60)	25
第24図	4号住居跡出土土器実測図 (1/3)	26
第25図	4号住居跡出土鉄器実測図 (1/2)	27
第26図	2号住居跡実測図 (1/60)	27
第27図	2号住居跡出土土器実測図 (1/3)	28
第28図	2号住居跡出土遺物実測図 (1/2、1/6)	30
第29図	1号掘立柱建物実測図 (1/60)	31
第30図	1号土壇実測図 (1/30)	32
第31図	2号土壇実測図 (1/60)	32
第32図	土壇その他出土土器実測図 (1/3)	33
第33図	土壇その他出土弥生土器実測図 (1/3)	34

第34図	1号墳測量図(1/200)	35
第35図	1号墳石室実測図(1/60)	36
第36図	現地での説明会風景	37
第37図	1号墳出土土器実測図①(1/3)	39
第38図	1号墳出土土器実測図②(1/3)	40
第39図	1号墳出土遺物実測図③(1/3)	42
第40図	1号墳出土遺物実測図④(1/2)	43
第41図	中学生の社会科見学風景	44
第42図	5号住居跡実測図(1/60)	46
第43図	5号住居跡出土土器実測図(1/3)	46
第44図	5号住居跡出土鉄器実測図(1/2)	47
第45図	6号住居跡出土土器実測図(1/3)	47
第46図	7号住居跡実測図(1/60)	48
第47図	7号住居跡出土土器実測図(1/3)	49
第48図	8号住居跡実測図(1/60)	50
第49図	9号住居跡実測図(1/60)	50
第50図	9号住居跡出土土器実測図(1/3)	50
第51図	第3次調査検出袋状竪穴実測図(1/60)	51
第52図	402号袋状竪穴出土土器実測図①(1/3)	52
第53図	〃 ②(1/3)	53
第54図	6号袋状竪穴出土土器実測図(1/3)	54
第55図	3号土壙出土土器実測図(1/3)	54
第56図	3号土壙実測図(1/60)	55
第57図	工事中出土土器実測図①(1/4)	56
第58図	〃 ②(1/3)	57
第59図	〃 ③(1/3)	58
第60図	第3次調査出土石器実測図(1/3)	59
岩鼻古墳		
第1図	岩鼻古墳周辺地形図(1/5000)	63
第2図	岩鼻古墳地形図(1/200)	64
第3図	岩鼻古墳土層図(1/60)	65
第4図	岩鼻古墳出土遺物実測図(1/3)	66
第5図	岩鼻古墳主体部実測図(1/40)	67
付編		
第1図	号四郎窯跡採集土器実測図(1/3)	70
第2図	〃 (1/3)	71

I 調査の経過

一般国道322号線は、北九州市小倉北区を起点とし、田川・嘉穂・朝倉・三井の各郡を通過して久留米市櫛原で国道3号線に接続する、県北と県南を結ぶ主要地方道である。

福岡県土木部道路建設課では、年次を追って関係土木事務所毎に改良工事やバイパス工事を実施してきたが、昭和55年2月に田川土木事務所から筑豊管内のバイパス建設計画地内の埋蔵文化財等の分布状況について教育庁文化課に調査依頼があった。分布調査を実施した結果、田川郡川崎町内で3ヶ所試掘調査を実施する必要を認めたので昭和56年4月に入って試掘調査を実施した。試掘調査の結果、2ヶ所には埋蔵文化財等の遺存状況は認められなかったが、川崎町大字田原字冥加塚の台地一帯に埋蔵文化財の遺存状況を確認した。この調査結果に基づき県土木部道路建設課・田川土木事務所と文化課とでその取り扱いについて協議した。

協議の結果、文化課が字冥加塚一帯の路線計画地内を、県土木部の費用負担で発掘調査を実施することになった。この遺跡が冥加塚遺跡である。

冥加塚遺跡の発掘調査は、用地取得の関係から、昭和56・57・60年の3次に渡って実施し、今年度の報告書刊行を以って終了する。

また、昭和58年度田川土木事務所から福岡県教育庁筑豊教育事務所（昭和58年度発足、飯塚市所在）に田川郡川崎町大字池尻以北の建設計画の文化財等の分布調査の依頼があった。筑豊教育事務所で分布調査を実施した結果、古墳1基の所在が認められた他、3ヶ所に渡って試掘調査を実施する必要が認められた。本書に収録した岩鼻古墳がこの時に発見された古墳である。

試掘調査は、3ヶ所とも用地取得後、伐開作業とともに昭和58年度実施したが、埋蔵文化財等の遺存は確認されていない。

発掘調査期間、調査関係者は次のとおりである。

福岡県教育庁文化課関係者

みようがづか
冥加塚遺跡 福岡県田川郡川崎町大字田原字冥加塚

第1次調査

調査期間	昭和56年8月17日～9月5日		
総括	文化課長	藤井 功	
	文化課調査第1係長	宮小路賀宏	
調査担当	文化課調査第2係長	栗原 和彦	
	調査第1係主任技師	川述 昭人	
	技師	伊崎 俊秋	
庶務担当	文化課庶務係主任主事	古賀 秀幸	

第2次調査

調査期間 昭和57年10月1日～10月14日
 総括 昭和56年度に同じ
 調査担当 文化課調査第1係技師 伊崎 俊秋
 庶務担当 〃 庶務係主任主事 古賀 秀幸

第3次調査

調査期間 昭和60年3月14日～3月31日
 総括 文化課長 前田 栄一
 〃 課長技術補佐 宮小路賀宏
 調査担当 〃 調査第1係長 栗原 和彦
 〃 同 技師 飛野 博文
 庶務担当 〃 庶務係主任主事 竹内 征洋
 いわはな
 岩鼻古墳 福岡県田川郡川崎町大字池尻

調査期間 昭和60年6月15日～7月1日
 総括 文化課長 前田 栄一
 〃 調査第1係長 栗原 和彦
 調査担当 〃 〃 技師 飛野 博文
 庶務担当 〃 庶務係主任主事 竹内 征洋

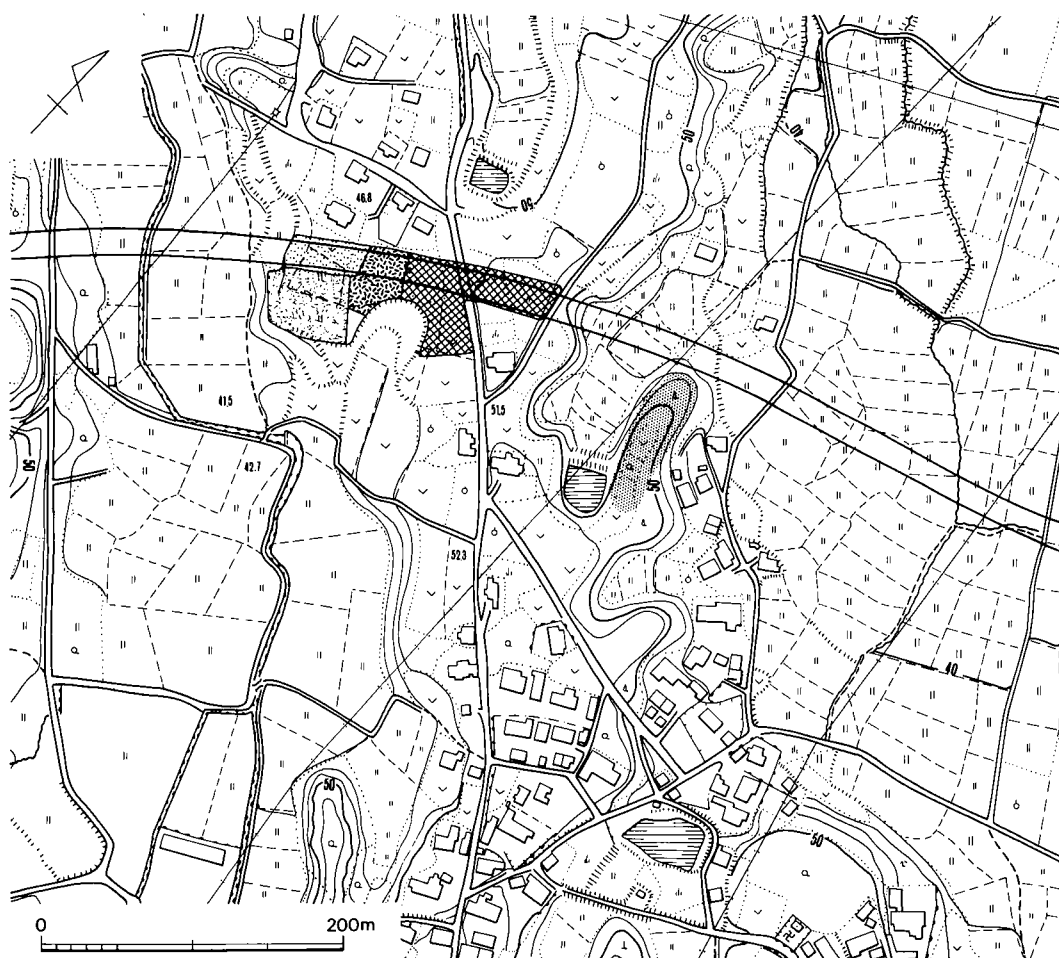
土木部道路建設課関係者（道路建設課）






年 度	課 長	担 当
55年	坂本良一	主任技師 檜原睦男 改良第1係
56年	坂本良一	〃 檜原睦男 〃
57年	内田勝士	〃 檜原睦男 〃
58年	内田勝士	〃 檜原睦男 〃
59年	内田勝士	〃 檜原睦男 〃
60年	興 信 雄	〃 庄 田 靖 典 〃

田川土木事務所

年 度	所 長	室 長
55年	御手洗茂人	花山明人
56年	御手洗茂人	花山明人
57年	角田友繁	藤井甚吾
58年	角田友繁	藤井甚吾
59年	栗原忠昭	木村重幸
60年	栗原忠昭	木村重幸

なお、55年度の分布調査には、文化課主任技師酒井仁夫と副島邦弘があたり、昭和56年度の試掘調査は栗原が当たった。また、昭和58年度の分布調査は、福岡県教育庁筑豊教育事務所社会教育課指導班技術主査井上裕弘があたり、昭和60年度の試掘調査は、筑豊教育事務所社会教育課指導班技術主査新原正典が担当した。このほか、福岡県文化財保護指導委員水上薩摩氏、川崎町教育委員会の方々、野相裕則氏の協力をいただいた。記して謝意を表します。



-  第1次調査(昭和56年度)
-  第2次調査(昭和57年度)
-  第3次調査(昭和60年度)
-  第4次調査(国庫補助、昭和60年度)
-  鎮西原古墳群

第1図 冥加塚遺跡周辺地形図(1/5,000)

Ⅱ 位置と環境

田川市郡の大部分はいわゆる盆地に存在する。北は香春岳^{か かわらだけ}から福智山へと連る石灰岩山塊、東は京都郡との間に貫山地、西には嘉穂郡とを隔てる金国山地があり、さらに南には修験道の一大霊場として著名な英彦山^{ひこさん}がそびえる。さらに盆地の中にも広く低丘陵が隆起し、それらを開析して遠賀川の支流である中元寺川、英彦山川が北流する。この両河川の流域は盆地内の数少ない可耕地であり、従って祖先の足跡たる遺跡も両河川に面した丘陵、台地上に集中して営まれており、なかには古代史上に重要な意義を有するものも存在する。

近代に入って、田川市郡を含む筑豊地方は石炭資源の一大産地として日本の近代化を支えた。一方、古代においてもこの地は宇佐八幡宮との関係が深く、時の国家的事業であった東大寺大仏造営にも関係したといわれている。現在、香春岳の近くに「採銅所」という地名が残り、当時の鉱山開発とそれを指導する渡来者集団の姿を彷彿とさせる。渡来人に関しては『豊前国風土記』逸文にある「昔新羅の国の神、自ら渡り到来りて、此の河原に住みき、名付けて香原の神という」という下りからもうかがいしれる。以下にこの地域の歴史を略述する。

当地域で調査された縄文時代の遺跡は赤村合田遺跡^{あかむらごうだ}のみである。今川の河岸段丘上から縄文時代前期の集石炉や後期の住居跡が検出されている。その他に遺物の知られる遺跡には川崎町上真崎遺跡、田川市上の原遺跡、同弓削田原遺跡などがある。

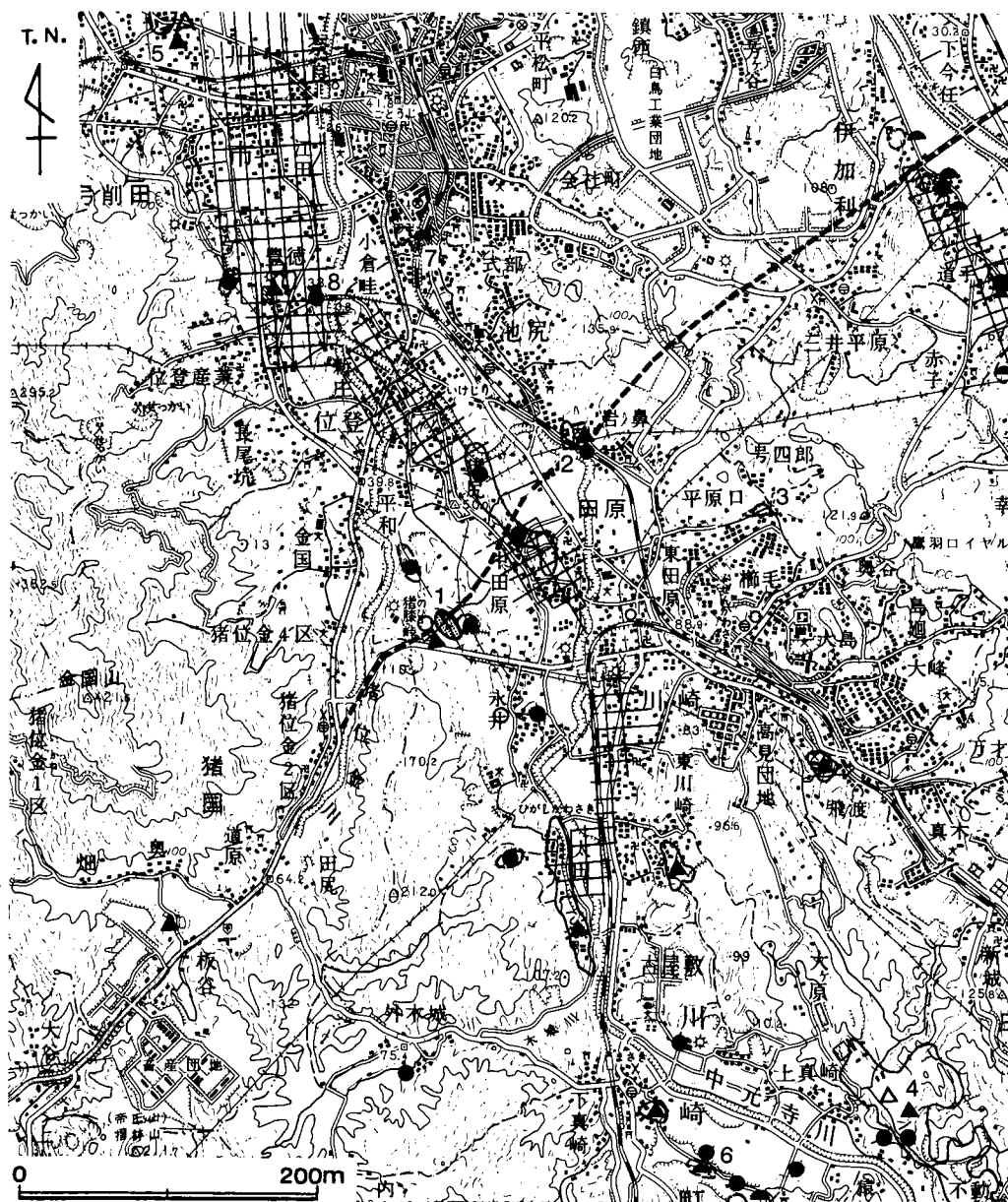
弥生時代では一時遠賀川系土器の型式名ともなった田川市下伊田の台地上に立地する遺跡群が著名である。また、糸田町はこの地域で最も青銅製祭器の集中する地域で、宮山遺跡から銅戈8本が出土している。

古墳時代では多数営まれた横穴墓群がこの地を代表するといっても過言でなかろう。中元寺川水系では、戸山原横穴A・B群、大三輪神社横穴群などが確認されている。彦山川系に比して数少ないのは踏査の疎密によるものであろう。横穴以外では田川市位登古墳が注目される。長軸81mの前方後円墳で船載内行花文鏡を出土している。また、彦山川流域の大任町狐塚1号^{こねづか}墳は全長30mの小型前方後円墳であるが占地する丘陵の斜面に30基近くの横穴が築造されるという特異なあり方を示す。

歴史時代になると彦山川水系に天台寺廃寺が造営される。法起寺式伽藍を有するといい、均整のとれた新羅式軒瓦を出土する遺跡として古くから著名である。

註

1. 赤村教育委員会「合田遺跡」(『赤村文化財調査報告』第1集、1985)
 2. 大任町教育委員会「狐塚古墳群Ⅰ・Ⅱ」(『大任町文化財調査報告』第1・2集、1977・78)
- 以上の多くは、田川市史編纂委員会編『田川市史』1977に負うところが大きい。



△：縄文時代 ▲：弥生時代 ○：古墳時代 ●：古墳 ㊦：横穴

- | | | | |
|-----------|-----------|-------------|----------|
| 1. 冥加塚遺跡 | 2. 岩鼻古墳 | 3. 号四郎窯跡 | 4. 上真崎遺跡 |
| 5. 弓削田原遺跡 | 6. 戸山原横穴群 | 7. 大三輪神社横穴群 | 8. 位登古墳 |
| 9. 狐塚古墳群 | 10. 永井遺跡 | | |

第2図 周辺遺跡分布図(1/50,000)

Ⅲ 冥加塚遺跡の調査

1. 第1次調査

1) はじめに

第1次の調査は盆のあけた昭和56年8月17日から9月5日の間、猛暑の中で実施された。調査対象地点は田川郡川崎町大字田原字冥加塚の台地東側端部付近から西へ幅25m、長さ100mの間の本線部分である。本線以外では発掘区中央部分の南側に25m×37mの範囲で道路建設に伴って一部カットする必要があるため、この部分の発掘調査も実施した。

調査の結果、縄文時代晩期の埋甕1基、弥生時代前期末～中期初頭にかけての袋状竪穴5基、それに遺物が出土していないため時期は判然とはしないが、袋状竪穴の時期に近いと思われる土壌墓4基、年代不詳の土壌10数基を検出した。1地点発掘区の西端部からは古墳時代後期の竪穴式住居跡1軒を検出した。また、拡張部からは、歴史時代の溝2条が発見された。

主な出土遺物は縄文時代の甕、弥生時代の壺、甕、紡錘車、石斧、砥石、黒曜石片、それに栗らしい炭化物である。古墳時代では須恵器、土師器を検出し、平安末～鎌倉時代にかけての瓦器、青磁、白磁、土錘が発見された。

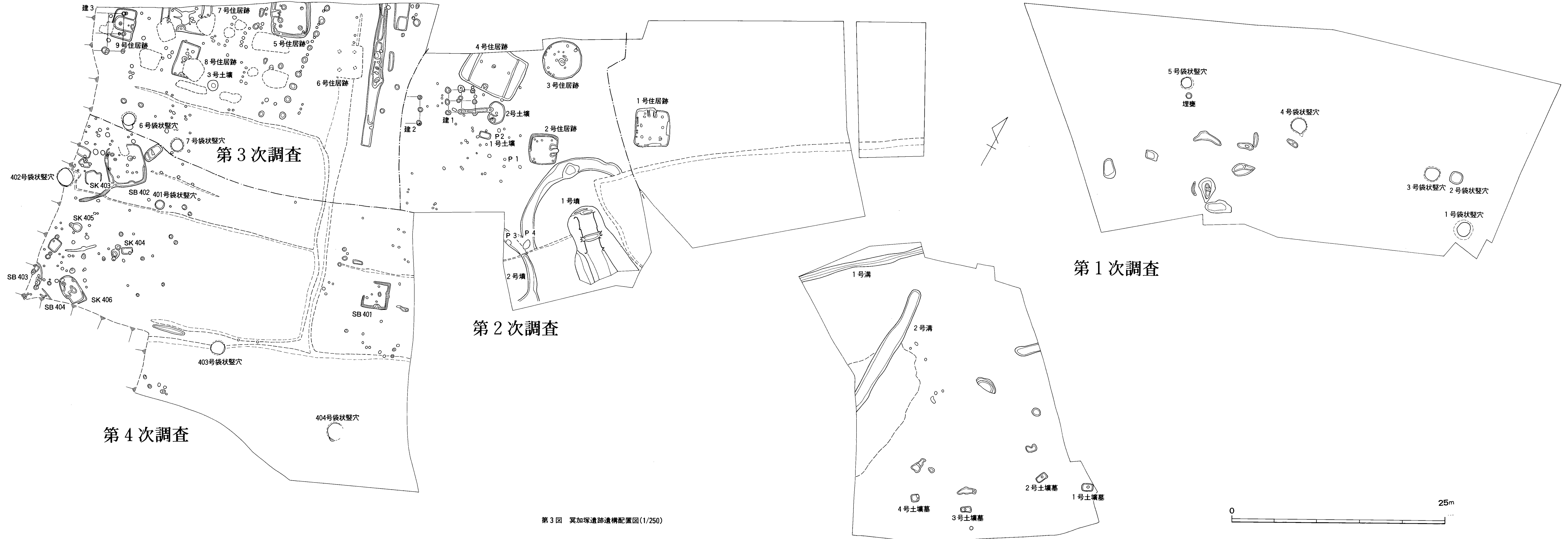
2) 遺構と遺物

(1) 埋甕(図版3、第4図)

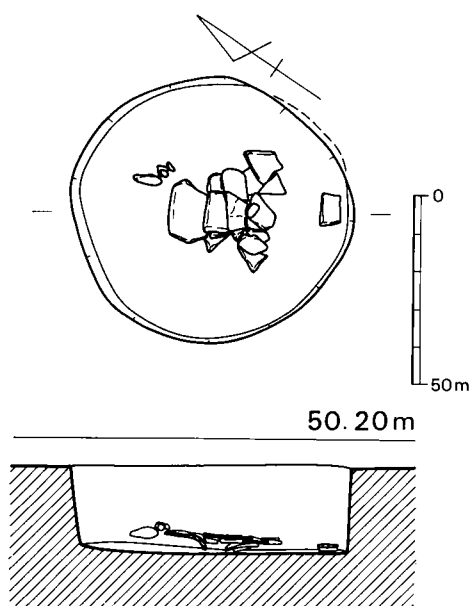
袋状竪穴群が検出された丘陵東側部分の5号袋状竪穴の南東部に、これと接する様な位置で発見された。埋甕の土壌平面形は円形を呈しており、長径71cm、短径70cm、深さ23cmを測る。上面は削平されているため壁高は低い、壁の断面は垂直に近い傾きである。この土壌のほぼ中央部分から、底面に接して埋甕を押圧された状態で検出した。底部は検出されていないため底部穿孔の埋甕と思われる。なお埋置状態は不明である。縄文時代晩期に属すると思われる。

出土遺物(第5図)

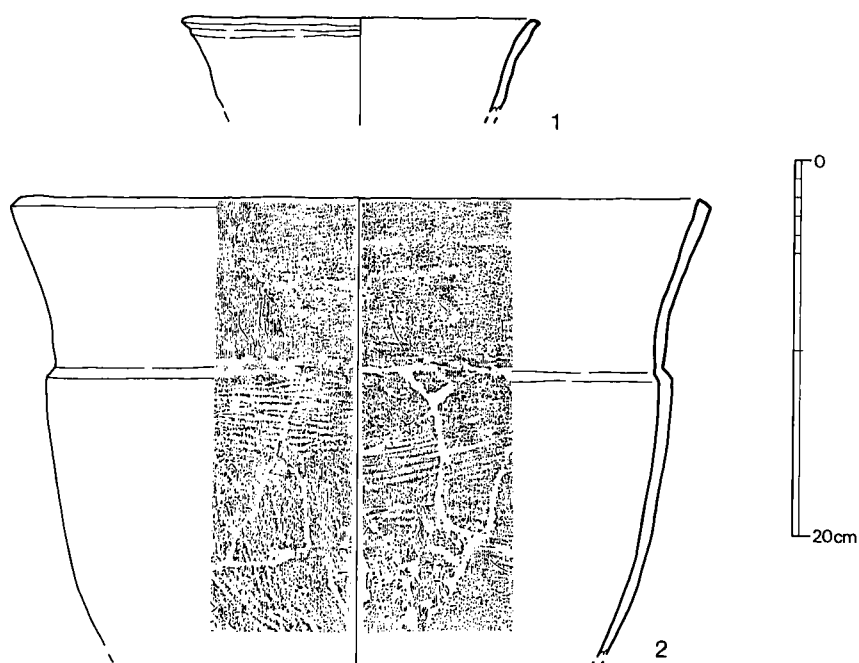
甕 1は口頸部をわずかに外反させており、端部上面は平坦面を有する。口頸部外面は横方向の条痕が入るようであるが、器表の風化が著しいため判然としない。口径19.1cmであり、色調は茶褐色を呈する。2は口頸部をわずかに外湾し、口縁端部は平坦面を有している。頸基部と肩部の境は内外面とも明瞭な段がつく。胴部外面の上位は横方向、下位は斜め方向に条痕が入り、煤が付着する。胴部内面は上位にのみ横方向の条痕が入る。復原口径36.6cmである。胎土に砂粒を多く含み、色調は暗茶褐色を呈す。



第3図 冥加塚遺跡遺構配置図(1/250)



第4図 埋甕遺構実測図(1/20)



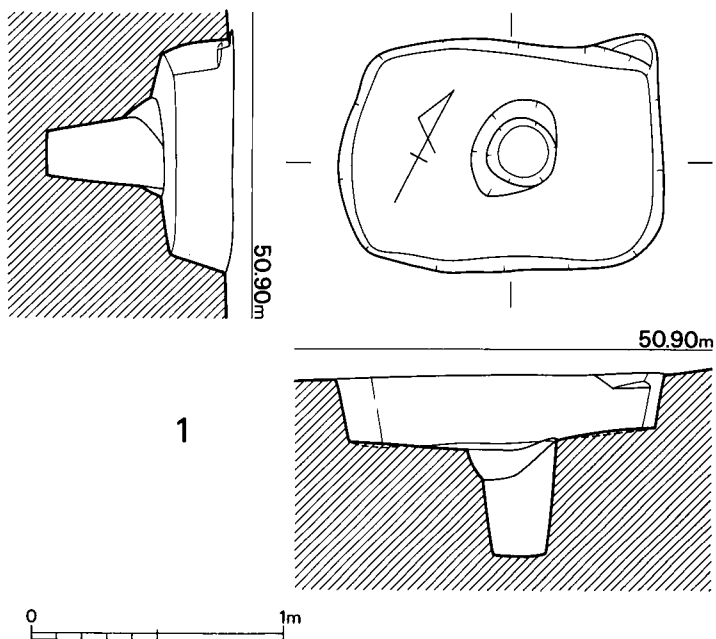
第5図 埋甕遺構出土土器実測図(1/4)

(2) 土墳墓

本線南側の土取り場の調査により、4基検出された。これらの4基は発掘区南端部付近に、ほぼ一直線上に並んだ状態で所在していた。いずれの土墳墓からも遺物は検出されなかった。

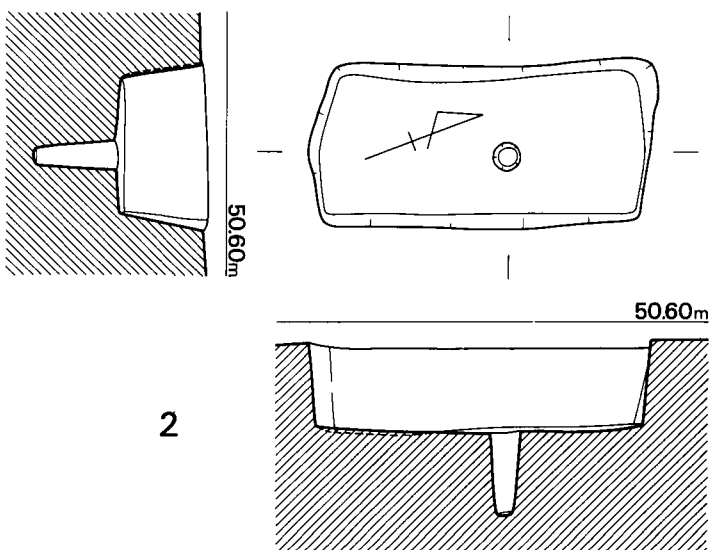
1号土墳墓(図版3、 第6図)

最も東側に位置している。平面の形態は、隅丸長方形を呈する。規模は、長軸128cm、短軸93cm、深さ28cmである。土墳中央部の底面には、直径27cm、深さ45cmのピットがあり、水抜きのためのものと思われる。主軸はN-62°-Eにとる。



2号土墳墓(図版4、 第6図)

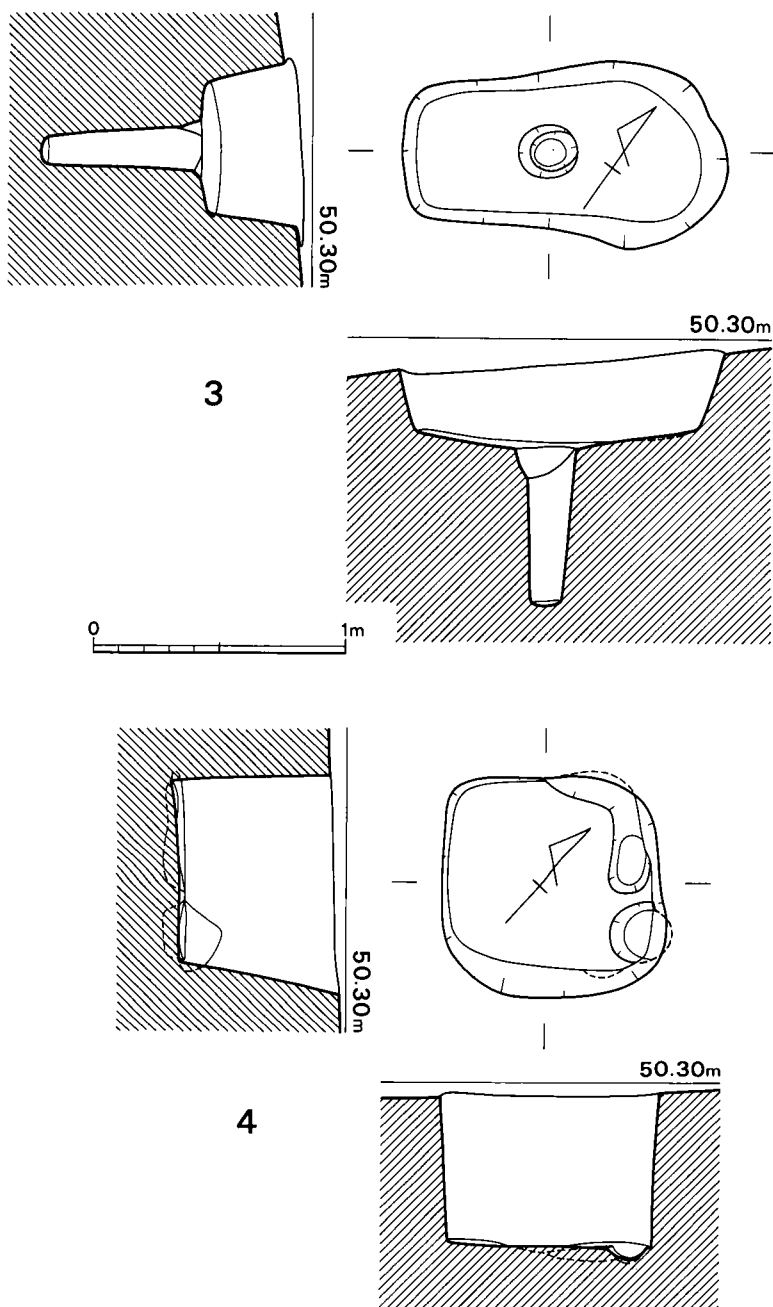
1号土墳墓の西側4mの位置にあるが、主軸は40度ほど北側へずれている。平面の形態は長方形を呈しており、規模は長軸134cm、短軸65cm、深さ35cmである。壁は垂直に近いものであり、土墳中央部の底面には直径12cm、深さ33cmの水抜きのためと思われるピットがある。主軸はN-21.5°-Eにとる。



第6図 1・2号土墳墓実測図(1/30)

3号土墳墓(図版4、第7図)

平面の形態は楕円形状を呈する。規模は長軸128cm、短軸54~74cm、深さ38cmである。墓墳



第7図 3・4号土墳墓実測図(1/30)

壁の断面は緩かに傾斜しており、底面中央部に直径16～19cm、深さ65cmの水抜きのためと思われるピットを穿っている。主軸はN-55.5°-Eにとる。

4号土壇墓(図版5、第7図)

最も西側に位置している。平面の形態は方形を呈しており、規模は一辺86×87cm、深さ61cmである。南東の壁のみわずかに傾斜面を有するが、他の3壁はおおむね垂直に近く掘られている。北東壁の直下にはピット2個が穿たれているが、他の3基のピットと同様の性格をもつものと思われる。主軸はN-48.5°-Eにとり、1・3号土壇墓とほぼ同じ方位を示している。

(3) 袋状竪穴

1地点東側部分から5基検出された。いずれも円形の平面形を呈するものであり、中からは弥生式土器の壺、甕、紡錘車、砥石、粟が検出された。

1号袋状竪穴(図版5、第8図)

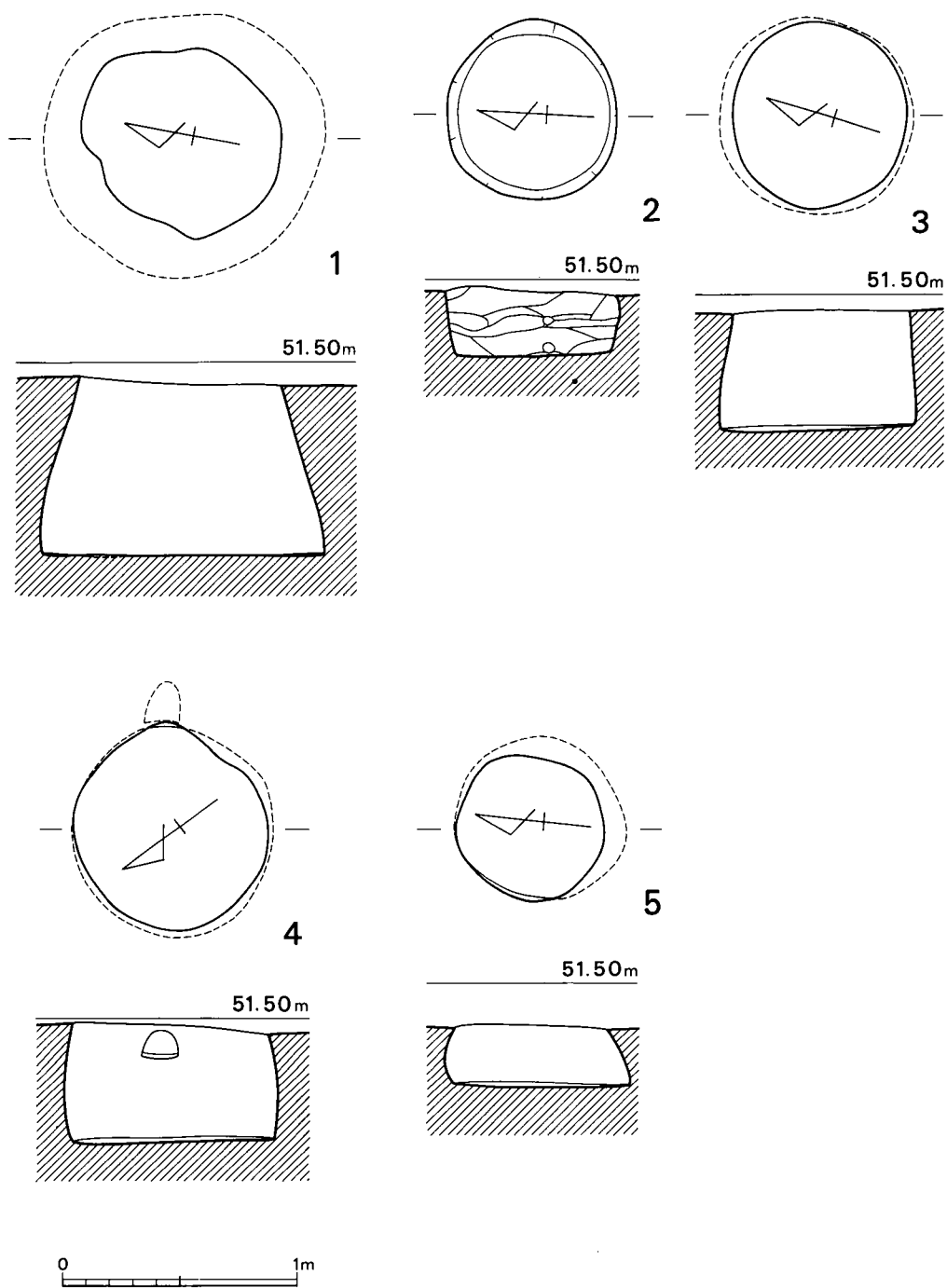
上面の平面形は崩壊のため不整形を呈するが、底面は円形である。底面の規模は直径230～235cmであり、深さ153cmを測る。断面の形態は上部がせばまる袋状を呈するもので、壁の遺存状態は良好である。

出土遺物(図版20、第9図)

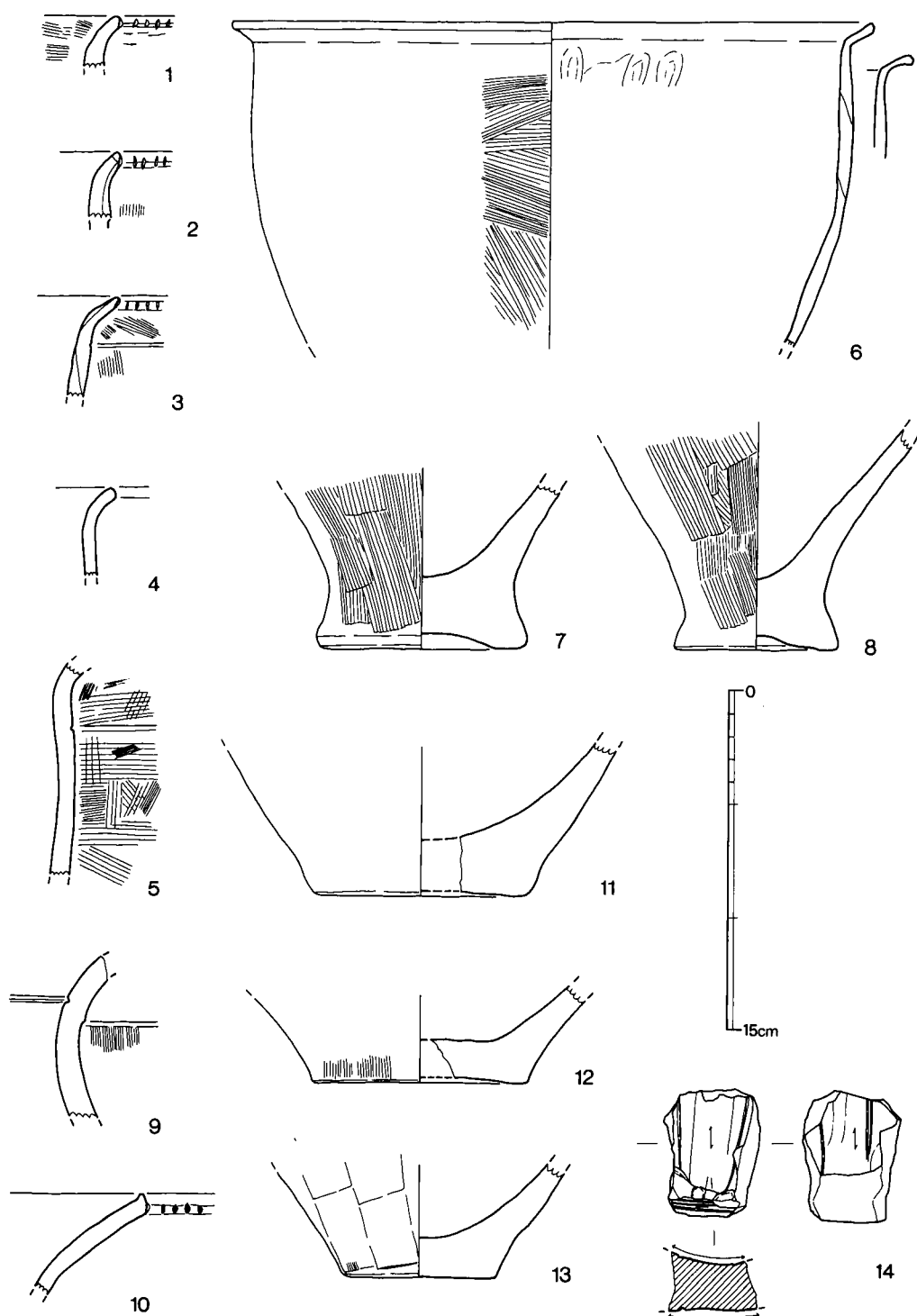
全体的に遺物の出土量は少なかったが、当該袋状竪穴は他の4基に比して土器出土量は多く、甕約12個体分以上、壺約14個体分以上の土器片が検出された。また砥石1個と、粟の炭化物が検出された。いずれの遺物も、竪穴内に投棄された状態のものである。

土器(第9図1～13)

1～8は甕である。1～3は如意形口縁であり、口唇部下面に刻目を施文する。1の口頸部内面は刷毛目上をナデている。3は木の小口による刻目を入れ、口縁部と胴部の境に1条の沈線が入る。6は「く」の字状を呈する短い口縁部であるが、口縁の傾きは場所により異なる。胴部外面は細い刷毛目の上を部分的にナデている。内面の頸基部付近は僅かに指頭圧痕が残る。5は3と同様、口縁部の境に1条の沈線を配するもので、縦横の刷毛目が入る。内面はヘラ研磨調整である。7・8は若干上げ底を有する底部である。外面はともに刷毛目調整であり、8は細・粗2種類の刷毛目を用いている。9・10は壺である。9は口縁部を欠損するが10の如くに大きく外反する口縁がつくものである。9は頸部外面の中ほどに段を有し、内面は1条の沈線で区画している。10は口唇部下面に刻目が入る。11～13は壺の底部である。13は外面に板小口による擦過痕が残り、上面をナデている。



第8図 1～5号袋状竪穴実測図(1/30)



第9图 1号袋状竖穴出土土器・石器实测图(1/3)

石器(第9図14)

砥石(14) 砂岩製のものであり、表裏2面を使用している。2面とも中央部分が凹んでおり、鋭利なものを研いだと思われるV字状の凹みが両面に見られる。中砥と仕上砥との中間的なものである。

2号袋状竪穴(図版5、第8図)

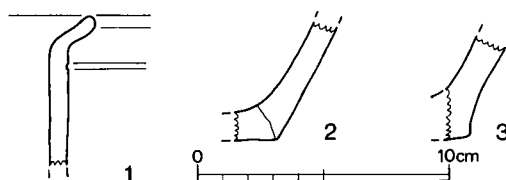
上面・底面ともに円形を呈するものであり、上部を削平されているためもある、底面よりも上面の方が口径が大である。上面径144~150cm、底面径131cm、深さ55cmである。

出土遺物

遺物の出土は少なく、甕口縁部1個体、壺胴部片、底部2個体である。

土器(第10図)

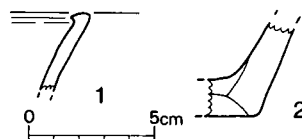
1は「く」の字状に短く外反する口縁であり頸基部下に1条の沈線が入る。外面は煤が付着し、煮沸に供したことがうかがえる。2・3は壺の底部かとも思われる。



第10図 2号袋状竪穴出土土器実測図(1/3)

3号袋状竪穴(図版6、第8図)

上面、底面ともに円形を呈するものである。上面は直径150~155cm、底面は160~165cmを測り、深さ102cmである。壁の断面形状は袋状を呈しており、底面は中央部がわずかに凹む。



第11図 3号袋状竪穴出土土器実測図(1/3)

出土遺物

遺物の出土は少なく、図示したものその他、底部片と、実測不可能な石斧小片である。

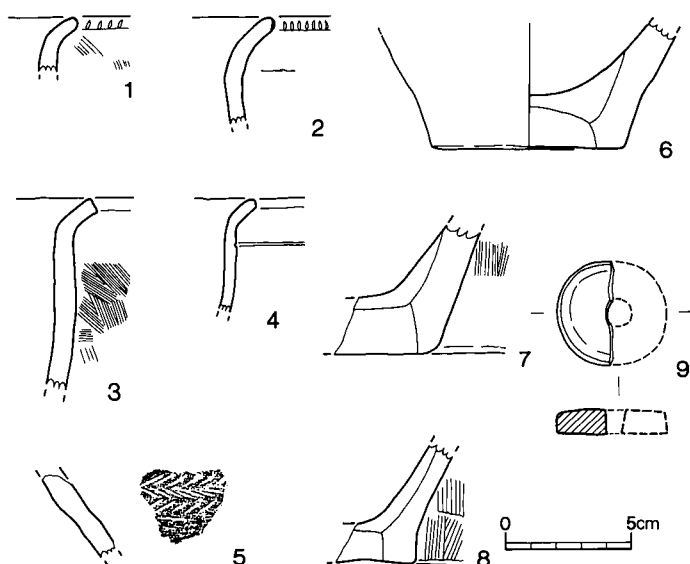
土器(第11図)

1は壺の口縁部であり、口縁端部は内側へわずかにつまみ出している。2は外面に縦方向の刷毛目が入る。

4号袋状竪穴(図版6、第8図)

底面の形態は概ね円形を呈するが、隅丸方形ともとれるものである。上面は直径156~165cm、底面は170~172cmを測り、最長部分は179cmである。底面からの高さ103cmであり、壁の断面形状は袋状を呈している。南東部分の壁面には、底面から70~96cmの間に、幅30cm、奥行き35cmで、半円形を呈する掘り込みが見られる。

出土遺物(図版20、第12図)



第12図 4号袋状竪穴出土土器実測図(1/3)

甕の口縁部5個体、底部3個体、壺胴部1個体、底部1個体、半欠の紡錘車1個が出土している。

土器(第12図1～8)

1～4、7・8は甕である。1・2は如意形口縁であり、口唇部下面に刻目を入れる。3は「く」の字状を呈する口縁であり、口唇部をわずかに凹湾させる。5・6は壺である。5は胴部上面にヘラ描きによる羽状文が入る。この羽状文は器表をヘラ研磨した後に施文したものである。6の底部は粘土接合の様子がよくわかる。

土製品(第12図9)

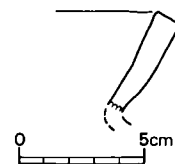
紡錘車(9) 1/2強を欠損している。直径4.1cm、厚さ1.1cmを測り、孔径は1cm程度と思われる。胎土に砂粒を多量に含み、器表は粗である。茶褐色を呈し、焼成はややあまい。

5号袋状竪穴(図版6、第8図)

5基の袋状竪穴のうち最も西側に位置したものである。平面の形態は、上面、底面ともに不揃いながらも円形に近いものである。規模は、上面117～125cm、底面134～140cm、深さ54cmである。壁の断面は袋状を呈しており、南壁は内傾度が大である。底面は中央部がわずかに凹んでいる。

出土遺物

壺口縁部片と粘土塊が少量出土しただけである。



第13図 5号袋状竪穴出土土器実測図(1/3)

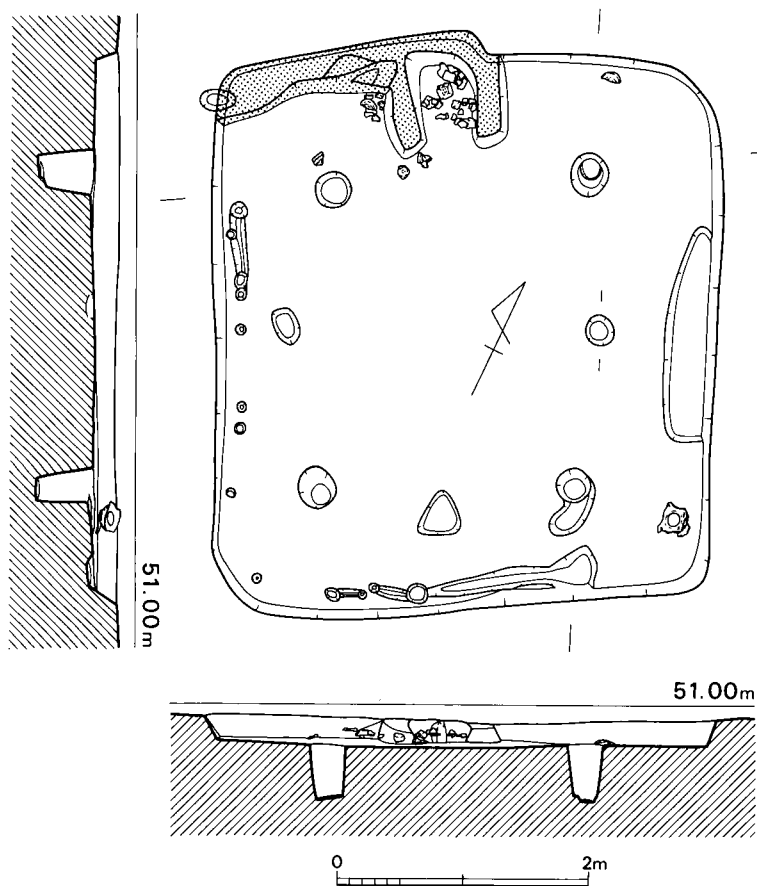
土器(第13図)

小片であり、壺の口縁部かと思われる。焼成はあまく、黒灰色を呈している。

(4) 竪穴式住居跡

1号住居跡(図版8・9、第14・15図)

発掘区の西端部から検出された。平面の形態は隅丸方形を呈するもので、規模は、南北辺4.6m、東西辺4m、深さ20cmを測る。主柱穴は4個、方形に配置しているが、主柱穴を結んだ線は、若干、菱形に近い形態である。主柱穴間の距離は南北軸2.5m、東西軸2.1mを測る。南北軸の中間部分には、東、西辺おのおのに深さ6cm位の柱穴が1個がある。西壁の周辺部には深さ3～13cmほどの杭跡かと思われる浅いピットが並んでいる。主柱穴は底径15～21cm、深



第14図 1号住居跡実測図(1/60)

さ42～45cmを測る。

カマドは北壁の中央部分に、内側に造り付けのものが付設されている。カマドは灰黄色粘土を使用して造られ、焚口幅35cm、奥行65cmであり、カマド中央部に石製支脚を1個立てている。このカマド内から土師器埴、小型甕が出土し、左袖部分で須恵器杯蓋と土師器甕が出土した。北壁の西半分は壁面に粘土を使用している。主軸はN-24.5°-Wである。出土遺物から、住居跡の年代を6世紀後半に比定できる。

出土遺物(図版20、第16・17図)

住居跡からは須恵器杯、甕、土師器埴、小型甕、鉢が出土した。このうち、カマド内出土は8、9であり、左袖付近から1、2、7が発見された。弥生時代の石斧が1

個出土したが、住居跡廃棄後の投げ込みによるものと思われる。14は住居跡の近くの覆土中より検出されたものである。

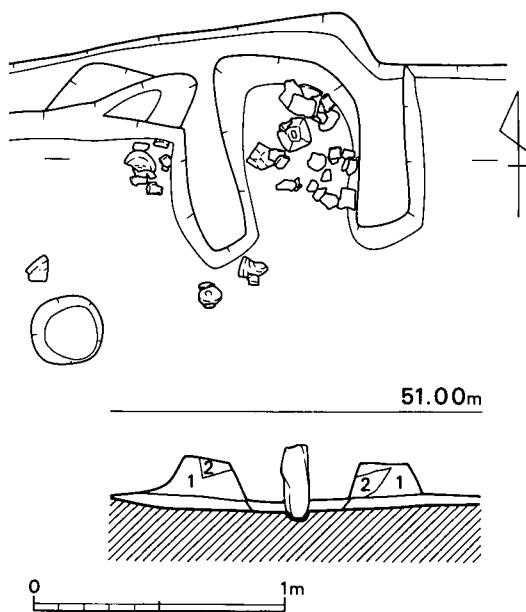
須恵器(第16図1～6・14)

杯蓋4個はいずれも異なった形態を有する。1は天井部外面の広範囲に回転ヘラ削りを施しており、頂部内面はヘラ記号を有する。口縁端部は平坦面をもつ。口径14.4cm、器高3.8cmである。3・2は天井部外面を広範囲に回転ヘラ削りし、天井部と体部の境に沈線が入る。口縁端部内面は凹線が入り、段がつく。口径13.2cm、器高3.8cmである。3は天井部外面を広範囲に回転ヘラ削りをする。口縁部は丸くつくられている。口径15.1cm、器高3.5cmである。4は天井部と体部の境に細い沈線が入り、口縁端部は丸い。6の甕は口縁部に粘土を貼付して肥厚させ、口唇部に凹線を配する。胴部内面は円心円叩きが入る。口縁部内面と外面の大半に緑灰色の自然釉がかかる。頸部外面にヘラ記号あり。

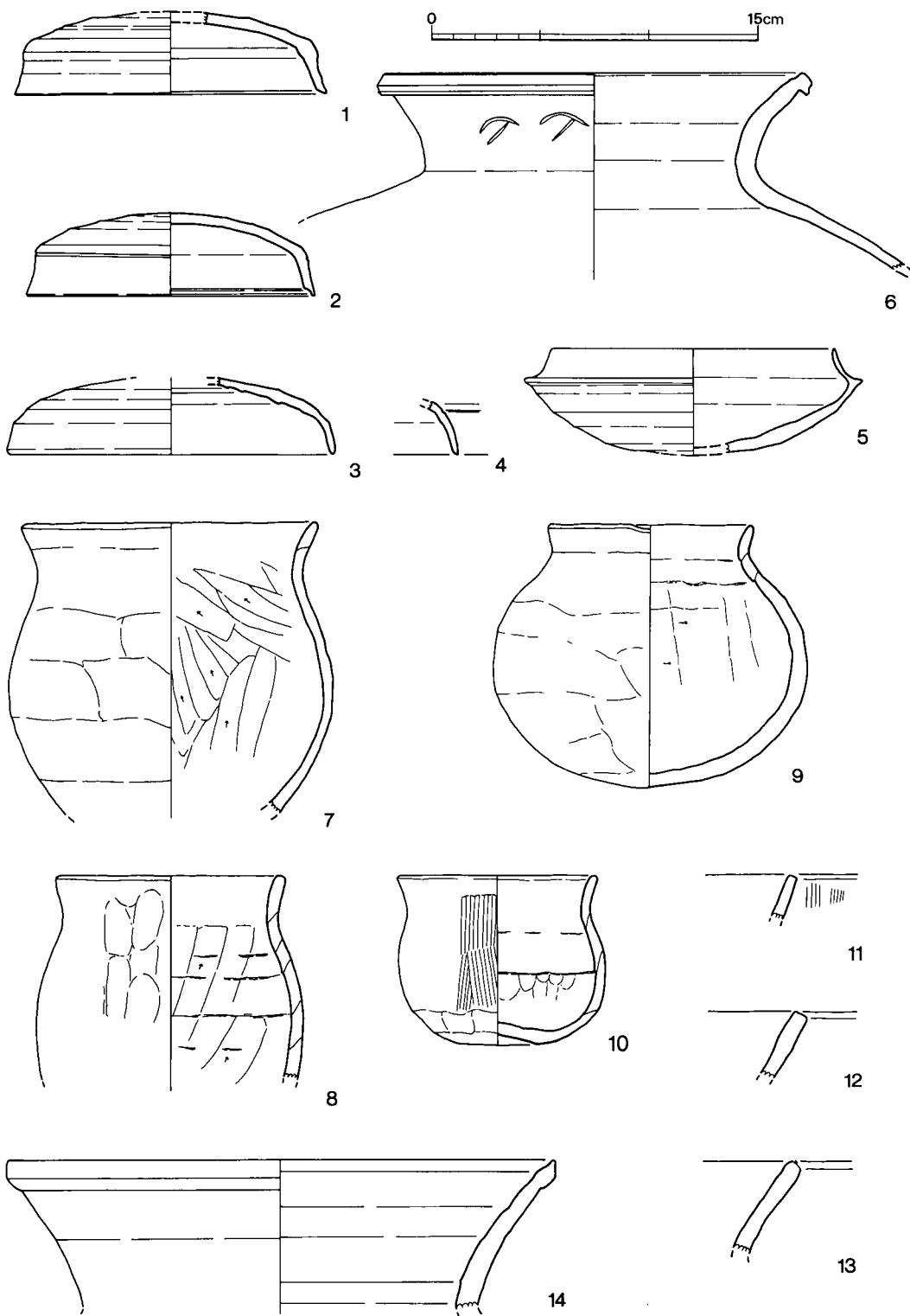
杯蓋1と杯身5はセット関係にある。3は天井部の広範囲に回転ヘラ削りを施し、大型品であり、沈線を有する1・2と同時期に比定される。

土師器(第16図7～13)

7・8は小型の甕である。口頸部はわずかに外反し、口縁部はやや平坦面を有する。胴部外面はナデ、内面はヘラ削り調整である。9の埴は、短くてわずかに外反する口縁部を有する。胴部外面はナデ、内面はヘラ削りする。口径9.5cm、器高12.1cmである。10は鉢である。胴部



第15図 1号住居跡カマド実測図(1/30)

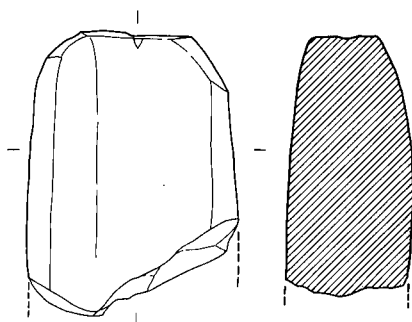


第16図 1号住居跡出土土器実測図(1/3)

外面は刷毛目が入り、底部はヘラ削りする。内面は指頭ナデである。口径9.2cm、器高7.8cmである。11～13は小片であり、13は甕、11・12は小型甕か鉢かと思われるものである。

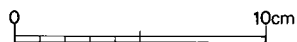
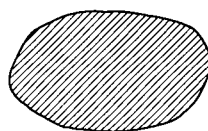
石器(第17図)

玄武岩製の蛤刃石斧の上半部分である。現存長10.4cm、最大幅8.4cmを測る。



(5) 土壌

発掘区東半部から10基、南側の土取り場から4基検出されたが、遺物は出土していない。土壌の平面形は、楕円形、長方形を呈しまとまりはない。規模は、長さ1.3～3m、深さ5cm～56cmである。底面は平坦なもの、傾斜したもの、いくつも段のつくもの、など様々である。埋土は他の遺構のものとは異なっており、あるいは縄文時代の埋甕と同時期所産であろうか。



第17図 1号住居跡出土石器実測図(1/3)

(6) 溝

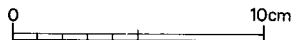
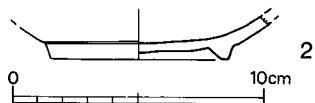
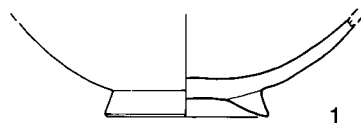
1号溝(第3図)

溝底面の傾きから1号溝は北東から南西方向に走向するものと判断できる。上面幅70～90cm、底面幅20～30cm、深さ12～14cmであり、溝断面の形態はU字形を呈する。長さ15mほど確認された。

出土遺物(第18図)

瓦器(1・2)底部近くで2個体検出された。1は断面三角形を呈する厚手の高台を貼付したもので、器表の磨滅のため調整法は不明である。胎土は精選されていて良好である。2は丈の低い高台を貼付したもので1と同様に調整法は不明である。

出土した遺物は、底部周辺のみであり、体部の形態は不明である。しかも器表の風化のため調整法が判然としないが、平安時代末の12世紀代に比定できよう。



第18図 1号溝出土土器実測図(1/3)

2号溝(図版2、第3図)

1号溝の東方に位置する。溝は北から南へ走向しており、溝底面における北、南の比高は地形の傾斜も手伝って1m強を測り、溝内に入った水は南側の谷部分へ急傾斜で落ちる。溝底面の幅1m程であり、深さは5～30cmである。

出土遺物(第19図)

溝内からは後世の流入物と思われる弥生土器と、溝の年代に比定される瓦器・白磁・青磁・土錘が出土した。

瓦器(第19図1)

碗の底部である。底部外面はヘラミガキせずに、横ナデ調整である。

白磁(第19図2・3)

碗である。2は丈の高い削り出し高台であり、この直上部まで灰黄色の釉がかかる。体部外面は貫入が入っている。3の口縁部はわずかに外反し、口縁端部上面は平坦面を有する。釉は乳灰白色を呈するが、全面にかけらずにムラがある。

青磁(第19図、4・5)

同安窯系の碗である。4は体部内外面にヘラ片彫りによる文様が入る。緑灰色の釉色であり、ヘラ彫り部分は釉が厚くたまり緑が濃い。

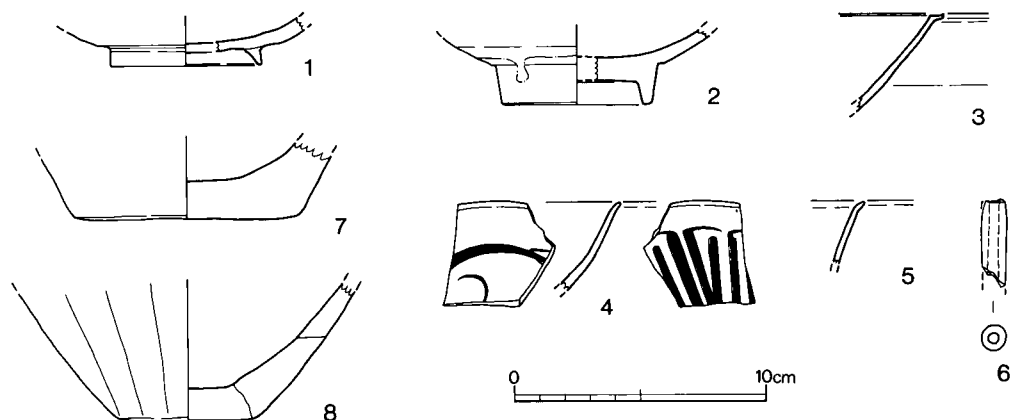
土製品(第19図6)

土錘である。現存長35mm、径10.5mm、孔径4mmである。橙褐色を呈し、焼成はやや軟質である。胎土は精選されていて良好である。

瓦器は体部下面にヘラミガキを省略したものであり、また、同安窯系^{註2}青磁碗の出土から、溝の年代を平安末～鎌倉初頭の12世紀後半～13世紀初頭に比定できる。

註

1. 森田勉「九州地方の瓦器碗について」考古学雑誌59巻2号 日本考古学会 昭和48年
2. 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」九州歴史資料館研究論集4 1978



第19図 2号溝出土土器実測図(1/3)

(3) 小結

1. 土墳墓について

台地の南側斜面部から4基検出されたが、小範囲の調査であるため、全貌は明らかではない。主軸方位は4基のうち3基は同一方位をさし、1基のみこれと40度ほど異なる方向をさす。平面の形態は長方形を呈しており、1基だけこの時代の土墳墓としては稀な形態である方形を呈する。規模は長さ128～134cm、幅54～74cmを測るもので大型とは言えない。

当該土墳墓の特徴は、墳底に円形のピットを穿っている点である。円形ピットは墳底中央部に穿つもの3基、1辺に寄った位置にあるのも1基であり、前3基は孔径12～27cm、深さ33～65cmを測る。前期甕棺等では良く甕棺内にたまった水抜きのために焼成後、胴部などの位置に孔を穿つ例があり、この円形ピットも墳底にたまった水分を1カ所に集め地下に浸透させる機能を持たせたものと判断できる。周辺地域では桂川町の土師地区遺跡群で弥生時代の土墳墓が調査されたがここからは円形ピットをもつものは1基も検出されていない。しかし、福岡平野の大野城市・寺尾遺跡からは、前期前半の52基の土墳墓のうち22基から底面に孔を有するものが検出されており、しかも底面に孔を有するものにのみ壺の副葬がみられるなど、より厚葬の感を受けるものである。

当該土墳墓からは遺物は出土していないが、周辺遺跡との比較や、袋状竖穴の存在等から弥生時代前期後葉に比定できよう。

2. 袋状竖穴について

竖穴上部の構造は削平のため不明である。底面の形態は円形を呈し、断面形は袋状をなすものと、円筒状のものとの2種類がある。年代は出土した土器から、1号は前期末～中期初頭、2号は前期末、3号は前期末～中期初頭、4号は前期末、5号は中期初頭に比定される。

3. 竖穴式住居跡について

住居跡は主柱穴4個で、平面の形態は隅丸方形を呈する通有のものであり、床面積は18.4㎡を測り、平均的な規模である。住居跡内からは一時期の土器が出土しており、6世紀後半代に比定できる。北西壁の中央部には石製支脚を中央部に埋め込んだ造り付けのカマドが付設される。カマドは灰黄色粘土で構築されており、カマドを含めた西半部コーナーの壁際には幅30cm、厚さ18cmの帯状の粘土が見られる。この部分に帯状に粘土を用いた意図は不明であるが、これと同じ例の住居跡が、桂川町の影塚東遺跡25号住居跡に認められる。この住居跡の場合は「カマドから北側コーナーまで、幅約20cm、厚さ約15cmの白色粘土による周堤が検出された。」と報じている。年代は6世紀後半であり、床面積は18.㎡と同時期、同規模のものである。粘土帯内からは祭祀土器は検出していない。何らかの内部付帯施設と思われるが、詳しくは分からず、今後の課題としたい。

2、第2次調査

1) はじめに

第1次調査の翌年度に行ったもので、1982（昭和57）年10月1日～14日の間、正味10日間の発掘調査であった。第1次調査の西側にあたり、道路部分のセンター杭におけるNo. 86+17～No. 88+16の区間、約880㎡を調査対象地としている。但し、この面積は道路予定地のみではなく拡張した部分、すなわち後述する1号墳の主体部周辺をも含んでいる。それは、路線内においては1号墳の周溝と石室のごく一部のみがかかっている、そのままでは爾後の道路工事にも支障を来すであろうと判断されたために、古墳の全貌を把握すべく、地権者の承諾を得て石室全体が現出するよう調査区を拡張したのであった。ここに、地権者であられる伊藤正信氏と関係各位に深甚の謝意を表すものである。

今次の調査で検出した遺構は、弥生時代の竪穴住居跡1軒（3号）、土壇1基（1号）と、古墳時代の竪穴住居跡2軒（2・4号）、掘立柱建物2棟、土壇1基（2号）、古墳1基である（第3図）。なお1号墳の両側にもう1基の古墳の周溝らしき溝をみとめて2号墳としていたが、削平が著しかったこともあり、第3次の調査の段階では詳細を確認しえていない。

なお、元福岡県文化財保護指導委員 吉田基衛氏には調査中に種々御教示をいただいた。記して感謝いたします。

2) 遺構と遺物

(1) 竪穴式住居跡

3号住居跡(図版11、第20図)

4号住居跡の北東側にて検出した円形住居跡である。検出面での直径約4.5mで、やや歪みがあるものの正円に近い。検出面から床面までの深さは40cm前後で、床面積14.82㎡を測る。床面中央のやや南寄りに、直径80cm、短径58cmで床面から最深20cmほどのいわゆる中央ピットがある。これは若干の炭・焼土があったものの火を受けた痕跡を認めていない。この中央ピットをはさんで小ピット2個があり、これが深さからしても支柱穴になるものとしてよい。この2柱穴を結んだ線を主軸とすれば主軸方位はN-60°-Eとなる。床面には他にも大小10数個のピットを検出したが、床面からの深さも浅いものが殆どであり、上屋材架構に関わる補助柱

穴とも認めがたい。周壁際にある小ピットは壁材に関わるものと考えられよう。周壁溝は南西壁沿いに1 m強の長さで一部を見るのみである。

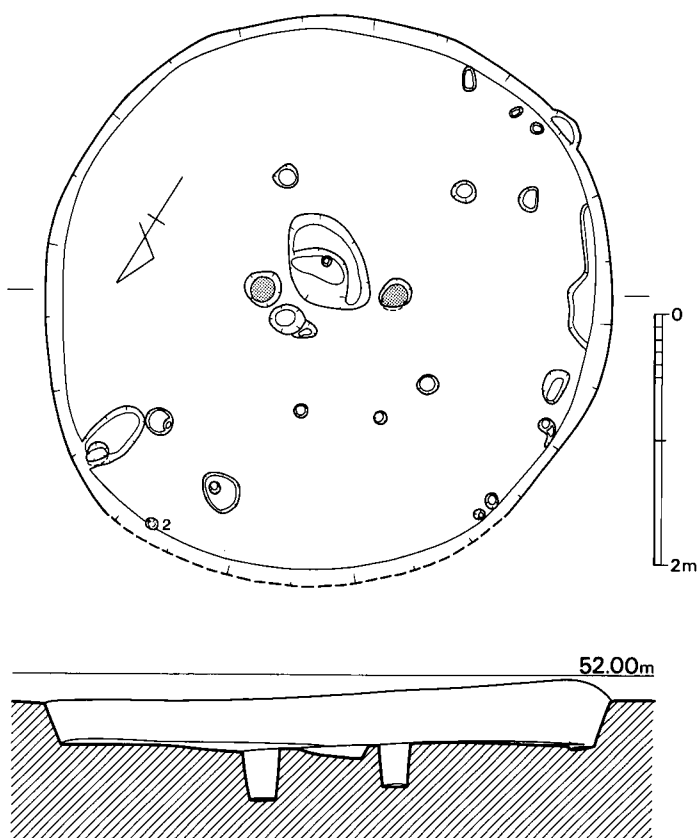
なお、北西部分の壁については攪乱を受けていたので復原して図示している。

出土遺物(図版21、第21・22図)

床面に壺片が、中央ピット内に丹塗りの甕破片があった。埋土中からは壺の破片が7個体分、甕破片が6個体分、高杯片1、鉢片1、石斧3点が出土している。石斧片1は図示不可能である。以下、特に触れないものは埋土中から出土したものである。

土器(第21図1～11)

1は長頸壺の口縁部片である。口唇部はややくぼみを持ちながら外傾し、1 cm強の下位に断面三角形の突帯を付す。この手は本来丹塗りになるものが多いが、器表面が風化しているため詳細はわからない。ナデか、ミガキを施しているのであろう。復原口径11cm。胎土精良にして黄茶褐色を呈す。



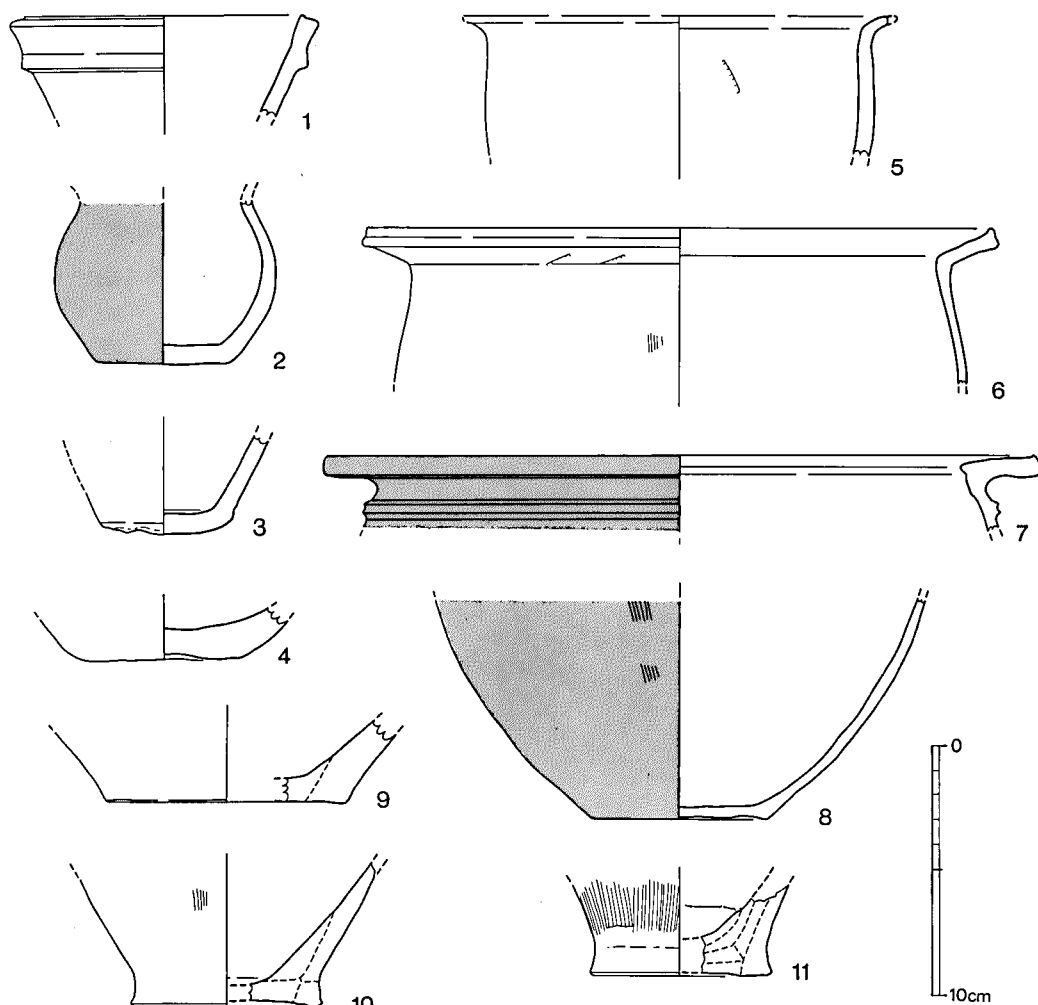
第20図 3号住居跡実測図(1/60)

2は小形の壺である。平底の底部から球形胴になり、口縁は如意状に外反する。器表の磨滅が著しいものの丹塗り磨研と思われる。壁直下の床面から出土している。底径5.2cm、胴径8.8cm。胎土はやや粗く赤褐色を呈す。

3は鉢になろうかと思われる底部である。不安定な底部をなし、全体につくりが粗い。胎土は精良で黄茶褐色をなす。底径5.2cm。

4は壺の底部であろう。分厚くやや上げ底気味となる。胎土には砂粒がきわめて多い中に角閃石を含み、淡茶褐色を呈す。

5は如意形に開く口縁を持った甕である。口縁端部は欠失するも図示のようになろう。器表面の荒れが著しく調整の詳細は不明。胎土は粗く、茶褐色を呈す。復原口径11.3cm。



第21図 3号住居跡出土土器実測図(1/3)

6も甕の破片である。口唇部は内外ともに回転ナデの結果としてやや張り出しており、内面についてはいわゆる跳上口縁となる。器壁は薄く、胴の張りは口径を上回ることではない。外面に刷毛目の痕跡を認めるも、全体に磨滅が著しく調整はよくわからない。復原口径24.6cm。金雲母片を含む。中央ピット内から出土している。

7はいわゆる鋤先口縁で、口唇部が跳上状となる甕である。胎土はやや粗く、黄茶褐色をなす。外面は丹塗りを施す。口縁下のM字状突帯はあるいはもう1条あるのかも知れないが定かでない。復原口径28.4cm。

8は中央ピット内から出土したもので、壺の底部らしく思えるがあるいは6と同一個体になるかも知れない。薄手のつくりでスマートな器形になるものと思われる。外面は刷毛目のあとナデており、また丹塗りの痕跡を認める。砂粒が多い中に角閃石・金雲母片を含む。いま黄橙色をなす。復原底径6.8cm。

9は壺の底部と思われる破片である。外面はミガキで、内面はなでている。復原底径9.6cm。

10は甕の底部片で復原底径7.6cm。外面に刷毛目の一部が残存す。

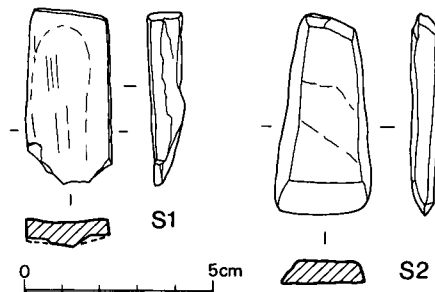
11も甕の底部片で復原底径7.1cm。薄い粘土帯を貼り合わせて成形している。

石器(第22図1・2)

1は偏平片刃石斧であったものを砥石に再利用している。現存長46.6cmで、本来の長さも5cm強しかなかったものと思われる。粘板岩製。

2は緑色をした片岩系の石を加工して扁平片刃石斧としている。全長5.3cm、刃部幅2.4cm。

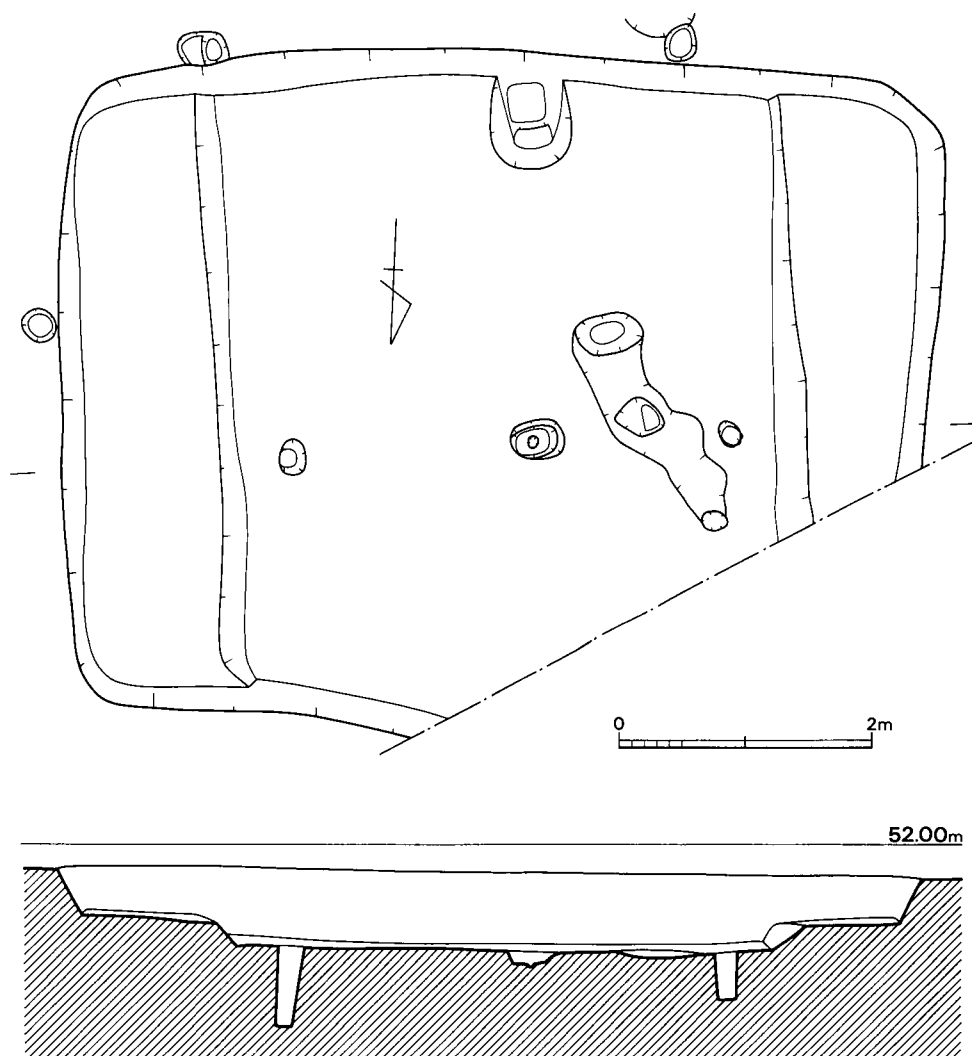
出土した土器をみるにおいては、型式的に古いものと新しいものとが混在しているが、床面(2)、中央ピット内(8)出土の土器については弥生中期前半期に比定してよく、この時期までは住居として機能していたと思われる。その後中期の中頃から後半の頃にもまだ十分に埋まりきっていなかったと考えられよう。



第22図 3号住居跡出土石器実測図(1/2)

4号住居跡(図版11、第23図)

3号住居跡の南西にある。検出面での長軸6.8m、短軸5.2mほどの長方形プランを呈するが、北側部分は調査区外にかかる。短軸両辺に最大幅1.1mの削り出しのベッド状遺構がある。このベッド状遺構を含めた床面積は復原で31.61㎡となる。主柱穴はベッド状遺構の下端から40cmほどの所に対峙して2個を見るが、住居跡の全体プランからすればやや北に偏している。この2本の主柱穴を結んだラインを主軸とすればその方位はN-84°-Eとなる。2主柱穴の中心よりやや西寄りにある小さなピット中に若干の焼土と炭化物が入っていた。炉としてよいだ



第23図 4号住居跡実測図(1/60)

ろう。南壁中央付近には75×65cmほどの偏円形プランで二段掘り状となる土壇がある。最深部で床面から50cmの深さがある。いわゆる屋内土壇とされるものである。

なお、この住居跡の中央やや西寄りに攪乱坑があり、その一部が床面にまで及んでいた。

出土遺物(図版21、第24・25図)

床面に密着した遺物はなく、炉・屋内土壇からも出土していない。全てが埋土中から出土したものであり、須恵器5個分、土師器10余個体分、弥生土器3個体分、鉄器片をみる。

土師器(第24図1・2・5)

1は甕の口縁～肩部片である。遺存状態が悪くもろい。外面胴部は右斜めのタタキを施している。口縁は内外とも刷毛目のあとをなで、内面胴部は刷毛目が見える。胎土粗く黄褐色を呈す。1/6ほどが遺存し、復原口径20cm。弥生時代終末から古墳時代初頭にかかる頃の所産か。

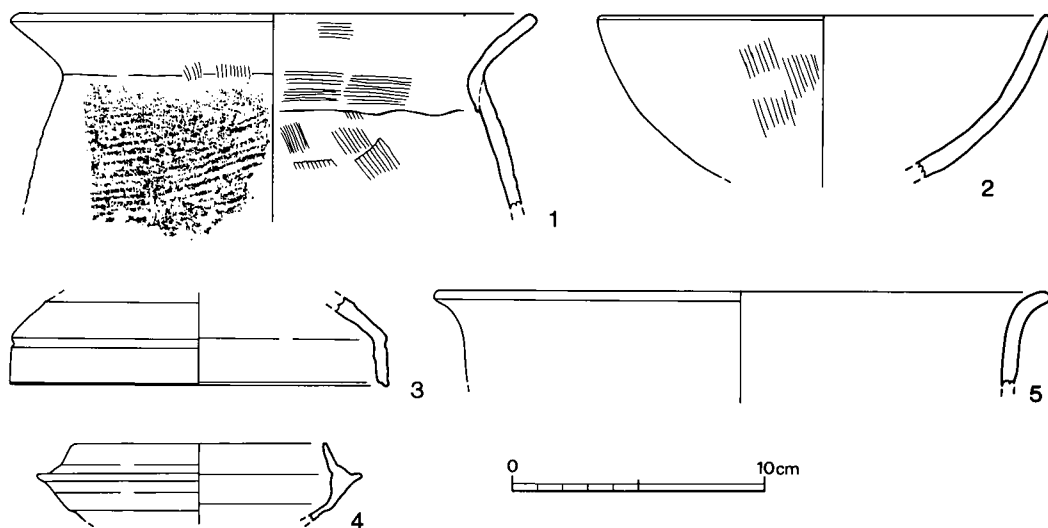
2は鉢で外面に刷毛目を施し、内面はなでる。胎土中に砂粒多く角閃石を含む。1/6ほどの遺存で復原口径18cm。弥生終末期の土器としてもよい。

5は小破片にして全形を伺い知れないが、甕か甔になるのであろう。磨滅が著しくて調整は不明。金雲母片を含む。復原口径24.2cm。やや薄手である点が気がかりだが、6～7世紀代か。

須恵器(第24図3・4)

3は杯蓋で口縁内面にくぼみ状の段を持ち、受部と天井部との境は凹線状となる。天井部外面の一部にヘラ削り部分があるほかは回転ナデとナデを施す。復原口径15cm。6世紀中～後半の所産か。

4は杯身で、内傾した立上り端部は丸くおさめている。器壁の厚みからすると受部付近はかなり肥大したつくりとなる。残存部分は回転ナデとナデのみでヘラ削りは見えない。復原で口

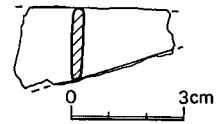


第24図 4号住居跡出土土器実測図(1/3)

径10cm、受部径17.8cmを測る。6世紀末～7世紀初頭の所産か。

鉄器(第25図)

形状不明の鉄片である。刀子か鎌とするには刃部が見当たらない。茎とするには幅広きにすぎる。厚さ0.25cmで、いまは不明鉄片とする。



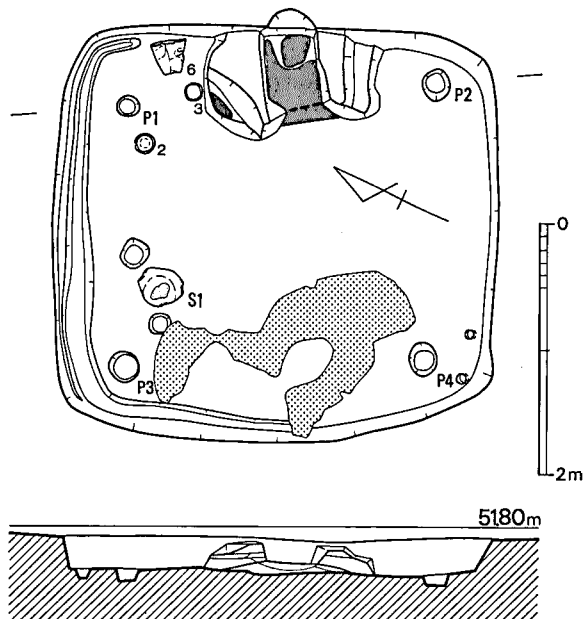
第25図 4号住居跡
出土鉄器実測図(1/2)

4号住居跡はこの住居の造営期に関わる遺物が知られないために時期比定に難があるが、1・2の土器をもって弥生終末～古墳初頭には廃棄されたものとしたい。他の新しい土器はこの住居が埋まりきっていなかったための流入か、または攪乱時の混入と思われる。

2号住居跡(図版12、第26図)

1号墳周溝と接するが如きにあるも切合いはない。1次調査で発掘した1号住居跡とは約9m離れて南西に位置し、カマドを東向きに有する。

住居の中心を通る軸線でみると南北3.55m、東西3.26mのやや長方形気味となるが、ほぼ方形プランとしてよい。床面はかなり踏み固められていた。主柱穴は各コーナーに近い所に4本があり、P1—P2間2.45m、P1—P3間2.05m、P3—P4間2.4m、P2—P4間2.2mを測る。各柱穴とも床面から10cmほどしかなく浅い。P2はその掘り形と東壁との間が10cmもない。北壁直下でなくやや内側に浅い周壁溝があり、一部が東壁・西壁にも及ぶ。周壁溝・カマドをも含めた床面積は9.90m²、P1～P4を結んだ主柱穴間エリア面積は5.18m²を測る。カマドを通る主軸方位はN-65°-E。



第26図 2号住居跡実測図(1/60)

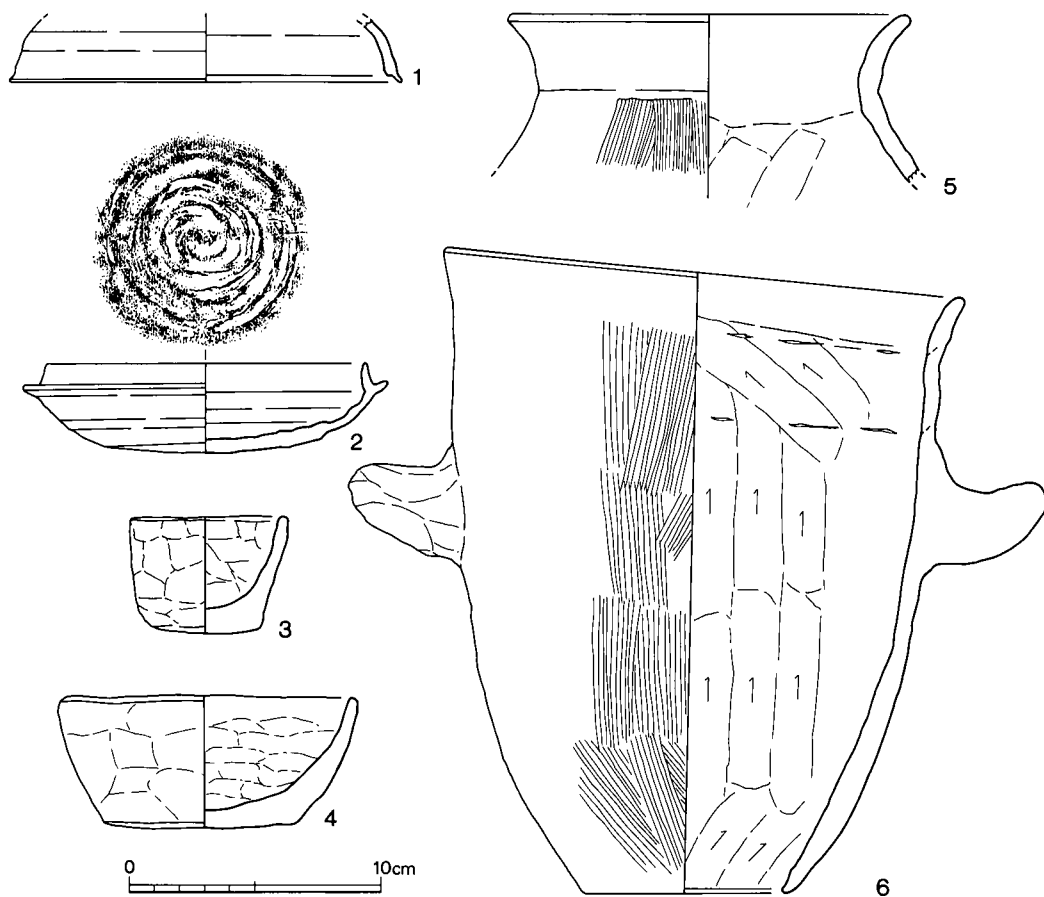
カマド やや黄色味を帯びた灰白色粘土を用いて構築されている。両袖ともに2段状に高さ15～20cmが遺存していた。焚口幅30cm、奥壁幅40cm、奥行70cmを測る。カマド前面にも構築したのと同じ粘土が広がっていた。カマド内には焼

土が5cmほどの厚さで見られた。煙出しは住居外へ半円状に15cm度突き出している。なお構築している左袖内にも焼土が見られたのでつくりなおしを行ったのであろう。カマド内から須恵器杯蓋片1、土師器壱片1、同手捏ね鉢1、土製品1が出土している。

カマド対面粘土 P3とP4に挟まれた位置で、カマド本体に使われた粘土と同じ黄色味を帯びた灰白色粘土が拡がっていた。西壁に接する部分は一部で、他は住居の内側へ多くが存する。遺存した粘土の最も高い所で床面から10cmほどを測る。

出土遺物(図版21、第27・28図)

カマド内からは前述のと通りの遺物が出土した。他にカマド左袖の北・北西側の床面に、土師器甕(6)が横だおしにて潰れた状態で、土師器手捏ね鉢(3)が正立で、須恵器杯身(2)がやはり正立で出土した。いずれも完形もしくはそれに近い。またP1・P3間のP3寄りの床面に作業台石に使ったと思われる石(S1)が出土した。埋土中には土師器の甕の破片とサヌカイト



第27図 2号住居跡出土土器実測図(1/3)

片1点が存したのみである。

須恵器(第27図1・2)

1はカマド内出土の杯蓋片である。1/4程度の残存で復原口径15.6cm。口唇部内側に段をもつが、外面の口縁部と天井部の境には僅かに稜が入る程度である。胎土良く焼成は普通。灰白色を呈す。内外とも回転ナデを施す。

2は床面出土の杯身で、受部の一部を欠くのみで完形である。体部内面にはらせん状の当具痕があり、その上をナデる。立上り周辺は回転ナデ、底体部はナデにて調整する。全体にやや薄手のつくりである。胎土・焼成ともに良好。黒ずんだ灰色をなす。口径12.7cm、受部径14.4cm、器高3.5cm。

土師器(第27図3～6)

3はカマド内出土の手捏ねの鉢で約4/5が残存する。内外とも指頭によるナデ痕が著しい。胎土粒く焼成はあまい。口径6.3cm、底径4.2cm、器高4.7cm。

4は床面出土の手捏ねの鉢で、3と大きさは違えどもつくりは同じである。ほぼ完形で、口径11.8cm、底径7.7cm、器高5.2cm。

5はカマド内出土の甕で1/6ほどが残存す。肩部の張らない長胴形になろうか。口縁内外は回転ナデ、内面はヘラ削り、外面は刷毛目を施す。胎土は粗く、焼成不良。復原口径16cm。

6は床面にひしゃげて出土した甕である。復原すると略完形になったが遺存状態は悪い。口縁内外と底透孔部は回転ナデ、内面は上方へのヘラ削り、外面は刷毛目を施す。砂粒をきわめて多く含む中に角閃石も混じる。焼成はあまく黄褐色を呈す。口径20.7cm、底径8cm、器高24.9cm、把手部径27.8cm。

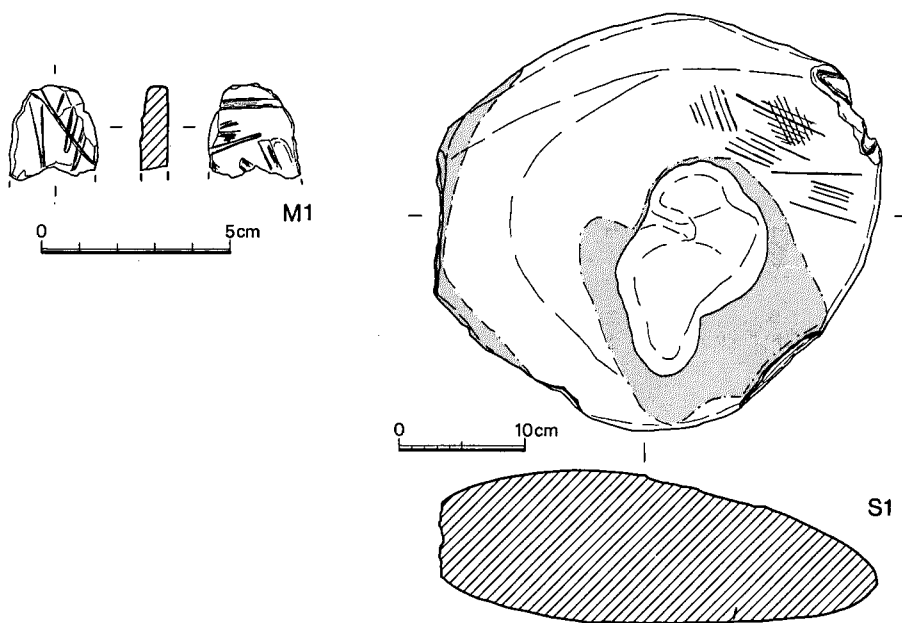
土製品(第28図M1)

カマド内から出土したもので、用途は不明。ワラ混じりの粘土板としてよいが、片面は起伏が多いものの他面は平坦である。表裏にワラの圧痕多数を見る。現存長2.5cm、厚さは最大で0.8cm。祭祀関連のものとも考えるも定かでない。

石製品(第28図S1)

作業台石に使ったと思われる石で、33.8×31.4cmの偏円形状を呈し、最大の厚さが11.4cmであるため偏平な感を抱かせる。図示した面を表面とすると、表裏ともに滑らかな磨れた面をしているが、表面には条線の擦痕が一部に見られる。表面の中央からやや偏った所に16.5×11cmほどの範囲で敲打による浅いくぼみがあり、この部分は後の使用により磨れている。側面には3ヶ所の打欠き(敲打)部分があるが、いずれもその後に磨れている。図でスクリーントーンをかけた部分は熱を受けて赤変している。これは裏面には見られない。玄武岩か。

この2号住居跡はカマド内及び床面から出土した土器からすれば、6世紀後半には廃絶されたものと思われる。1号墳とはその周溝ときわめて近接していることから同時併存は考えら



第28図 2号住居跡出土遺物実測図(M1:1/2、S1:1/6)

れず、また1号墳墓道出土土器の示す時期からも、古墳の方が新しいことを示している。この2号住居跡の埋土中に殆ど遺物をみなかったことは、古墳を築造するに際してこの住居が廃絶され埋められたとも考えられよう。

住居内のカマド対面に見られた粘土塊は、甘木市立野遺跡^{註1}の竪穴住居跡でも多数見られたところである。また、カマド内から出土した板状の土製品も立野遺跡では多数出土しており、地域を異にしながらも6C後半代における住居のあり方に類似性が指摘される。

註1

福岡県教育委員会 「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告」(2)・(8) 1983, 1986

(2) 掘立柱建物

1号掘立柱建物(図版13、第29図)

4号住居跡のすぐ南にある2間×2間の総柱の建物である。2号土壌の溝状の部分と重複し

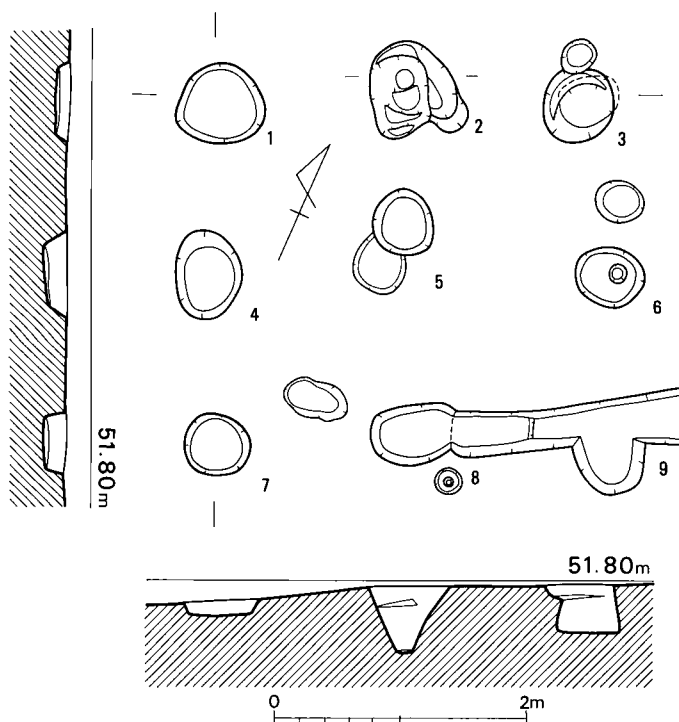
ているが、先後関係はわからなかった。東西方向を主軸にとれば、その方位はN-66°-Eとなる。P1～P2間1.5m、P2～P3間1.5m、P1～P4間1.4m、P4～P7間1.3m、P7～P8間1.6m、P8～P9間1.5m、P3～P6間1.4m、P6～P9間1.4mなどと、柱間は全てが一定ではない。P5はやや西に偏って存する。各柱穴の深さは検出面からP1・10cm、P2・51cm、P3・35cm、P4・15cm、P5・6cm、P6・18cm、P7・16cm、P8・18cm、P9・18cmを測り、いずれも決して深いとはいえない。隅柱を結んだ平面積は8.94m²。

出土遺物は柱穴内から弥生土器片4点を見たものの、それがこの建物に伴うとは考えにくい。他の遺跡におけるあり方等から、1・2号住居跡等が営まれた頃に併存していたと考えたい。

2号掘立柱建物(第3図)

1号掘立柱建物の西側3mほどの所で柱穴3個を確認した。1号と同様の方向でもって総柱建物になるとすれば、その柱筋は1号から南に1m前後ずれてほぼ平行になる。部分的な検出のみで多くを語れないが、おそらく1号掘立柱建物と同一の時期に併存したのであろう。柱穴の深さは検出面より測って、北から順に27cm、26cm、23cmである。

なお、次回の調査時においては、一部の削平もあって残余の柱穴を確認しえなかった。

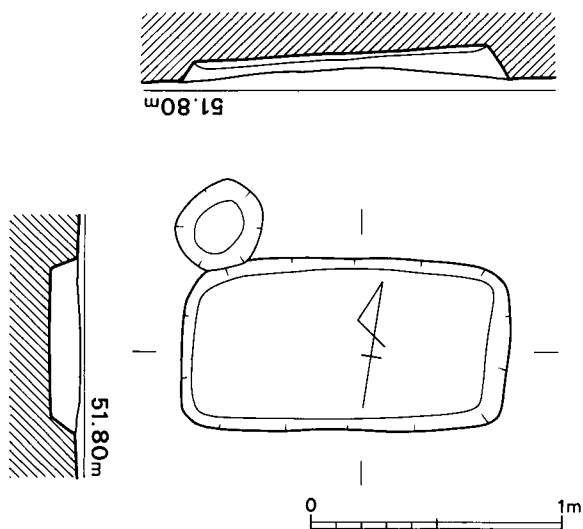


第29図 1号掘立柱建物実測図(1/60)

(3) 土壌

1号土壌(図版13、第30図)

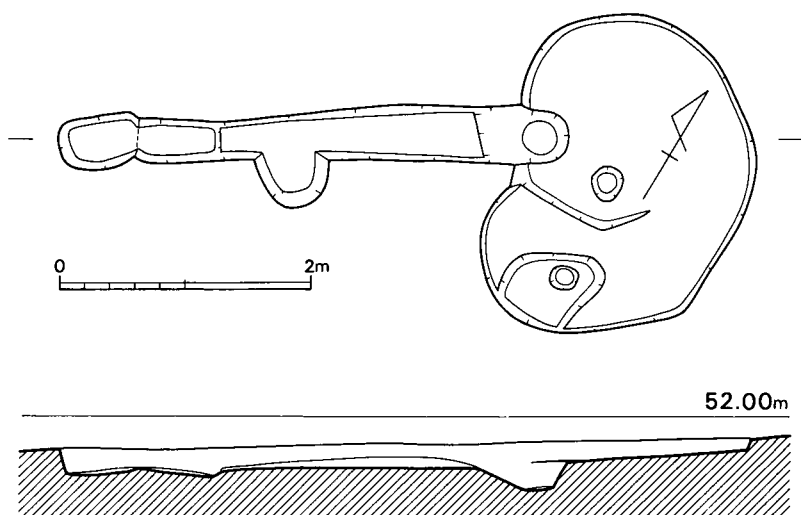
2号土壌の南側にて検出した。長辺1.32m、短辺0.68mの長方形プランをなし、主軸方位はN—82°—E。深さは0.12mと浅い。形状としては土壌墓らしくもあるが、断定できない。弥生土器片若干が出土している。床面積0.66m²。



第30図 1号土壌実測図(1/30)

出土土器(第33図7)

跳上口縁になる甕の小破片である。磨滅が著しいがナデにて調整しているらしい。弥生中期前半に比定する。



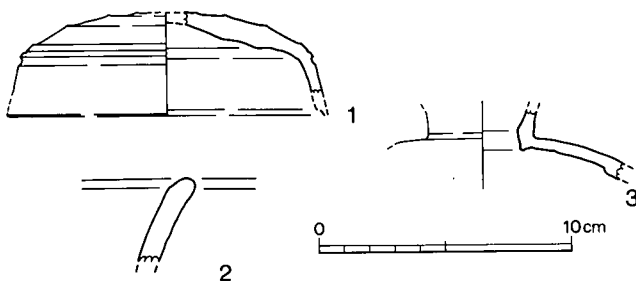
第31図 2号土壌実測図(1/60)

2号土壇(第31図)

4号住居跡と1号土壇との中間にある。南北2.6m、東西1.9mの楕円形状の浅い土壇に、幅0.35～0.45m、長さ3.5mの溝がとりついている。この溝状の部分と1号掘立柱建物のP8・P9とが切合うが、先後関係は把握できなかった。どのような用途に供されたものか不明。

出土遺物(第32図1・2)

1は須恵器杯蓋の破片である。
⅓ほどが残存する。口唇部を欠くが、図のように内側に段を持つであろう。外面の口縁部と天井部の境には沈線が入る。天井部外面は回転ヘラ削り、同内面はナデ、他は回転ナデを施す。
復原で口径12.8cm、器高4.1cm。



第32図 土壇その他出土土器実測図(1/3)

2は土師器の甕か甑の口縁部である。

他は須恵器片2、土師器片若干が出土しているものの図示しえない。

(4) ピット

柱穴様の小ピットで土器の出土したものがある。P1・P2は遺構検出面から30cmほどの深さをもつが、P3は10cmにも満たない浅いものである。これらが何らかの特殊なピットであるとは認められない。

P1出土土器(第33図1・2)

1は壺の口頸部片である。接合しない同一個体の破片を図上にて復原した。肩部との境に2条の沈線を入れる。胎土は粗く、茶褐色を呈する。器表の風化著しく調整は不明。復原口径21.7cm。2は壺の頸部～肩部片で、その境目に断面三角突帯を付している。突帯の下に一条の沈線を入れ、更にその下方に弧文をヘラ描きする。胎土は粗く角閃石を含む。突帯部の径14cmを測る。1・2ともに中期初頭に比定しうる。

P2出土土器(図版22、第33図3・4)

3は壺の底部である。分厚く、やや上げ底になる。底径8.2cm。4は甕の底部で高台状の上げ底となる。外面は刷毛目が著しい。底径7.6cm。3・4ともに中期初頭の所産と考えられよ

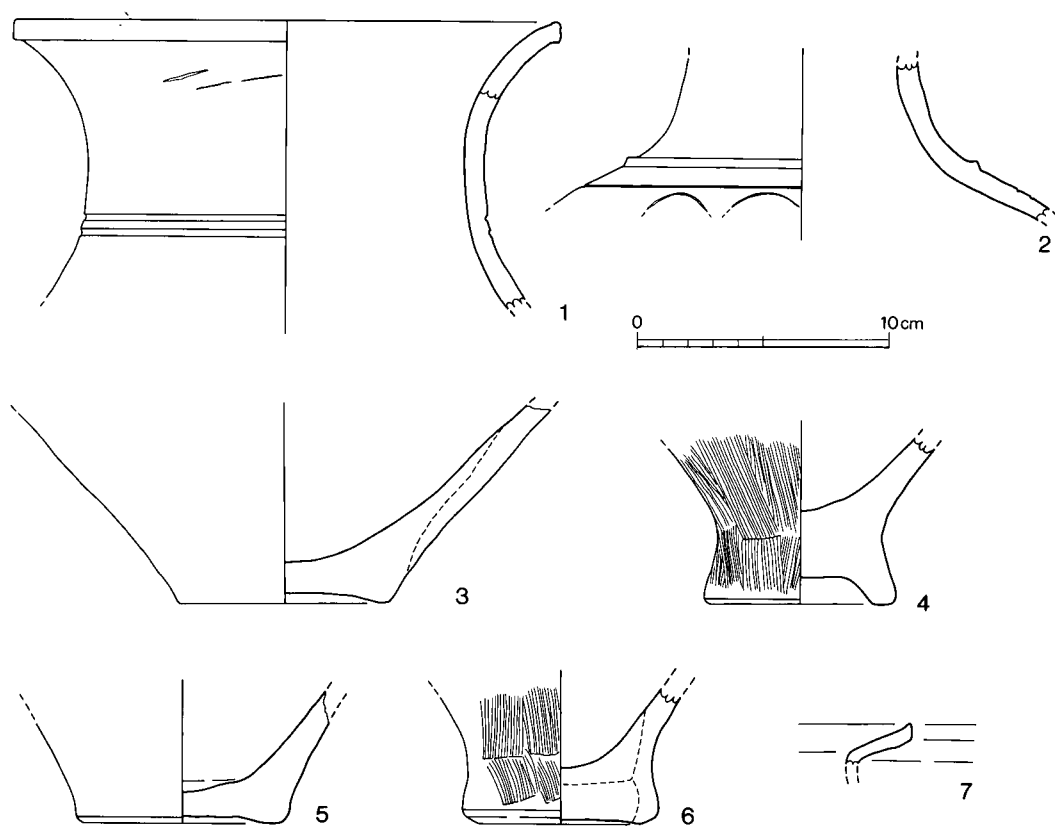
う。

P 3 出土土器(図版22、第33図 5・6)

5は甕の底部であろう。やや上げ底になる。内外ともナデかミガキのいずれかの調整を施す。底径8.4cm。6はやや上げ底気味のどっしりした厚みのある底部である。甕になろう。外面は刷毛目の上をナデている。胎土中に角閃石を含む。底径7.7cm。5・6ともに中期初頭～前半期と考える。

P 3・P 4 出土土器(第15図 3)

1号墳周溝のP 4と2号墳周溝内のP 3とから出土した須恵器が接合している。平瓶の破片で、頸部径4cmを測る。



第33図 土壙その他出土弥生土器実測図(1/3)

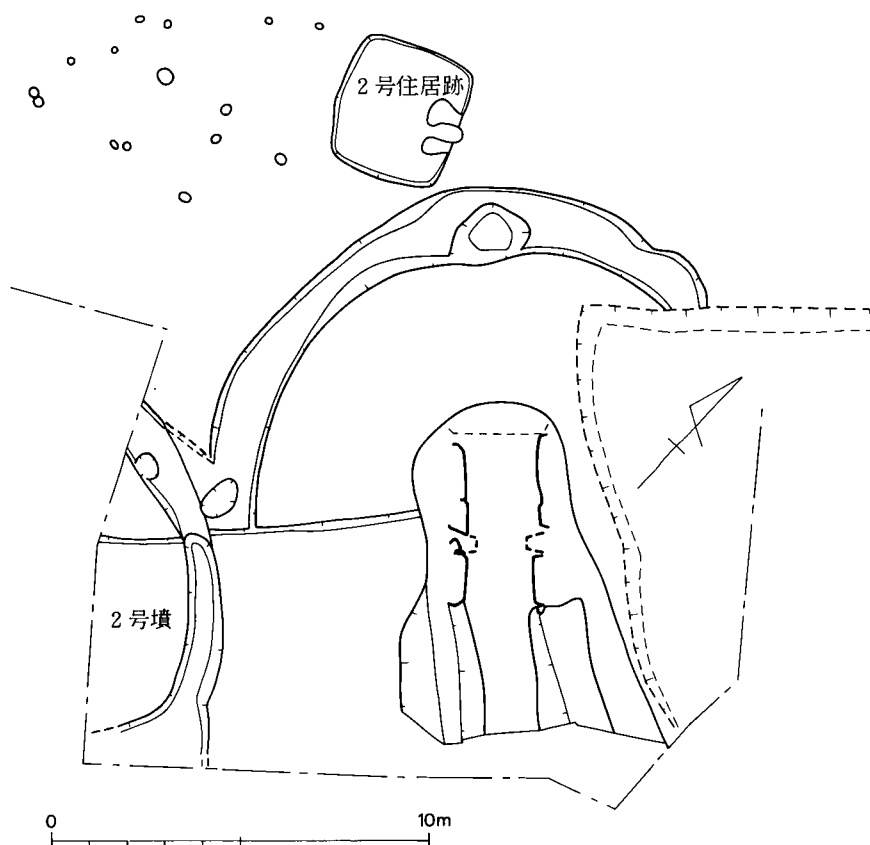
(5) 古墳

1号墳(図版10・14、第34図)

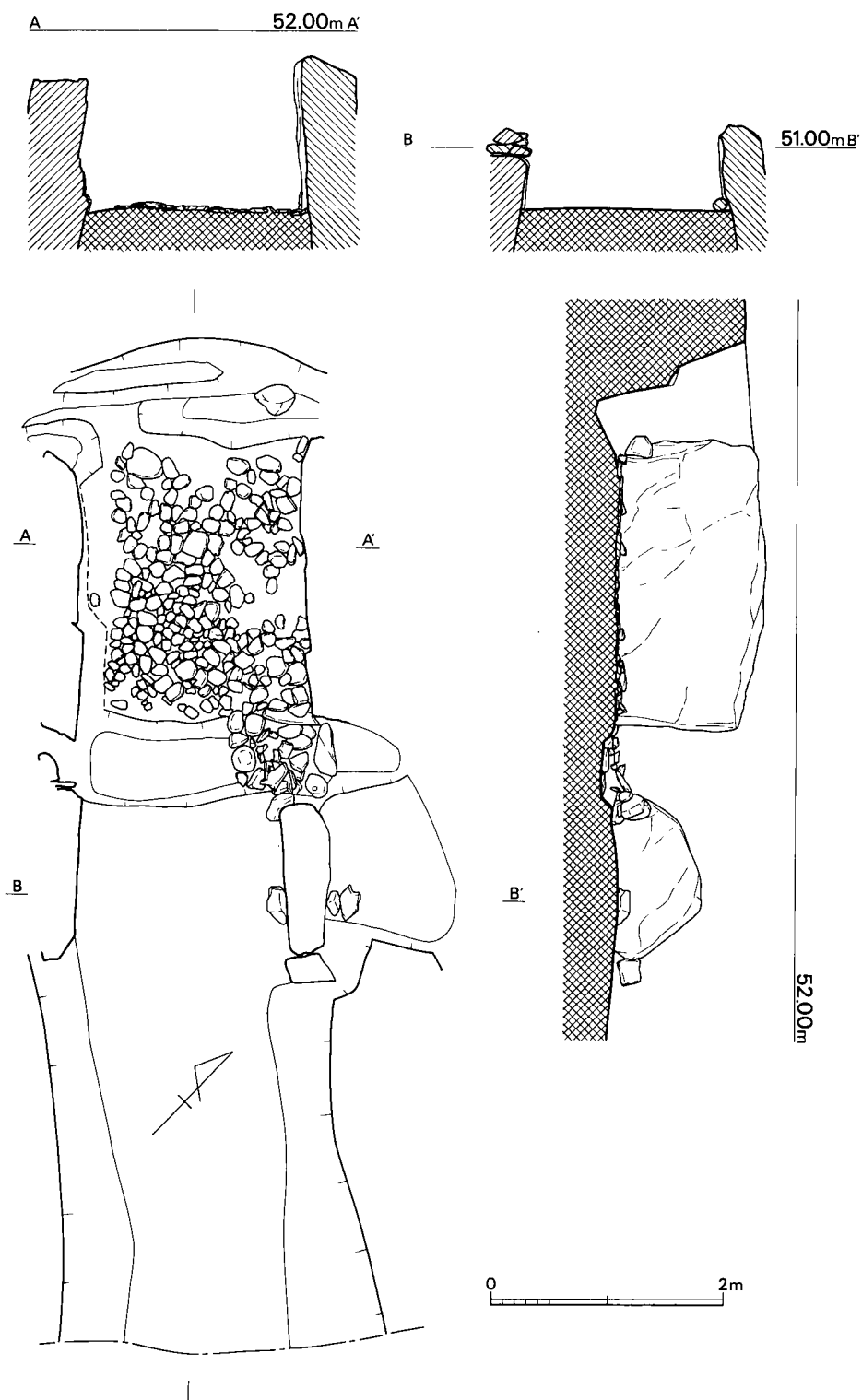
南東に開口する単室の横穴式石室を持つ円墳である。

調査着手時には平坦地から南へ向かって低く段のつく地形であり、古墳の存在など予想だにできない様相であった。しかし、地元の人のお話では大きな石室の古墳があって、子供の頃その中で遊んでいたとの事であり、果たして“このあたりにあった”という場所から古墳を検出したのであった。

周溝は石室の後背部のみに全周の $\frac{1}{2}$ ほどが残存し、後世の整形による段部で途切れる。幅1.0～1.5mで最も深い所でも検出面から10cmほどしかない。もともとが墓道につながるように全周していたか定かでない。周溝の中心は玄室の中心と一致し、半径が7.8mを測るので直径



第34図 1号墳測量図(1/200)



第35図 1号墳石室実測図(1/60)

15.6m程の円墳とされよう。

石室掘り形は隅円長方形で墓道掘り形へと接続する。

石室は奥壁と両袖石・仕切石が抜かれており、両側壁とも腰石1枚を残すのみである。羨道の腰石も大きく、巨石墳の部類に入れてもよいほどである。主軸方位 $N-45^{\circ}-W$ 。

玄室は、奥壁の抜き跡・下端ライン（内側）と玄門の仕切石抜き跡中心との間が3mで、奥壁幅・玄門側の幅・中心部幅とも約2mを測り、長さ対幅が3:2の長方形プランをなす。奥壁はいまはないがやはり1個の大きな腰石を用いていたであろう。右側壁の腰石は長さ2.4m、厚さ0.35m、高さ（幅） $1.4m + \alpha$ の直方体をなす。左側壁はいま2つに割れているが、長さ2.4m、厚さ0.3m、高さ $1.3m + \alpha$ で右側壁とほぼ同形同大の石材である。床面は大小さまざまな扁平石を敷きつめていた。

玄門は石が抜かれているため不明とせざるをえないが、右側に残存する礎石の上に袖石が載っていたとし、左袖石も同様であったとするならば、玄門幅は60cmほどとなる。しかし、右袖石下の根石のうち中心軸側にある円礫3個を仕切石下にあったものとして、袖石の突出幅から除外して考えると玄門幅は1mとなる。むしろ後者の方が石室の実態に符号しているように思える。

羨道は左右側壁とも1枚の腰石が残るのみで他は残存しない。右腰石がやや内側に張り出して置かれているものの、当初は玄室腰石プランの延長上に置くことを意図していたと思われる。羨道部分には敷石はない。羨道部分を含めた石室全長は4.85mを測る。

墓道は長さ3.2mまでしか確認していないが、古墳の規模を考えると、もうそれほど長くは延びないであろう。下端の幅1.3~1.5mでほぼ平坦面をなす。



第36図 現地の説明会風景

出土遺物（図版22・23、第36～39図）

主に墓道・羨道・玄室から多くの遺物が出土したけれども原位置を留めるものはない。古墳築造以後、時代を経つつ何度かにわたって再利用されたらしく、さまざまな遺物を見る。図示したものを出土箇所毎に列挙すれば次のようである。いずれも埋土中であり、重複したものは双方からの出土である。

(墓道)	須恵器	1～6、9～13、15
	土師器	16～20
	瓦器	27～30
	瓦質土器	32
	磁器	34
(羨道)	須恵器	8
	瓦質土器	32
(玄室)	須恵器	7・14
	土師器	20～25
	瓦器	26
	瓦質土器	31・32
	陶嚇	33
	鉄器	1～7
(石室掘り形)	砥石	S 1

以上のうち、この古墳の築造当初前後に関わるものは1～6、8～15、16～20であろう。

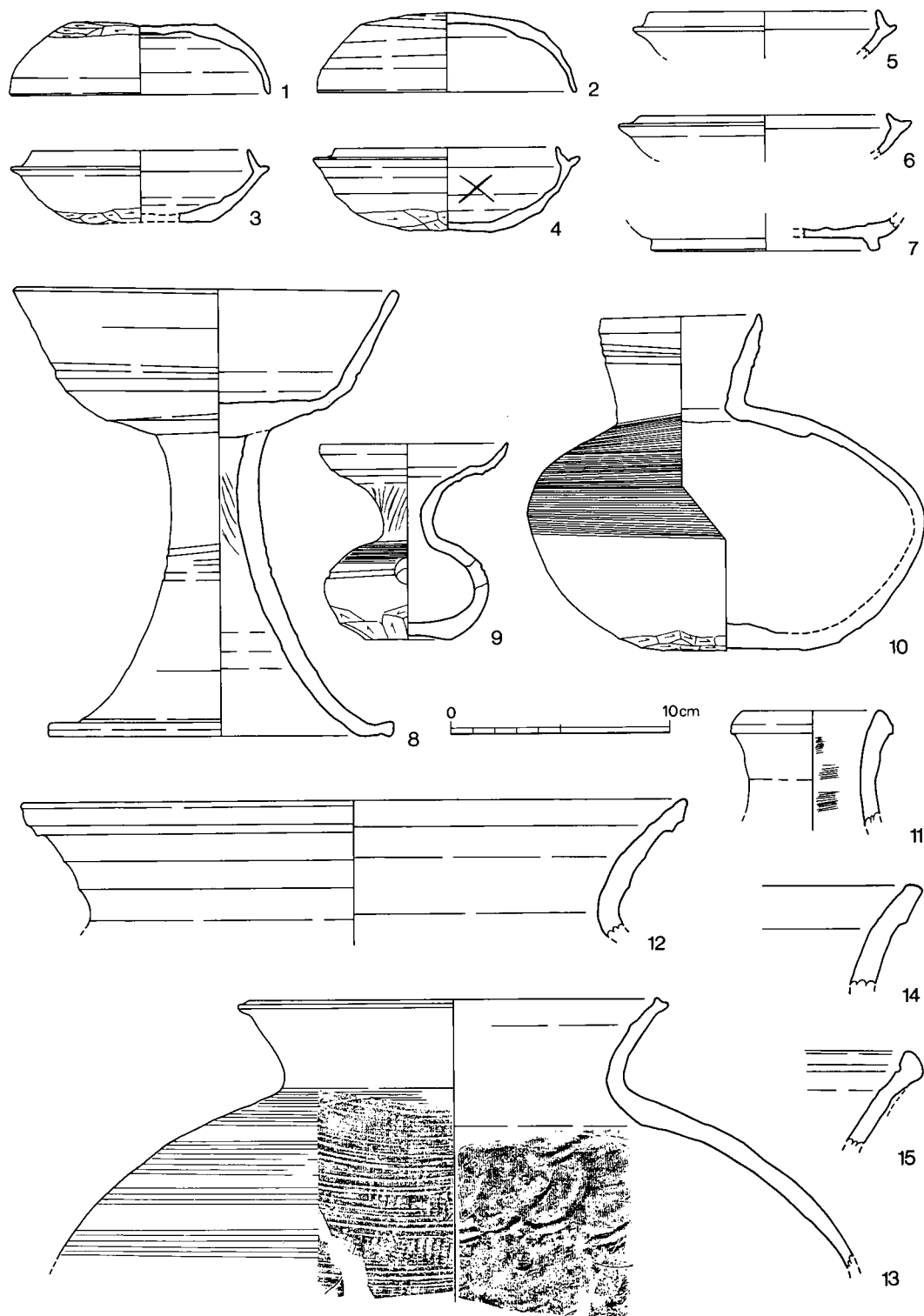
須恵器(第36図1～15)

1・2は杯蓋である。いずれも細身のつくりで1/2ほどが残存す。1は天井部外面が手持ちヘラ削りを行う。口縁部内面には鉄錆が付着している。口径11.9cm、器高3.3cm。2は天井部外面が回転ヘラ削りとナデを行う。口径11.8cm、器高3.7cm

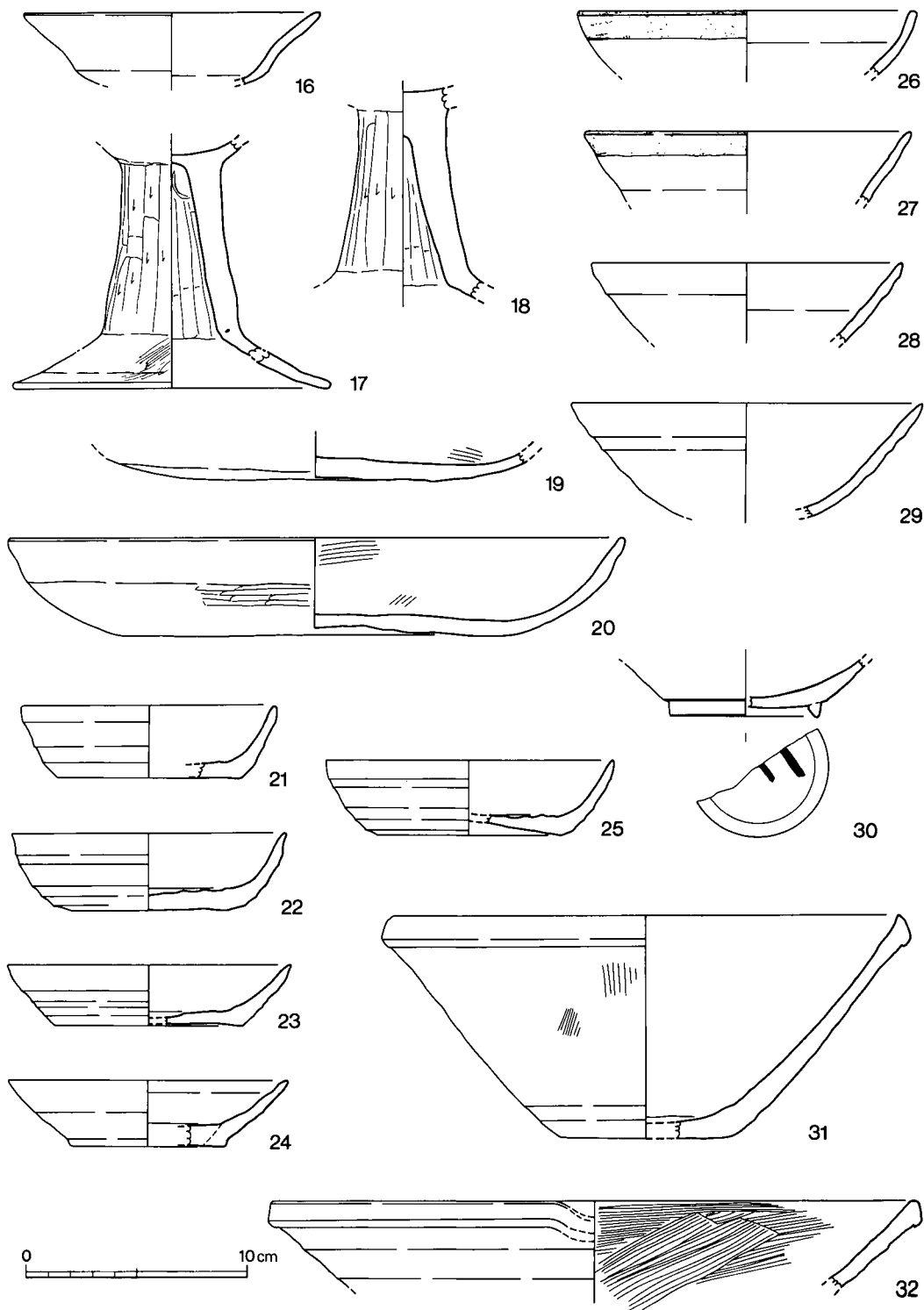
3～6は杯身である。3・4は底体部が手持ちヘラ削りを行う。3はまほど残存し、口径9.9cm、受部径11.8cm、器高3.3cm。4は口縁の一部を欠くのみで完形としてよい。体部内面にヘラ先でこすった如き暗文風の×印がある。口径10.2cm、受部径11.2cm、器高3.8cm。5は1/8ほどの小破片で復原口径10.4cm。6は立上りがありあまりないもので、焼成不十分である。1/6が残存し復原口径11.2cm。

7は碗底部片である。1/3が残存し復原底径10.3cm。

8は無蓋高杯で、一部欠失部分があるものの完形としてよい。全体に均整のとれたプロポーションを呈する。杯部は体部中央付近で沈線状の段がついて口縁が外反する。底体部のみ回転ヘラ削りで他は回転ナデを施す。脚部のラッパ状に大きく開く裾部は踏んばりのきいた形状を



第37图 1号墳出土土器実測図①(1/3)



第38図 1号墳出土土器実測図②(1/3)

なす。筒部中央に2条、所によっては3条の沈線をもつ。回転ナデを施す。口径17.2cm、裾部径15.7cm、器高20.5cm、杯部高6.6cm。焼成あまく灰白色を呈す。

9は小形の甕で口縁のごく一部を欠するも完形品。球形胴の底部はヘラ切り離し後にナデ、その直上は手持ちヘラ削りを行う。体内部には注口の穿孔部分の粘土塊が入っており、振るとカラカラと音がする。口径8.5cm、胴径7.5cm、底径3.8cm、器高9.0cm。焼成良好で全体に灰被り状となる。

10は略完形の平瓶。平底に近い部分はナデで、その上方は手持ちのヘラ削りを行う。胴部上半はカキ目が著しい。口頸部には沈線が3条入る。砂粒多くして胎土は粗い。紫灰褐色を呈す。口径7.2cm、胴径18.1cm、器高15.4cm。

11は生焼けの口縁部であるが、横瓶になろうか。黒灰色を呈する。1/3が残存し復原口径6.2cm。内面には刷毛目が残る。

12～15は甕の破片である。12は1/10ほどの小破片であるが復原口径30.4cm。内外とも回転ナデを施す。13は張りのある肩部を持ち、口頸部は細身のつくりになる。口唇部は少しくぼむ。外面は粗いカキ目の上に灰を被る。内面は同心円当具痕の上をナデる。1/4が残存し復原口径18.6cm。14は口縁の断面が長方形になる。復原口径は29cmほどになろうか。15は口縁内面に沈線を持つ。

土師器(第37図16～25)

16～18は高杯片である。16は器表の磨滅が著しく調整の詳細は不明だが内外とも回転ナデらしい。1/6ほどが残存し復原口径13.4cm。17・18は脚部でよく似たつくりである。筒状部の内面は横ヘラ削り、同外面は上から下へのヘラ削りを施す。茶褐色を呈す。17の復原裾部径14.4cm

19・20は盤になろうか。いずれも若干の上げ底となる。外面は横ヘラミガキの上をナデ、内面は刷毛目の上をナデている。19が約1/3残存し、復原口径28.8cm、器高4.5cm

21～25は鎌倉期の所産になる杯である。全て糸切り底で、体部は回転ナデを施す。胎土は良質であるも焼成はややあまく、基本的に黄橙色を呈する。22・23は内外面に黒ウルシを塗っていた可能性がある。21は1/5が残存し復原口径11.6cm、底径8.2cm、器高3.3cm。22は2/3残で復原口径12.4cm、底部7cm、器高3.5cm。23は1/5残で復原口径12.8cm、底径8.5cm、器高2.7cm。24は1/5残で復原口径12.6cm、底径7cm、器高3cm。25は1/2残で復原口径13cm、底径8.2cm、器高3.4cmを測る。

瓦器(第37図26～30)

いずれも碗で、胎土は良質なるも焼成がややあまい。26・27は外面の口縁下1cm強までを墨らしき黒色塗料で塗っている。30は外底部に墨書の一部が見られるもののどういう文字かは不明である。26は1/8ほどが残存し復原口径15.3cm。27は1/6残で復原口径14.2cm。28は1/6残で復口径14cm。29は1/5残で復原口径15.8cm。30は1/2が残り高台径6.7cm

瓦質土器(第37図31・32)

鉢形をなす瓦質の土器である。31は胎土が粗く、焼成はあまい。外面は刷毛目の上をナデ、内面はナデらしい。こね鉢かとも思えるが、外面に煤が付着しているのあるいは別の用途に供したものか。1/5程度が残存し復原口径23cm、底径7.7cm、器高10.1cm。32は片口になる1/6ほどの破片である。外面はナデらしく、内面は刷毛目を施す。内面刷毛目は凹凸の深みがないのでこね鉢とした方が妥当か。

陶器(第38図33)

摺鉢の破片である。胎土は精良で焼成良好。褐色釉がかかる。内面に櫛目をもつ。内面の底部と体部の境目に重ね焼きの時の砂が付着している。1/5ほど残存し復原底径11cm。

磁器(第38図34)

黄緑色の釉がかかるいわゆる珠光青磁で、底部と体部下半の一部は無釉である。内面は櫛目と弧線、外面は櫛目を施す。胎土は灰白色にて精良、焼成良好。1/6ほどの残存で復原高台径5cm。

鉄器(第39図1～7)

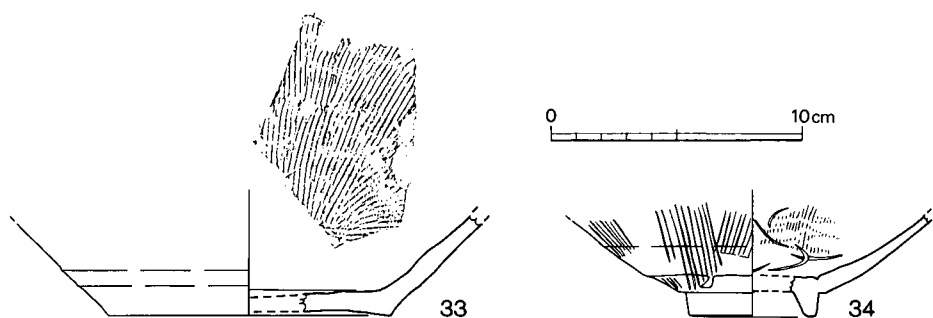
本来石室に伴うのは1～3のみであろう。1・2は鏃である。1は片丸造で現存長7.5cm。2は茎片で棘篋被のすぐ下部に糸を巻いている。現存長10.7cm。3は鞍橋の縁金具か。現存長1.8cm、幅0.55cm。鉋は見えない。

4・5は犬釘と称されるものである。4は全長7.8cm、5は全長6.4cm。6は棒状で本来の形状・用途は不明。7は釘で全長12.5cm。

石器(第39図S1)

硬質砂岩製の砥石である。かなり使いこんでいる。現存長5.9cm、最大幅3.7cm。

1号墳は直径約15.6mに復原できる円墳で、南東に開口する全長4.85m（羨道を含む）の横穴式石室を持つ。石室内外からは、築造後の再三にわたる利用を伺う遺物が出土した。



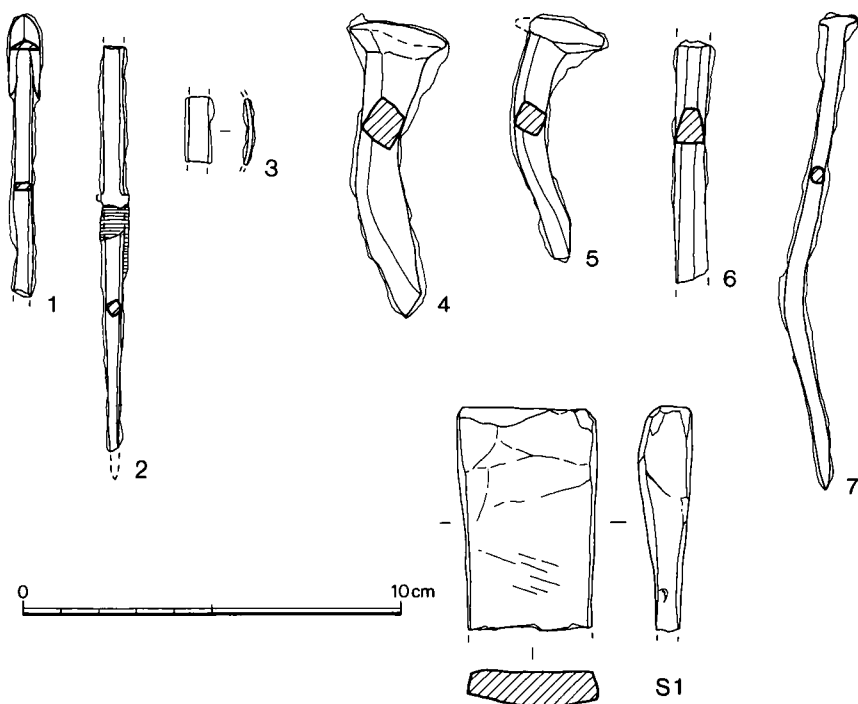
第39図 1号墳出土遺物実測図③(1/3)

築造の時期については、第36図1～4、8～10等の示す6世紀末を前後する頃とされよう。その後7世紀前半から7世紀末頃までは追葬が行われたと考えられる。そして鎌倉期に至っても石室が再利用されたことは、土師器・瓦器・磁器等の遺物の示すところである。その後、近時に至っても子ども達の遊び場となっていたというのは冒頭に記したとおりである。

2号墳(第3図)

1号墳同溝と切合うが如く溝のみを検出したものであるが、その先後関係はわからない。いま、全周の1/6ほどしかないが、復原すれば直径約18mとなる。周溝内からは須恵器片6片、土師器片4片が出土しているものの図示にたえない。1号墳とはほぼ同じ頃と思われるも確証はない。

次回の調査で残余の部分を検出しえていないので詳細は不明とせざるをえない。



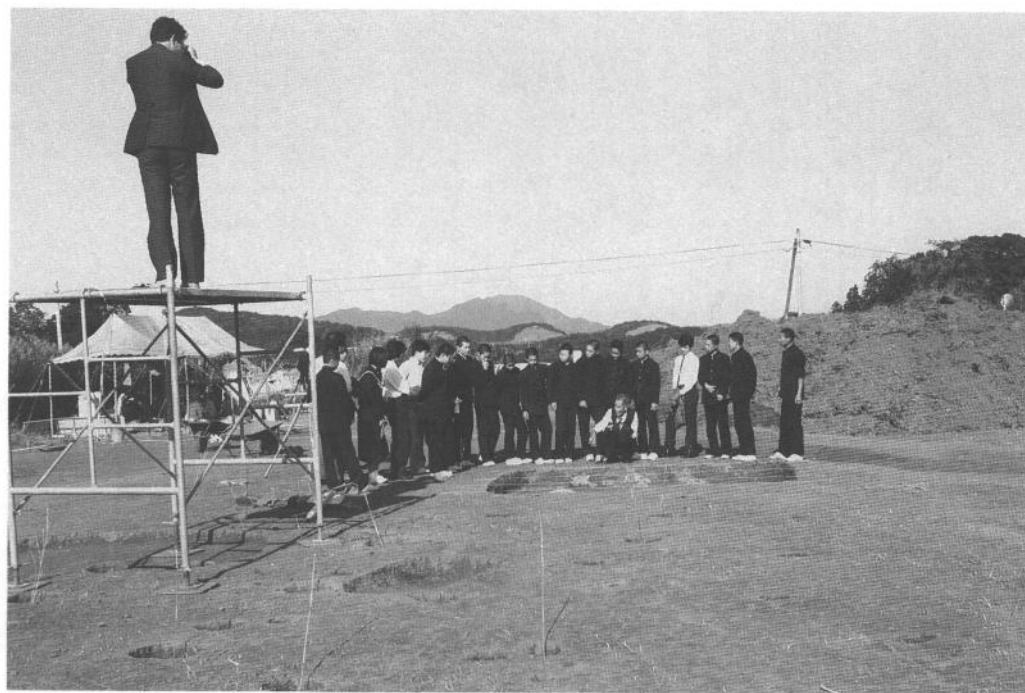
第40図 1号墳出土遺物実測図④(1/2)

3) 小結

第2次調査は対象面積もさほどなく、かつ期間も短いものであったため、遺構・遺物ともに数量は少ない。

古墳時代後期の竪穴住居跡が検出されるであろうことは、第1次調査の結果からして予想されていたが、果たしてこの時期の住居跡は1軒のみ(2号)しかなかった。弥生時代中期、古墳時代初頭の住居跡と古墳の存したことは予想外でもあったが、後に行われた第3次調査の結果や、調査区域外へと広がる遺跡全般を展望すれば、所を得た占地で遺構が検出されているともいえよう。

各時期の集落のあり方、墓地の展開等について触れることは、この第2次調査の結果からのみでは到底できない。それについては全体の総括にゆずることとしたい。



第41図 中学生の社会科学見学風景

3. 第3次調査

1) はじめに

昭和60（1985）年度、国道322号線バイパス工事に絡む発掘調査は池尻岩鼻古墳、それに冥加塚遺跡の2件が予定されていた。冥加塚遺跡では隣接地を国庫補助を受けて調査することになっていたのですが、それに引き続いて実施する方向で検討していた。しかし、用地買収が遅れたことから、年度末に調査依頼がなされた。文化課では報告書作成時期に入っており、人員の余裕がなかったために、作成作業が一段落する3月より調査に入ることとなった。

調査は、昭和60（1986）年3月13日より栗原が実施し、同月24日より飛野が引き継いで3月31日までの間実施した。

なお、調査に際して作業員の手配等、川崎町教育委員会社会教育課の方々には大変お世話になり、ここに記して謝意を表します。

2) 遺構と遺物

調査対象地は約800㎡ある。ここは個人住宅の庭となっており、多くの庭木が植えられている。調査区内に一列に並ぶ柱穴様の遺構はその際の痕跡である。また、庭木の移植によるものか、円形に近く攪乱墳の残る部分もある。

遺構は疎で、新たに調査を行ったもの以外に、昭和60年10月の調査で完掘できなかった402号袋状竪穴も掘り上げた。また、その調査において、南西の段落部分を試掘して遺構がなかったことからその部分を排土置場とし、今回もそれに従った。しかし、後日路線内の土取り工事中に整理箱2箱分の土器がまとまって出土し、工事関係者はそれを拾い集めて鞍手町立歴史民俗資料館に搬入、保存・活用を依頼された。同資料館 古後憲浩氏に以上の話を伺い、本報告に掲載するために遺物を九州歴史資料館に持ち込んで復原・整理を行った。この資料の由来に関した方々に謝意を表します。

1) 竪穴住居跡

5号住居跡(図版16、第42図)

北辺が調査区外へ続く。一辺約4.5mの隅丸方形プランを有し、深さは約10cm遺存する。カ

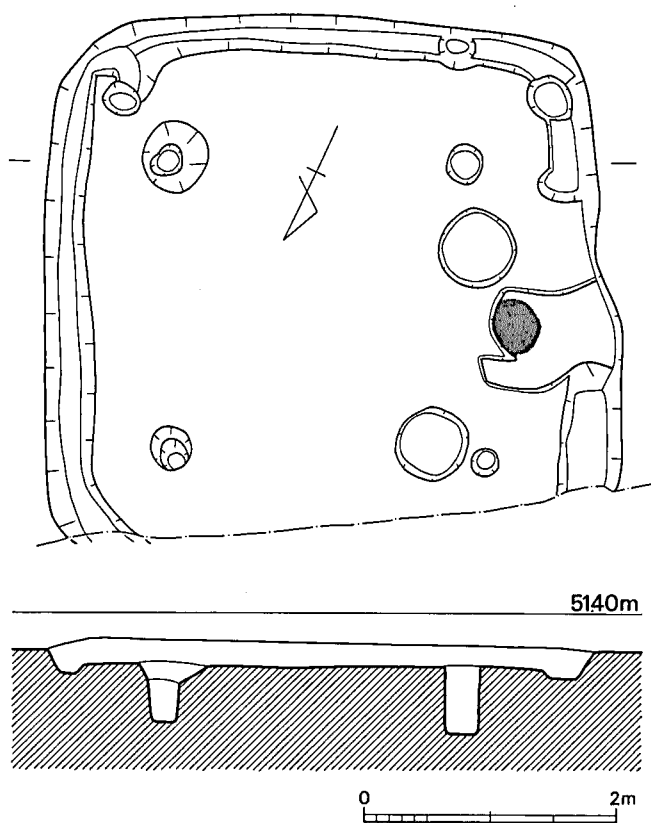
マド部分を除いて四周に浅い溝を巡らせる。主柱穴は辺2.4mの正方形に近い配置をとる。

カマドは西辺に設置されるが、崩壊して袖は不明瞭である。しかし、赤変硬化した火床（第42図アミ部分）ははっきりしている。支脚は原位置に立つ。

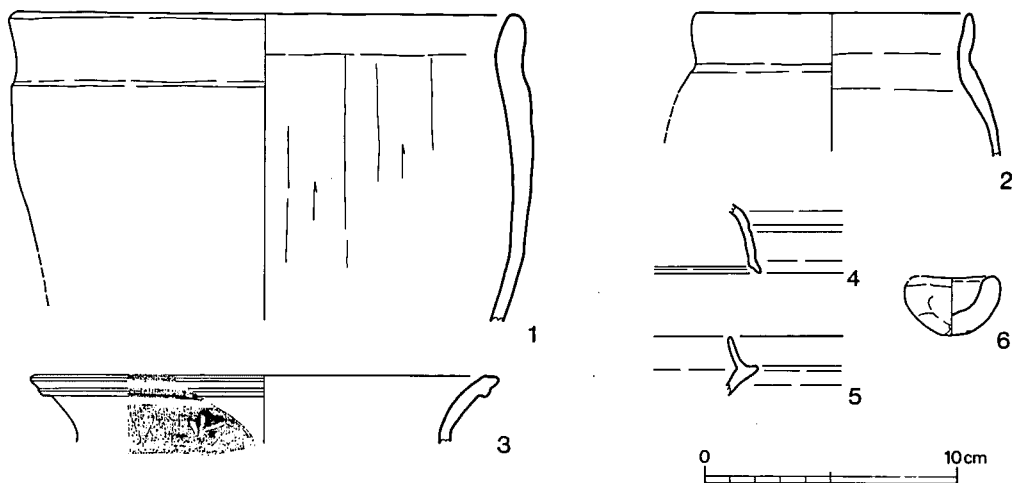
土器の多くはカマド上から出土し、U字形鋤先は西南隅の周壁溝中より出土した。

出土遺物(図版24、第43・44図)

土師器 1・2はカマド上に散乱していたものである。1は甑と思われる口縁部で、胎土は極めて粗く、調整も粗雑である。外面に黒斑を有するとともに、加熱されて赤変する箇所もある。2は甕であろうか。これも二次的な熱を受けて変色、器表の剥



第42図 5号住居跡実測図(1/60)



第43図 5号住居跡出土土器実測図(1/3)

落がみられる。

須恵器 3は酸化焰焼成に近く、器表は灰赤色、器内は灰黄色を呈する。外面に篋記号ともつかぬ刻みがある。4・5は小片で、住居の廃絶の一端を示すものであろう。6は手捏ね土器である。出土地点は確認できない。

鉄器 U字形鋤先片。耳基部の幅2.1cmあり、柄装着部分は斜位に成形している。

6号住居跡(図版17)

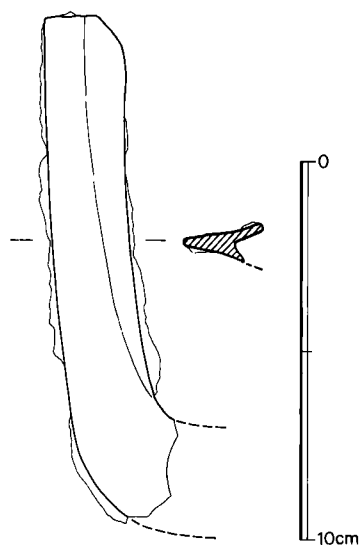
5号住居跡の東近くに位置する。実測図を紛失したので図版17を参照して頂きたい。一辺4mほどの方形プランを有し、西南辺は削平されている。炉・カマドは確認できなかったが、支柱穴は4本を配置する。図示した須恵器壺は北コーナー付近で、床からやや浮いて出土した。

出土遺物(図版24、第45図)

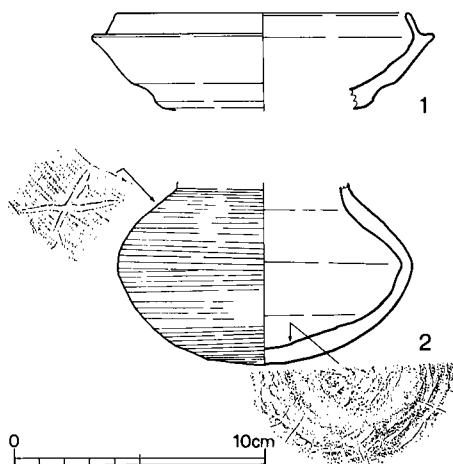
須恵器 1は約1/4の残片。胎土・調整とも粗いが、焼成は堅緻。器肉が厚く、鈍重な感を与える。2は壺であろう。胴部のみ完存する。底部内面には押し出し痕が残り、外面は全面を凹凸の浅いカキ目で仕上げる。肩部に篋記号があり、胎土は精選されているが、焼成は甘い。

7号住居跡(図版17、第46図)

約1/2が調査区外へ続き、かつコーナーを植木移植のため攪乱で破壊されている。残存する一辺は約6mを測る。その北東辺・南西辺にはおのおのに幅約1mのベッド状遺構が付設されている。遺構検出面からベッド状遺構上まで約15cm、そこから床面まで更に10cmほどある。支柱穴はベッド状遺構脇にある2個1対のものと考えられる。床面中央には不定形の土壇があり、3方に浅い溝が走るが、ここから灰・炭等を検出していない。南東辺中央には深さ約50cmの屋内土壇が設置されており、この時期の住居跡として通常の構造を示している。



第44図 5号住居跡出土鉄器実測図(1/2)



第45図 6号住居跡出土土器実測図(1/3)

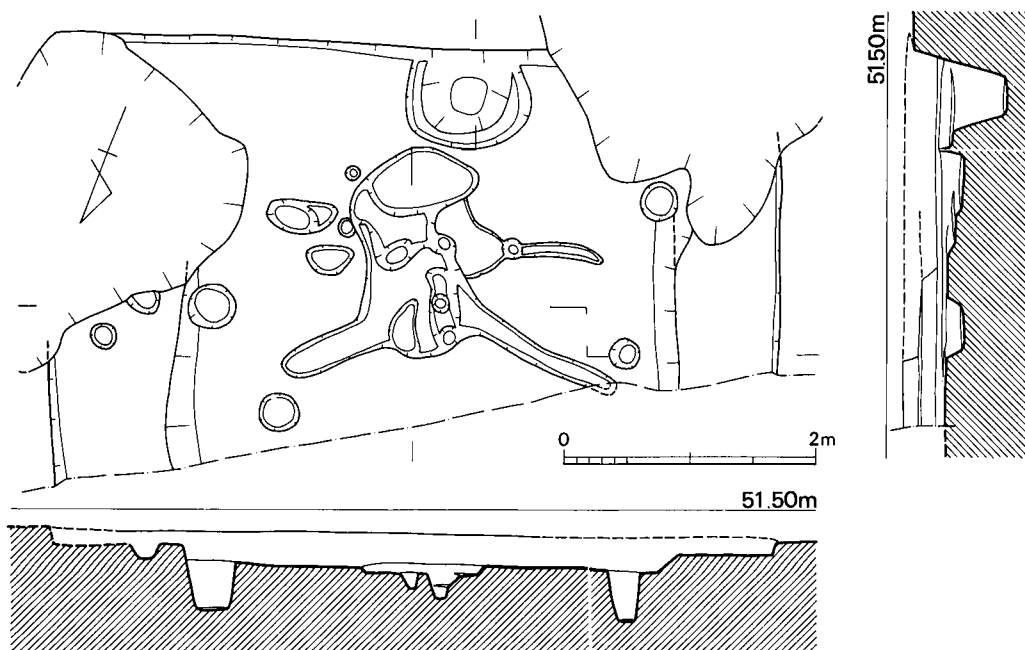
出土遺物(図版24、第47図)

床上25cmの付近からまとまった土器群が出土している。このレベルは検出面とベッド状遺構との中間的位置にあり、本来この住居跡に伴うものではないと考えている。しかし、埋土中からベッド状遺構を有するこの住居跡に相応しい遺物を検出していない。

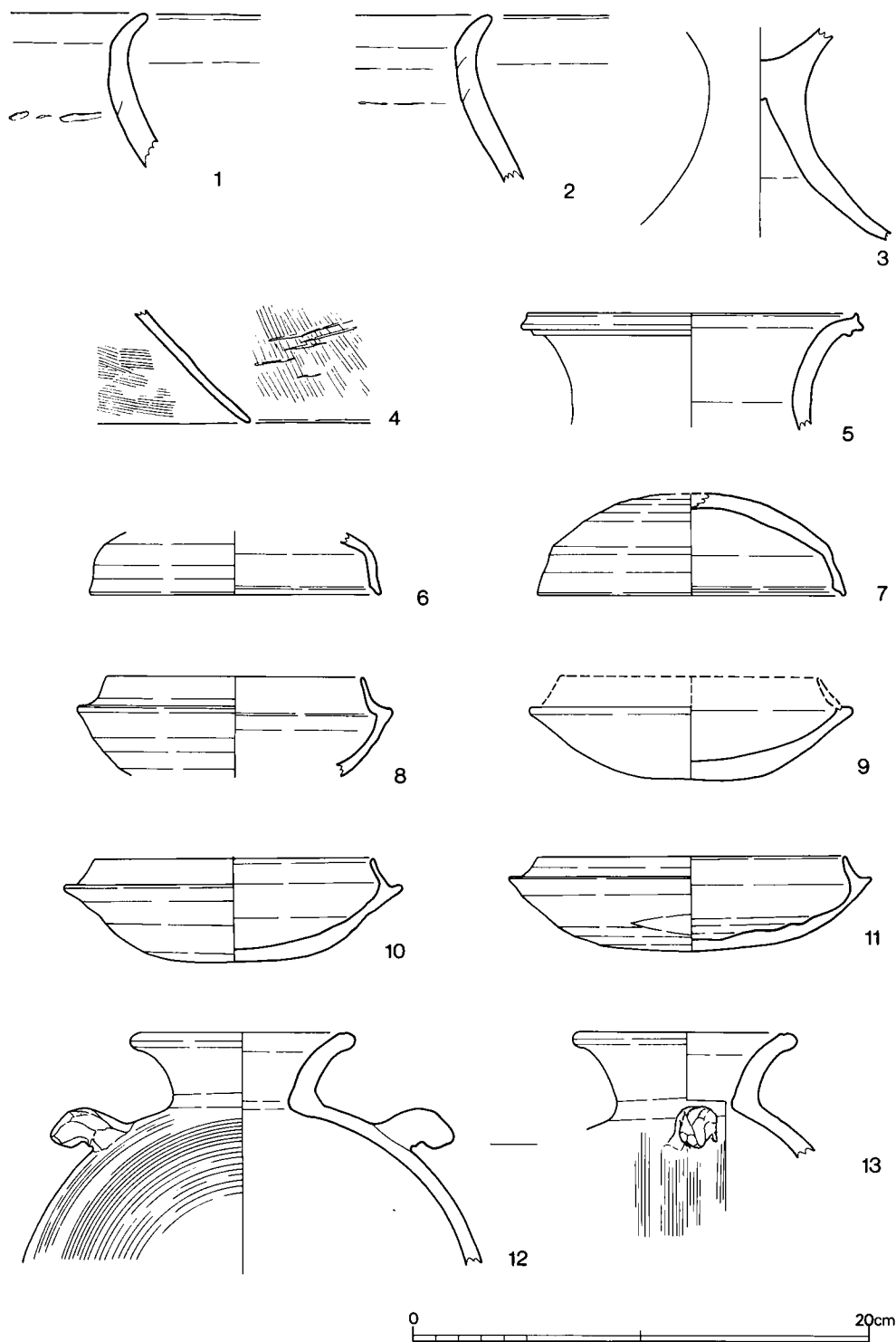
土師器 1・2は甗であろう。内面に粘土紐の接合痕が残る。3は高杯であろうか。調整痕は残らない。4は高杯あるいは器台の脚部であろう。外面はやや粗い縦刷毛、内面では横刷毛で仕上げる。外面には化粧掛けを施したようで、部分的に灰赤色を呈する。

須恵器 5は口縁端部を肥厚させて上方へつまみ出すとともに、口縁下に1条の突帯を付す。灰黒色の膚に白色の石英粒などが浮き出る特徴的な壺である。6・8はそれぞれ小片だが、胎土・色調などが同工のセットをなすものであろう。胎土は灰白色を呈し、焼成時に熔融した黒色粒が器表に吹き出して光沢を発している。7は約1/2の残片。6・8と同様な黒色粒を含むが、焼成温度が低いようで熔融するに至っていない。口縁部・天井部の境に甘い稜をなす。9は非常に焼成の甘い杯身で口縁部を欠損。身を約1/2残す。図のように復原して大過なからう。調整痕は残らない。10・11は完形の杯身である。10は焼成不良で器表は磨滅している。両者は口径・器高が異なるものの、型式的には近く、黒色粒を含まない。12は焼成堅緻な提瓶で、胎土には白色粒が著しく、黒色粒を含まない。

以上の土器群のうち、3・4を除く例はいずれも6世紀第3四半紀頃に比定できるものであるが、上述した出土状態とベッド状遺構を有する住居構造からみてその年代観は住居の廃絶後、かなりの時期を経ていると考えられる。須恵器の型式はこの集落の一つのピークであり、埋没しきれずに凹地であったこの住居跡に一括投棄されたものと考えられる。



第46図 7号住居跡実測図(1/60)

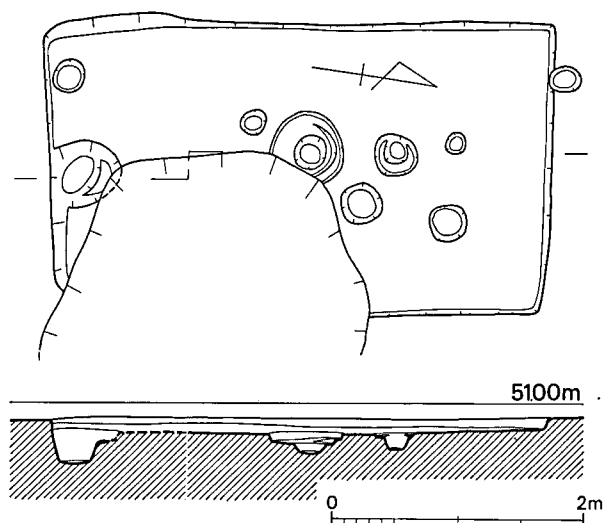


第47図 7号住居跡出土土器実測図(1/3)

8号住居跡(図版18、第48図)

これも約1/4を破壊されている。
長辺4m、短辺2.3mの長方形プラン
を有し、約10cmの深さが遺存する。

中央に位置する土壇から灰・焼土
などを出土しており、炉跡を特定で
きる。南側短辺に屋内土壇と考えら
れるものがあり、主柱穴も2本を想
定できることから弥生時代後期～古
墳時代初頭頃の範囲に収まるもの
であろうが、時期を示すような遺物
検出できなかった。



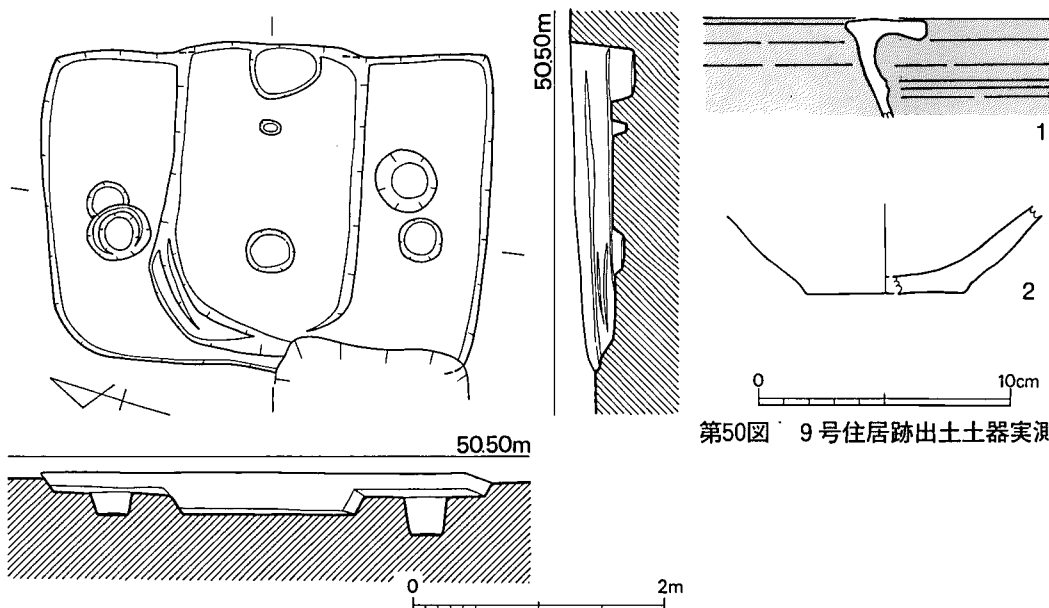
第48図 8号住居跡実測図(1/60)

9号住居跡(図版18、第49図)

調査区西隅に位置する。辺3.5×2.5mと小型の長方形プランで、短辺両側にベッド状遺構を付設する。調査時には中央の落込みを土壇墓とも考えていたが、2本の主柱穴、北辺の屋内土壇などの構成から一連の住居跡と判断した。なお、炉の位置にあたる中央の土壇から炭・灰などを確認していない。

出土遺物(第50図)

1は埋土中から出土した赤色顔料を塗布した甕片。2は壺底部である。その他、須恵器小片なども混入しているが、弥生時代中期後半頃に比定できよう。



第50図 9号住居跡出土土器実測図(1/3)

第49図 9号住居跡実測図(1/60)

なども混入しているが、弥生時代中期後半頃に比定できよう。

(2) 袋状竪穴

402号袋状竪穴(第51図)

前回調査では掘り残したものである。底径2.1m、最深部は2mを測る。

出土遺物(図版25、第52・53図)

土器 第52図1は外面全面に赤色塗彩する直口壺で、約1/2が残存する。口縁端部は断面コの字形を呈して外側へ屈折し、胴部の張りの著しい点が特徴である。甕の口縁部はほとんどがいわゆる跳上口縁である。それには端面を強く横なでして上下方向に突出する例、上方にのみつまみ出す例などがあり、突帯や沈線はまったくみられない。底部のうち、第53図8は外面を赤色塗彩する。他は強弱はあれ、いずれも立上り部分を強く横ナデされてくびれる。

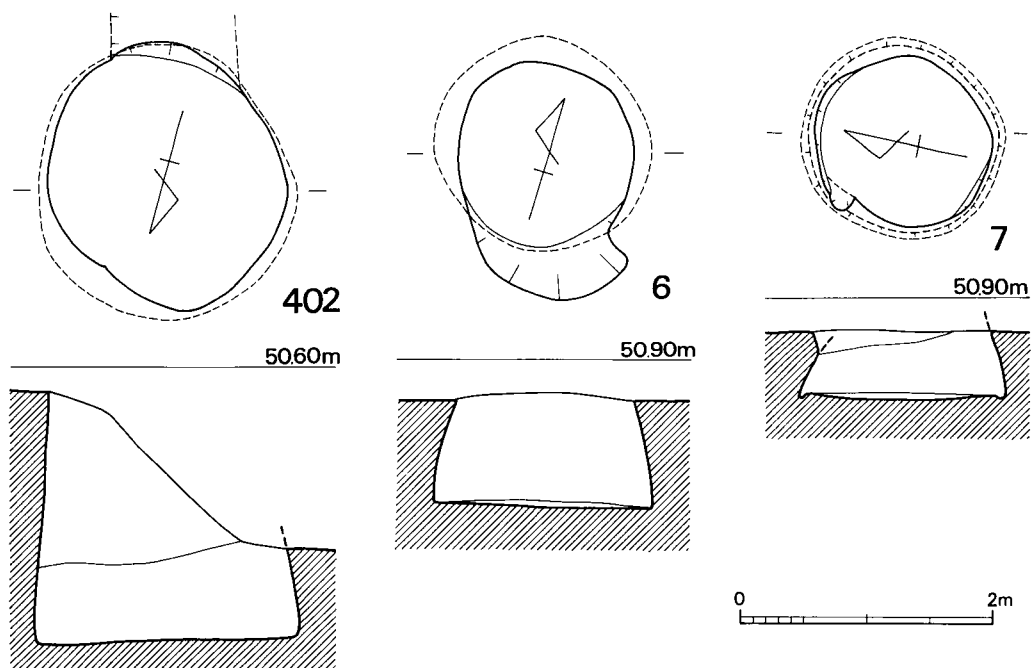
石器(図版26、第60図) 砂岩製の砥石である。1面のみ使用。

6号袋状竪穴(図版19、第51図)

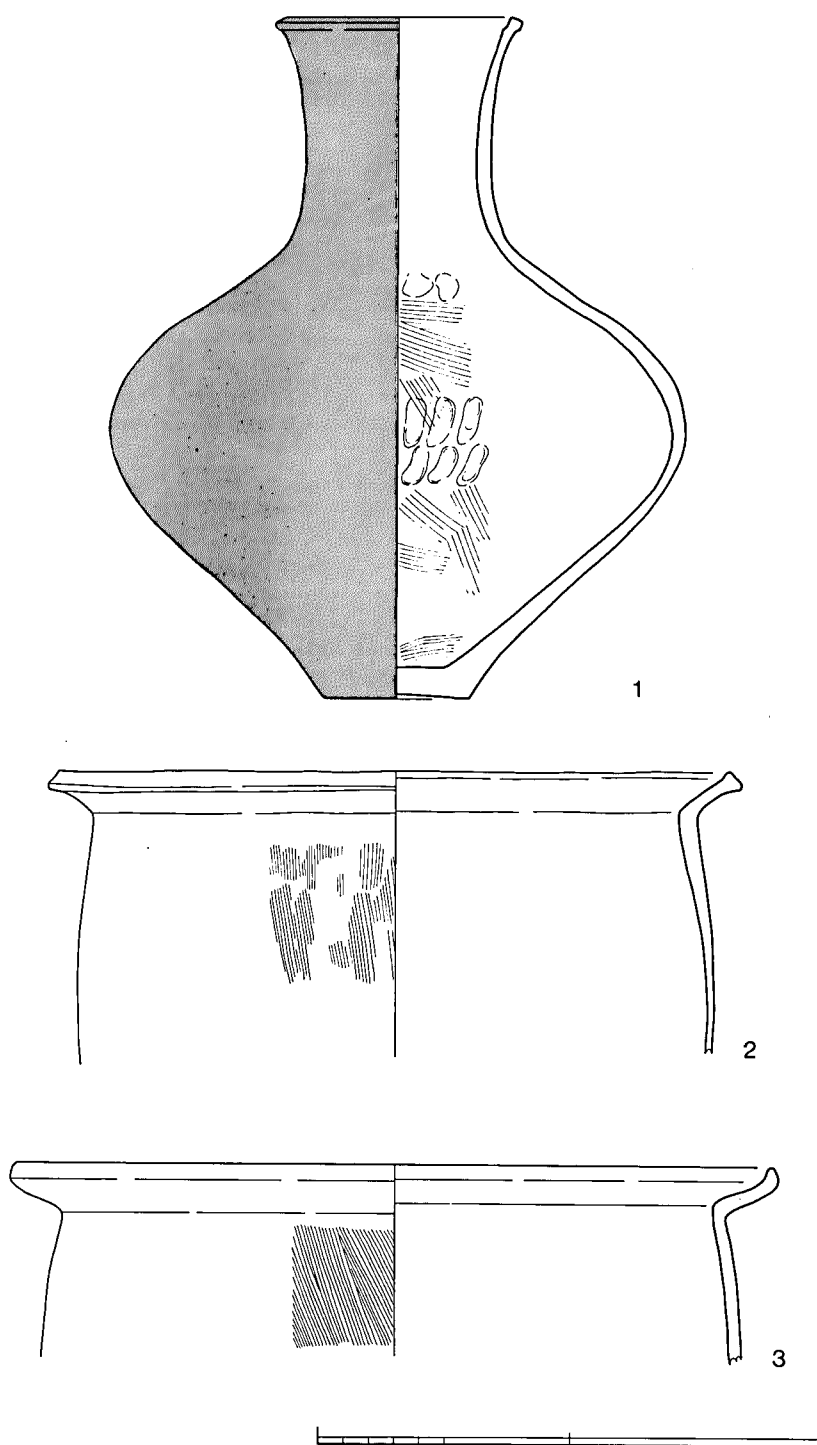
上端径1.4m、下端径1.7m、深さ0.8mの規模をもつ。

出土遺物(図版25・26、第54図・第60図1)

土器 1・2は如意形に小さく外反する甕の口縁部。1には1条の篋描沈線を刻む。6の蓋はほぼ1/2を残す。天井部は平らで口縁部の開きは深い。器表の荒れが著しいが、内面は丁寧



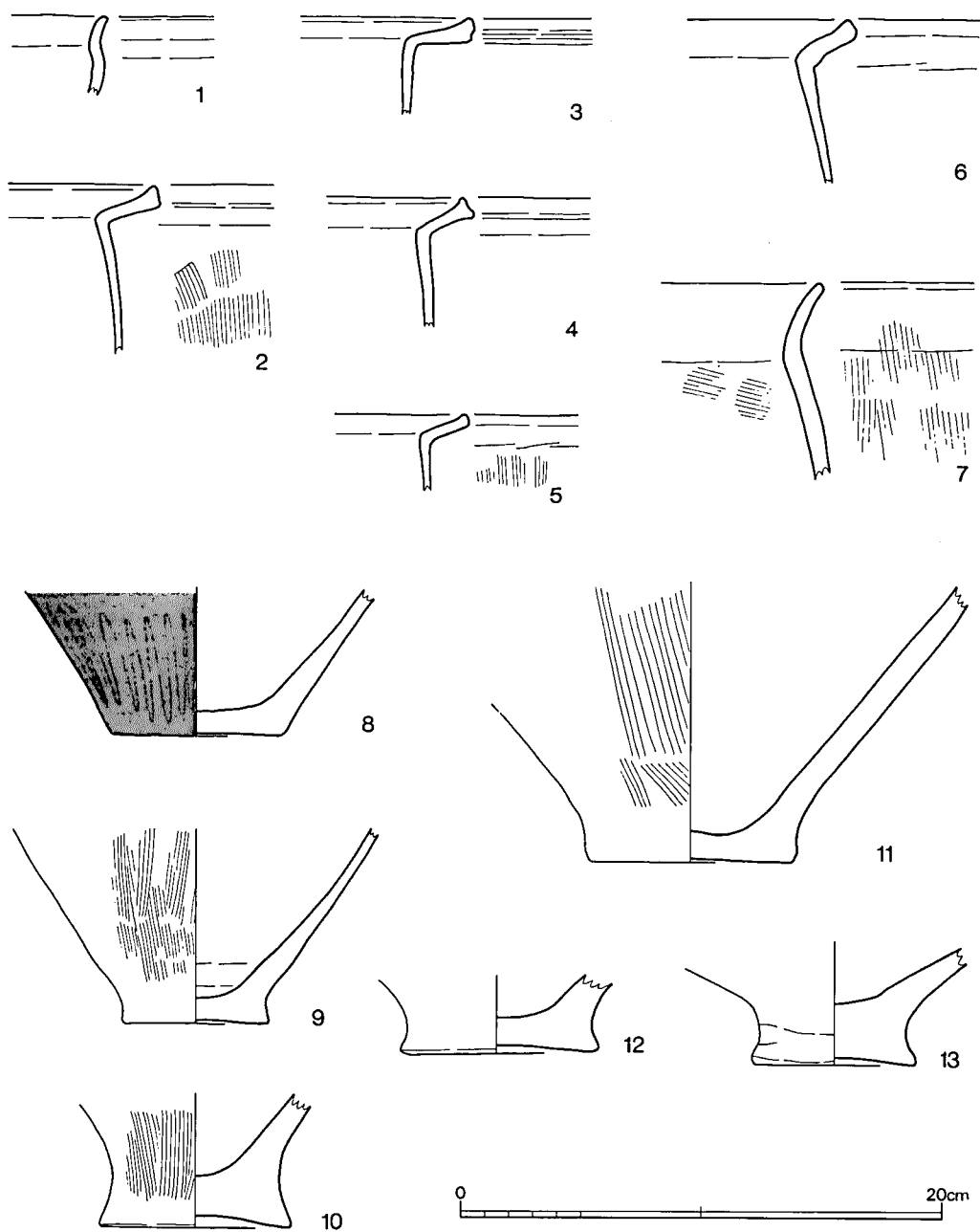
第51図 第3次調査検出袋状竪穴実測図(1/60)



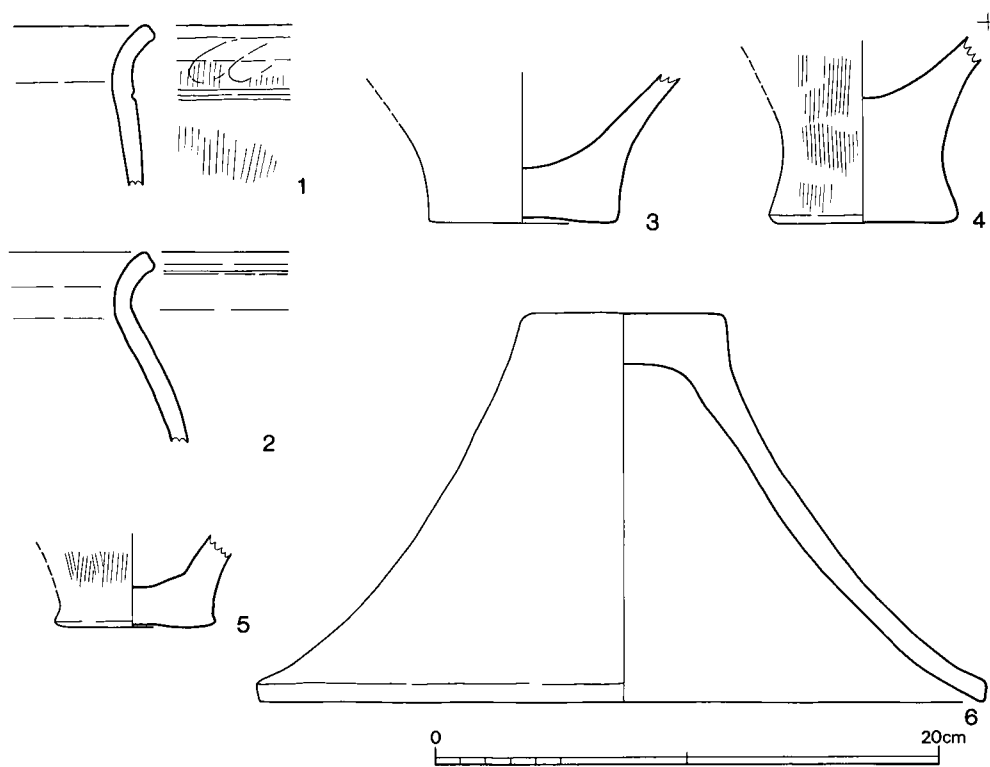
第52図 402号袋状竪穴出土土器実測図①(1/3)

な篋磨きで仕上げ、黒色物質が付着していた。

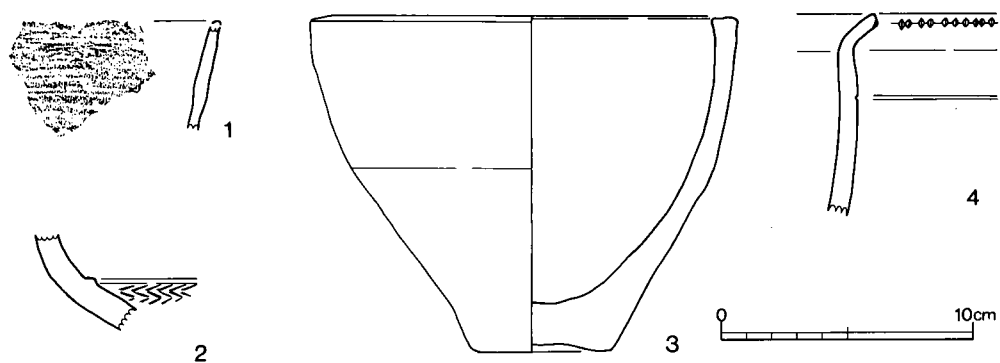
石器(第60図1) 磨製石斧の破損品で、基部である。部分的に自然面を残す。緑泥片岩製で剥離が著しい。



第53図 402号袋状竪穴出土土器実測図②(1/3)



第54図 6号袋状竪穴出土土器実測図(1/3)



第55図 3号土壇出土土器実測図(1/3)

7号袋状竪穴(第51図)

上端径1.3~1.4m、下端径1.5~1.6m、深さ0.5mの規模。床面周縁に幅5cm、深さ5cmほどの浅い溝を巡らせる。図示できるような遺物はない。

(3) 土壌

3号土壌(図版19、第56図)

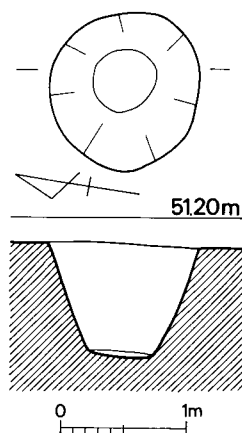
上端径約1.2m、下端径0.5mと断面逆梯形を呈し、他の袋状竖穴と異なる。深さは0.9m。

出土遺物(図版25・26、第55・56図)

土器 1は縄文時代晩期に属する粗製土器小片である。口縁直下の部位で、外面は密な横方向の条痕で仕上げる。2・4は通有の弥生時代前期の土器である。鉢(3)の口縁部はほぼ水平な面を有し、変形・加飾は一切ない。外面は風化著しくて細部は不明であるが、内面は篋磨きで仕上げているようである。胎土などからみて弥生時代のものであるとしてよからう。約1/3残る。

石器(図版26、第60図)

いずれも緑泥片岩製になる打製石器であり、図示した以外にも剥片、破損品が数点ある。2はもっとも遺存状態が良好な例で、これによれば全長11cm、幅7cm前後に復原できよう。厚さは最大1.7cmで、図左辺、下辺が敲打調整されるが、材質のために粗く不規則なものとなる。下半裏面は大きく剥離する。3も約1/2を欠損する。2に比して平面形がやや丸みを帯びる、図下端の刃部は両面から敲打され、身の最大の厚みは1.2cmである。3は調整痕の一部が残るのみであり、4も全体に薄く剥離している。以上が石斧と考えられるのに対して、5は鎌状の形態を有するが、調整部分の剥離が甚しく、細部は不明瞭である。



第56図 3号土壌実測図(1/60)

4. その他の遺構と遺物

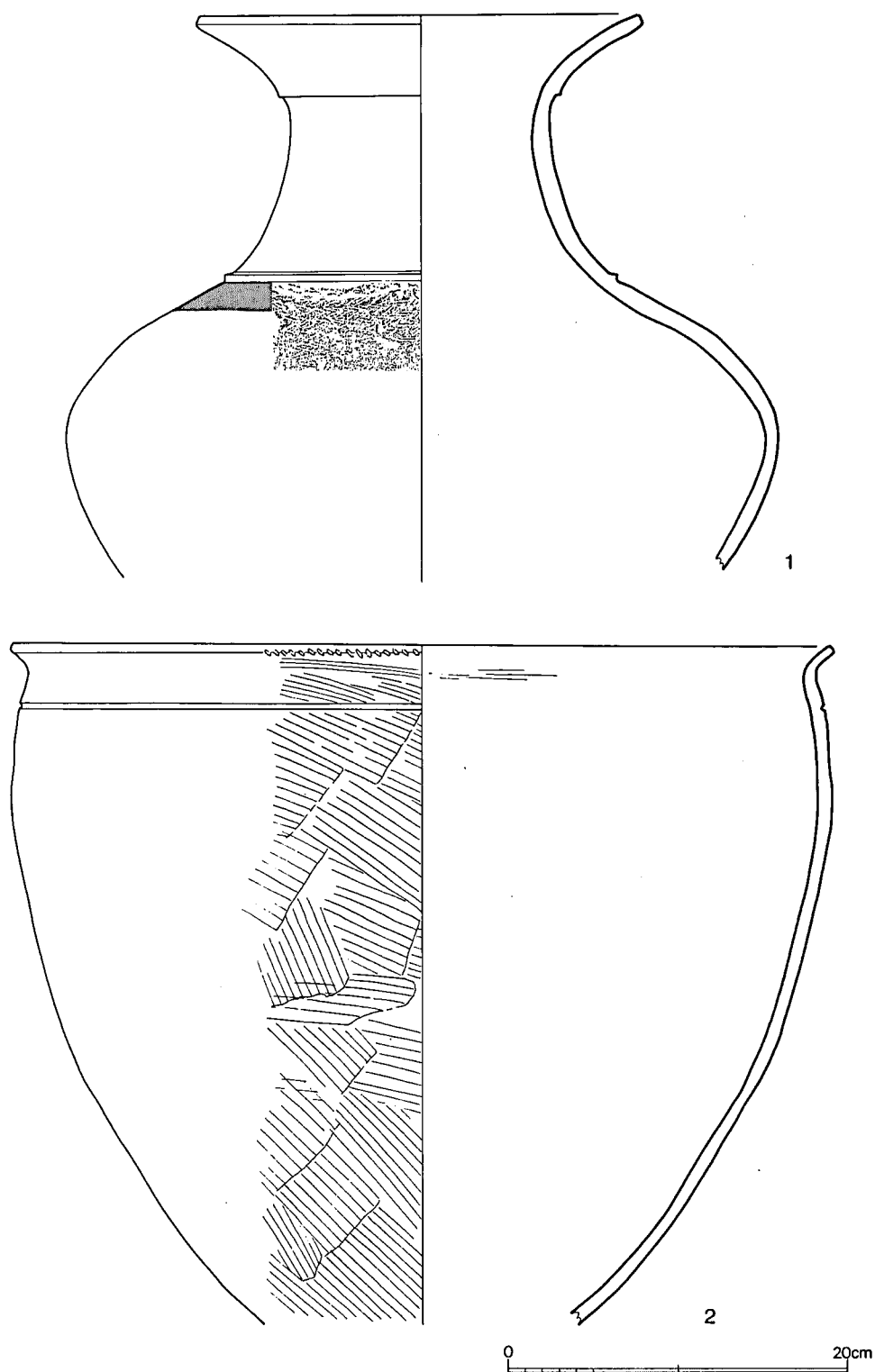
3号掘立柱建物

9号住居跡を切って2×1間まで確認できる。おそらく2×2間の倉庫であろう。判明する柱間距離は2.3m、2.1m、2mである。このうち、最も北に位置する住穴から5号住居跡出土土器と同様な須恵器蓋片などが出土しており、6世紀後半でも古い時期に比定できる。

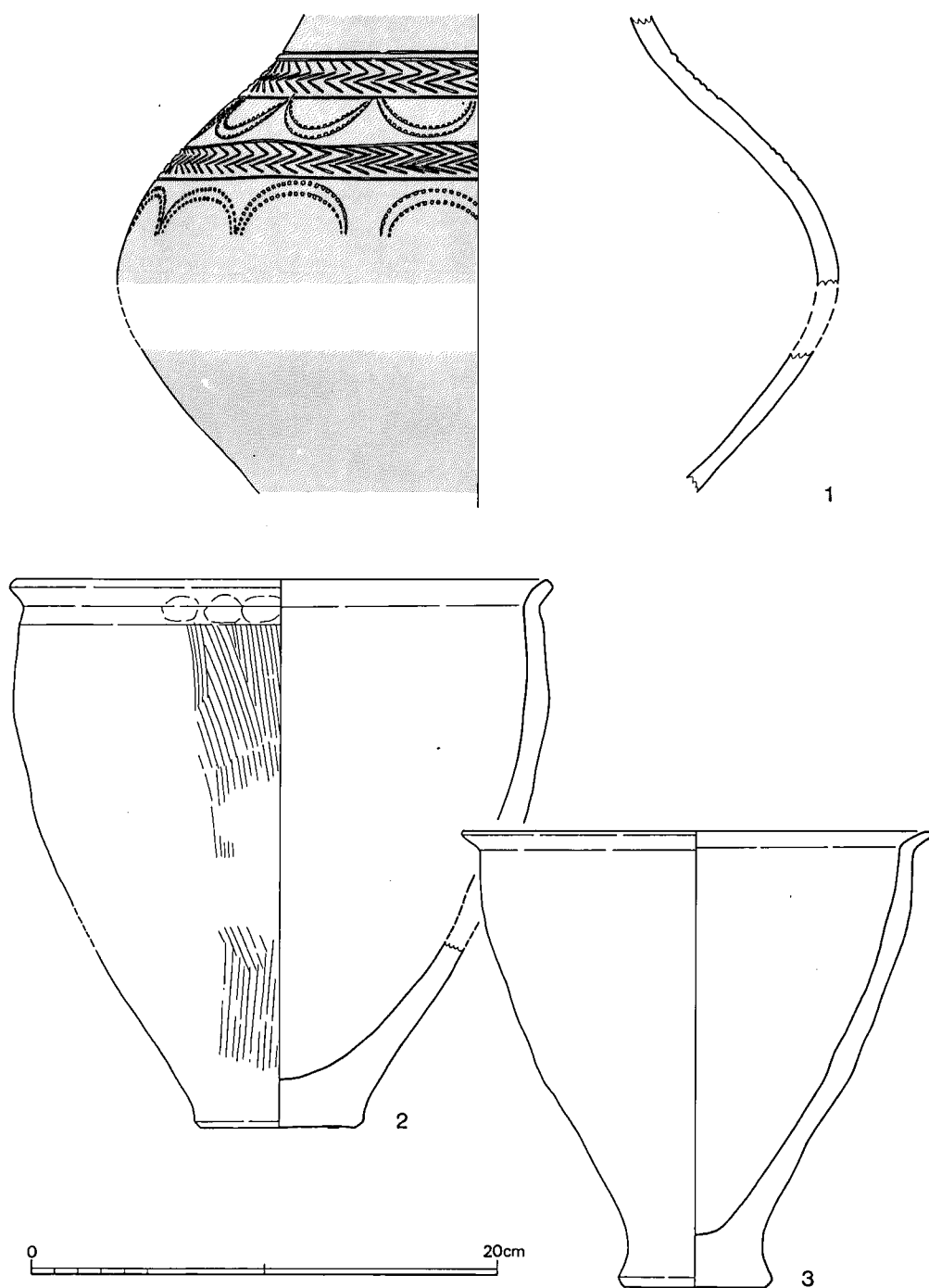
工事中出土の遺物(図版25・26、第57～60図)

工事中に出土したもので、聞くとところによるとほぼ同一遺構(袋状竖穴)から出土したものに間違いのないようである。遺物にもそれが示されている。

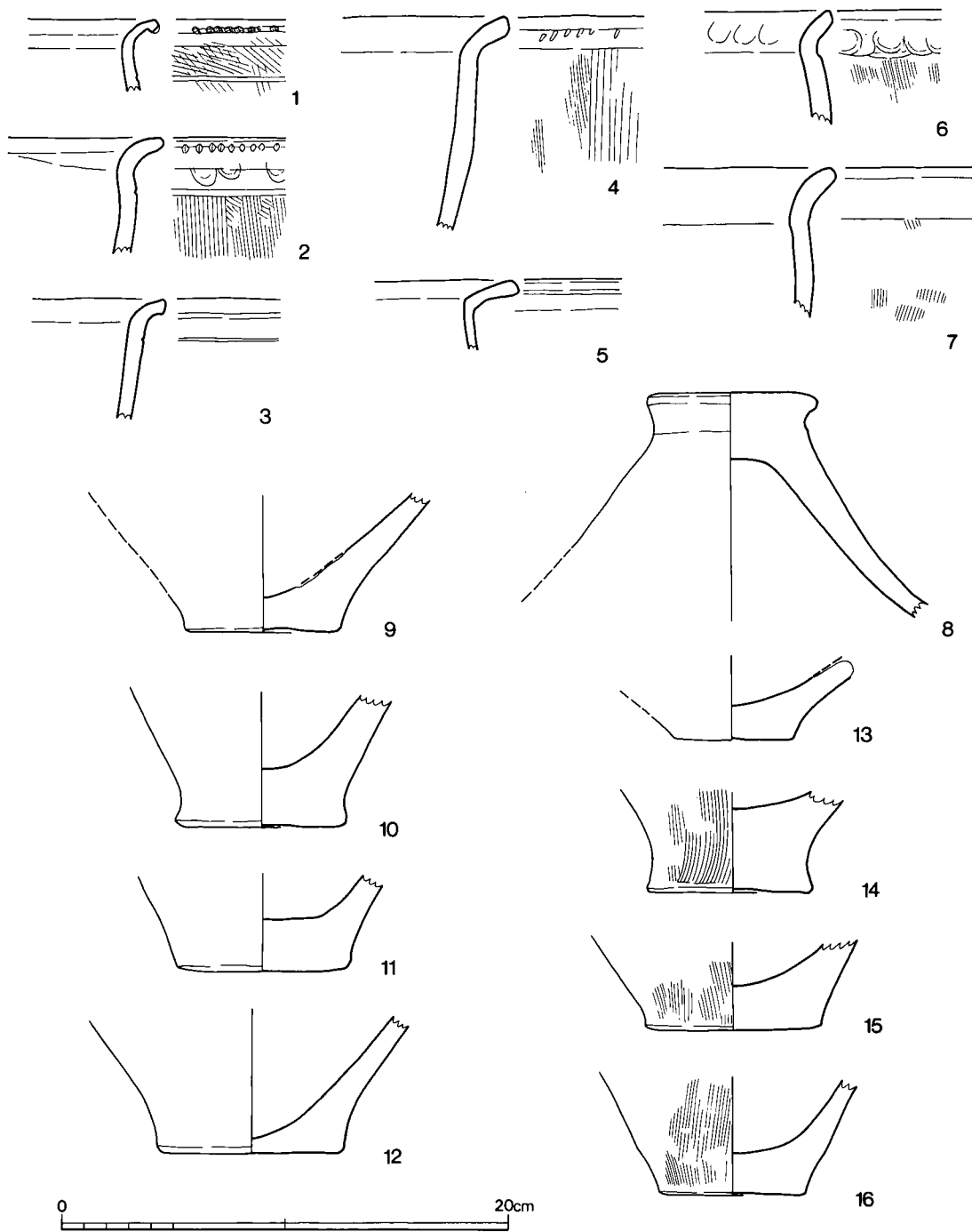
土器 第57図1は口径25cmに及ぶ大型壺である。口縁部は大きく外反し、胴部の張りが著しい。文様帯は肩部の1条の下に設けるが、器形の大きさに比して幅4cmとわずかにすぎない。



第57図 工事中出土土器実測図①(1/4)

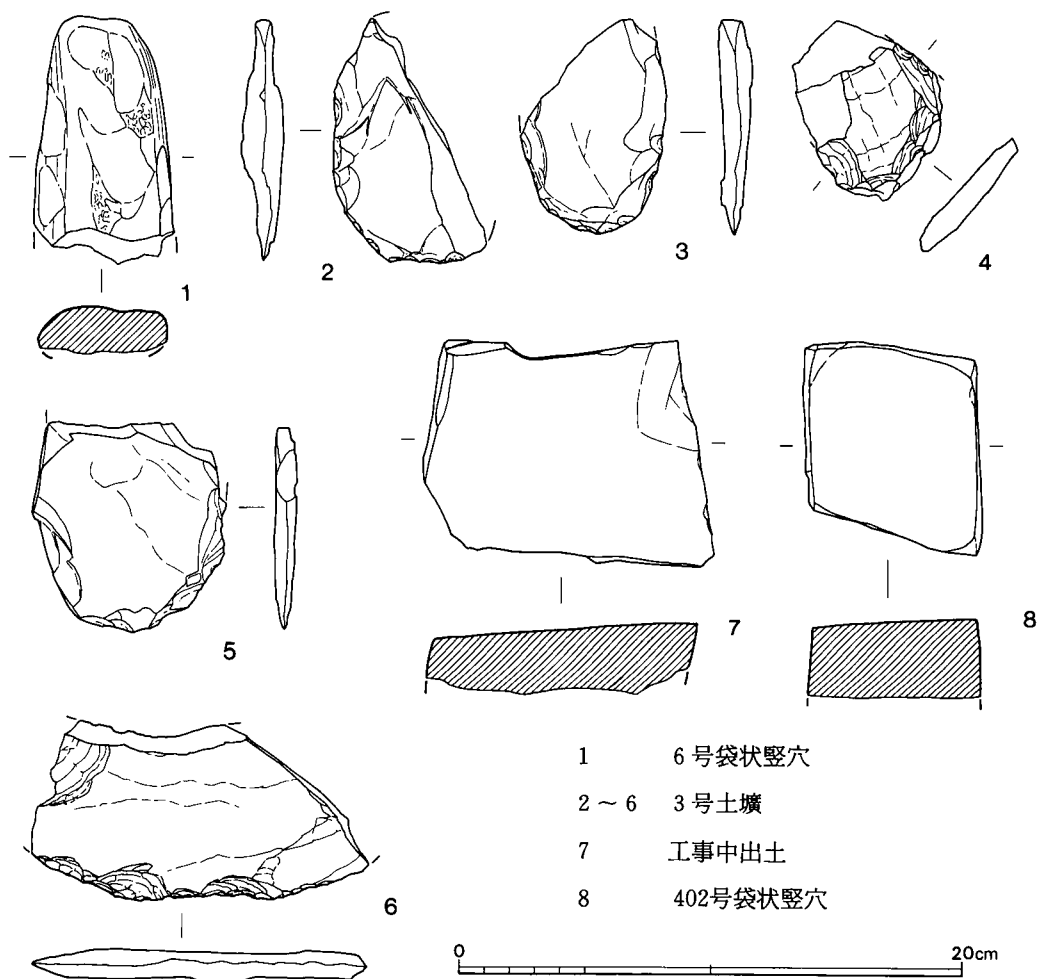


第58図 工事中出土土器実測図②(1/3)



第59図 工事中出土土器実測図③(1/3)

主文様は無軸羽状文で、下端に1条の沈線を刻んで界線とする。器表の風化が著しく詳細は不明であるが、文様帯部分にのみ一部赤色顔料が残る。同2も大形の甕で、口縁部径48cm、残存する器高は40cmある。口縁部は小さく急角度で外反し、頸部下に1条の沈線を巡らせる。内面は口縁部を横刷毛で、胴部をナデで調整し、外面は全面を刷毛目で仕上げる。また、外面全面に煤が付着する。第58図1は口縁部・底部を欠損するが、非常に美しい土器である。頸胴部の境には低い突帯を造り出すが、それは沈線を用いて擬しただけのようである。以下、順に無軸羽状文、沈線、上向きの山形文、平行沈線に挟まれた無軸羽状文、上向きの山形文を刻むが、沈線、無軸羽状文は篋状工具を用い、山形文は二枚貝の腹縁を押捺して施文している。個々の単位も整然とした構図となる。外面は全面に赤色顔料を塗布しており、内面にも多く垂れている。同2・3は全形を知れる甕。2は口径23cm、器高23.5cmあり、口縁部は小さく反転する如き形となる。胴部はやや膨らみをもって底部へと続く。同3は2に比して胴部が直線的に広が



第60図 第3次調査出土石器(1/3)

り、口縁部は外折する。それとともに底部の厚みが増し、側縁を強くナデてくびれさせるという新しい手法を採っている。第59図8は甕用蓋であろう。同1～7は甕の口縁部片である。5がL字状に近い形態で、他は如意形である。口唇部の刻目・沈線の有無など多様である。以下は底部の破片。第58図3のように底部が発達するものはない。

石器(図版26、第60図7) 砂岩製の砥石である。残存部の主として右下方を使用しており、縁辺部は使用されていない。また背面は剝離している。

3. 小 結

この第3次調査で確認できた遺構は竪穴式住居5棟、袋状竪穴3(+1)基である。以下にそれぞれについて簡略にまとめてみたい。

竪穴式住居 5号住居跡、6号住居跡はいずれも古墳時代後期、6世紀後半の枠におさまると思われる。ただ、前者から出土した須恵器の小片は後者に先行し、中葉に近く比定できよう。過去の調査でも当該期の住居跡が確認されている。

7号住居跡・8号住居跡・9号住居跡は時期を限定できる遺物に乏しい。図示した9号住居跡出土の土器片は弥生時代中期後半頃を示し、埋土中から出土した他の土器片の中にも該当する例が存在することから所属時期の一端を示していると考えられる。この住居跡に関してはその構造も問題となるであろう。2本の主柱穴とそれに平行する辺に屋内土壌を配置することは通有のものであるが、多くの例では主柱穴はベッド状遺構の裾近くに配され、上段に掘り込む例は乏しい。住居が小型であることも関係してくるであろうが、類例の増加を待ちたい。

7号住居跡・8号住居跡は2本の主柱穴配置を採用しており、9号住居跡の存在も考慮するならば弥生時代中期後半～同後期末葉頃という長い間の中に位置付けるしかない。

袋状竪穴 今回新たに調査を行ったものは2基で工事中に出土した土器群からさらに1基が予想される。6号袋状竪穴・7号袋状竪穴は通常の袋状竪穴の構造を有する。遺物は少ないが、6号袋状竪穴出土土器の多くは前期後半の特徴を示し、底部の厚い中期的な形態をもつものもある。こうした現象は中期初頭頃によくみられることで、6号袋状竪穴もその例である。

土壌 3号土壌は形態が異なり、井戸状のものである。出土遺物は多くはないが、縄文晩期土器片とともに打製石斧が出土している。土器は図示した小片以外にも胴部片が数個体分出土していることから、弥生前期の土器片もあるが縄文時代の遺構と考えたい。過去の調査でもほぼ同時期の土壌を数基確認しているからである。

なお、402号袋状竪穴の所属は弥生時代中期前半としてよかろう。

4. まとめ

以上、3次にわたる調査の内容を記述してきた。調査面積は約6,000㎡に及ぶとはいえ、期間が長期にわたったこと、まとまった面積（遺構のまとまり）を同時に調査できなかったこと、かつ各次の調査担当者の交替などが重なって冥加塚遺跡の内容は寸断されてきたので、最後に時代ごとに順を追って整理しておく。

これまでの調査は中元寺川左岸に南北に細長く延びる丘陵上に幅30数mのトレンチをあける結果となった。開墾のために大きく削平されるものの、検出された遺構は縄文時代晩期から中世に至る集落跡と若干の墓地である。

縄文時代

この時代の遺構として、第1次調査時の埋竈遺構、その後の^{註1}405号土壇・3号土壇などがある。前二者は径0.7～1m、深さ0.2m、3号土壇は径1m、深さ0.9mといずれも小規模なものである。埋竈遺構と405号土壇は規模・形態ともに相似るが、遺物の内容が異なっている。第Ⅲ章1～2に記したように埋竈遺構では底部を欠く深鉢2点がまとまって出土して墓所と考えられるのに対し、405号土壇では少なくとも5個体以上の土器小片が出土し、遺棄された状態を示している。また、3号土壇の場合は形態の差違、打製石斧の出土などから性格的には405号土壇に近いといえる。これら3基の土壇—いずれも縄文時代晩期前半に比定される—の分布をみると、埋竈遺構は調査区東端に、その他の遺構は西端近くに位置しており、両者の間には約150mの隔たりがある。このことは居住域と墓域との分離を想定するのに好都合ではあるが、何といたっても残存する遺構が稀薄であり、単なる憶測に過ぎないともいえる。

弥生時代

この時代の遺構は、前期末～中期初頭、中期前半・同後半、終末期～古墳時代初頭頃に大きく分れ、断続的なものとなる。

前期末～中期初頭 住居跡は未検出。遺構は402号袋状竪穴を除く9基の袋状竪穴が確実な例であり、調査区東端の土壇墓群もその例に加わると考えられる。袋状竪穴は底径1.2～2.3m、深さ0.5～2.0mと通有の例に比して小振りである。遺物としては如意形口縁を有する甕、無軸羽状文を主文様とする壺などと若干の石器にすぎないものの、豊前地方の特徴を示している。

また、注目されるのは、1～5号袋状竪穴とその他の袋状竪穴とが調査区の東西両端、換言すれば台地の稜線を挟んで対峙する位置にあることである。さらにその間には浅い谷も侵入している。このことは二つの共同体が同時に、卑近な位置に生活していたことを考えさせる。細

部は住居跡などの遺構が未確認であり言及できない。

この時期の墓地と考えられるのは墳底に小墳を有する土墳墓群である。それらは調査区東端近くに位置し、1～5号袋状竪穴を営んだ共同体成員のものであろう。

中期前半 この時期の遺構は3号住居跡、402号袋状竪穴が残存するのみである。いずれも調査区西半に位置するが、調査範囲が狭いことからそうした現象が直ちに共同体の縮小・統一を示すものか判断はできない。

中期後半 9号住居跡のみであり、云々できない。

古墳時代

初頭頃の住居跡、後期の住居跡と古墳が存在す。古墳の築造とともに調査区内は居住域として放棄されたのであろう。以後、中世に至るまで若干の遺物はあるが顕著な遺構はない。

弥生時代終末～古墳時代初頭 4・7・8・401号住居跡などがそれであろう。うち、4・7号住居跡はベッド状遺構を付設し、主柱穴はいずれも2本柱となり、中央に炉を有する。

後期(集落) 1号・2号・3号・5号・6号・402号～404号住居跡、3棟の掘立柱建物がある。いずれも6世紀後半の古い時期に属する。うち、403号・404号住居跡の2棟はそのほとんどが削平されており、言及の対象となりえない。全体の伺える住居跡はいずれもカマドを有するが、その方向性は南を除く各辺に位置し、規則性は認められない。

1号住居跡の補助的な柱穴、402号住居跡に付設された排水溝以外に、構造的あるいは規模的に傑出した住居跡は検出されておらず、また南約700の丘陵上に展開する永井遺跡^{註2}にみられたような集会所的な施設もないことは、この集落の中心地をさらに北方に想定させる。

さらに付言するならば、倉庫群(2×2間総柱建物)が併存することから、集落の中の一支群を仮定することもできる。

後期(古墳) 少なくともこの調査で確認した集落の廃絶後に造営されたといえる。その立地は第2次～第4次調査区である小尾根の末端に占地しており、群としての規模はさほどでもなかろう。もっとも巨視的にみるならばこの低丘陵の縁辺に位置する古墳群と密接な関連を有するものである。2号墳は分断された調査の中で崩壊してしまったようで残念である。

1号墳は無袖の単室墳である。石室プランから、また群構成からみてもいわゆる群集墳とは一線を画し、より新出の要素を示す例である。

中世 溝と再利用された石室内出土の遺物が示すのみで、それ以上のことは不明である。

以上、簡略に述べてきたように、遺構の保存状況、密度に比してその多様性は注目に値する。

総じてこの遺跡の中心は常に西側に位置する。それは、東側すなわち中元寺川の貫流する、現在ではより広く映る沖積地が当時としては中元寺川のために不安定な土地であり、より安定した西側の小谷を基盤としていたためであろう。

註

1. 川崎町教育委員会「冥加塚遺跡」『川崎町文化財調査報告書』第2集1986
2. 同「永井遺跡」『同』第1集1985

IV. 岩 鼻 古 墳

Ⅳ 岩鼻古墳の調査

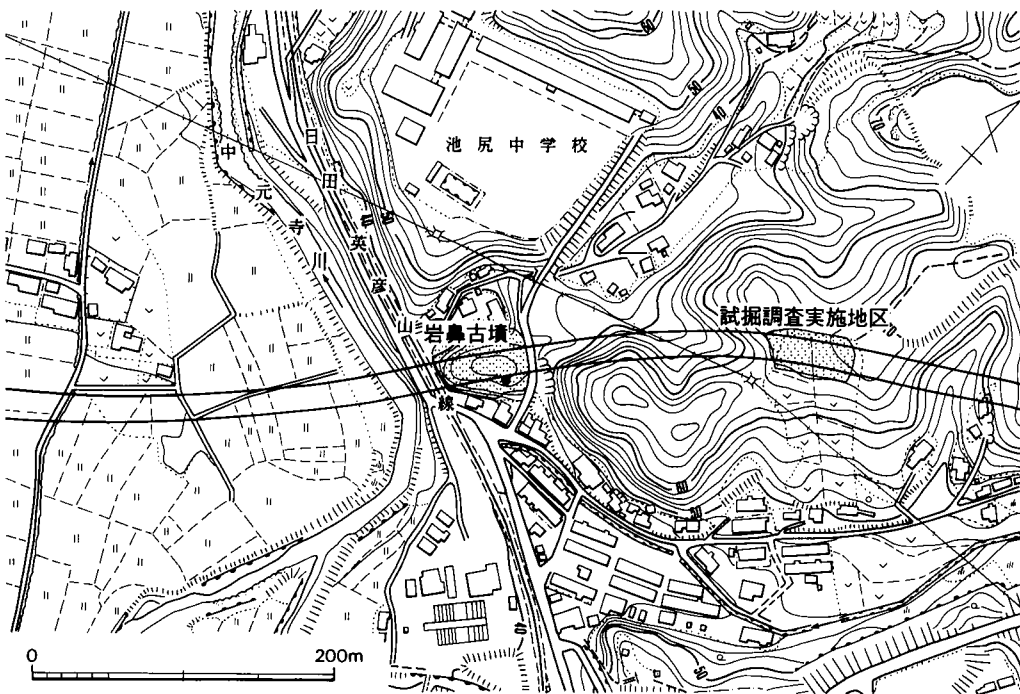
1. はじめに

この古墳は、田川盆地中央部を広く占地する低丘陵の先端部に位置し、眼下を中元寺川が北流する。国道322号線バイパスは中元寺川を越えるこのあたりから山間部へと入るために高架となることから、道路に挟まれて孤立するこの小支丘全体が工事対称となった。

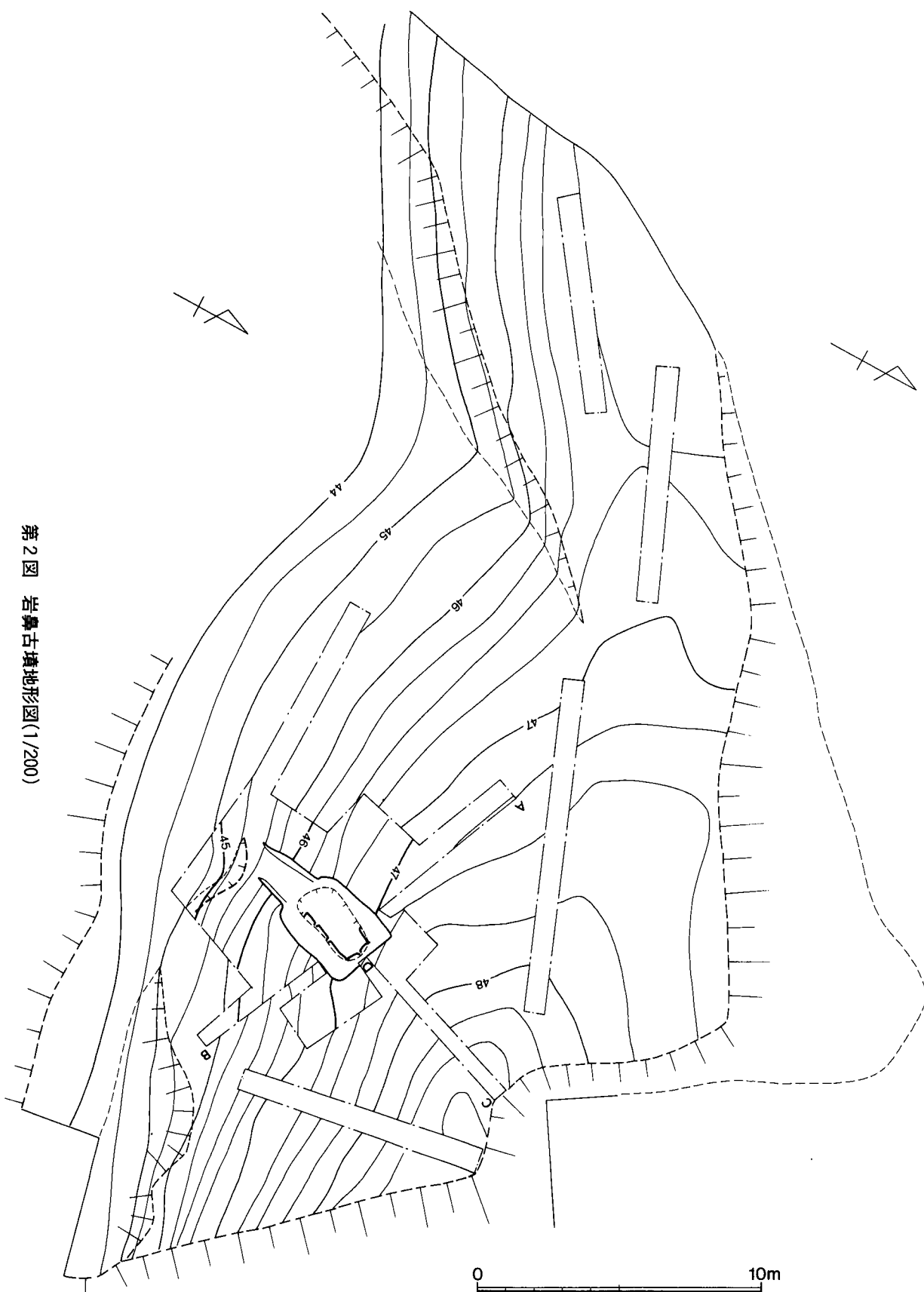
古墳は古くから開口していたという。陥没坑には苔むした石材が覗いており、調査中に合成樹脂製の玩具等が床面近くから出土するなど破壊は徹底していた。

『福岡県遺跡等分布地図』一田川市・田川郡編一には当古墳の載る丘陵の北、狭小な谷を挟んで対峙する丘陵に箱式石棺群（池中下遺跡）の存在が記されていることから、古墳の調査とともに尾根上に数本の試掘溝をあけたものの、遺構は存在しなかった。

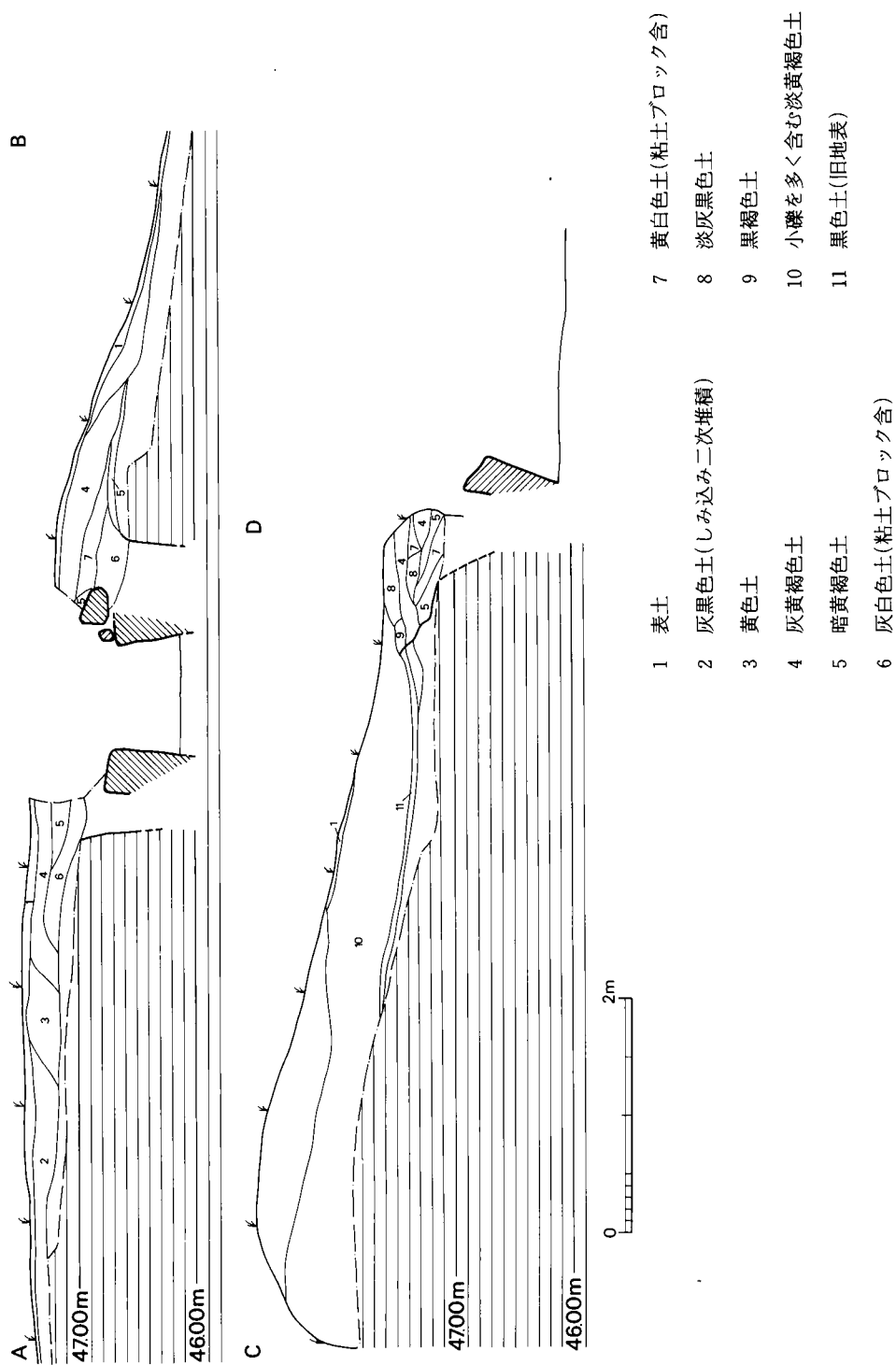
また、北東約200mの路線予定地内では地形が平坦面に近く、尾根幅も肥えていることから試掘調査を行ったが、そこでも遺構は存在しなかった。以上の結果、今回の調査は古墳1基にとどまる。発掘調査は昭和60（1985）年6月4日から同7月1日まで行った。



第1図 岩鼻古墳周辺地形図(1/5,000)



第2图 岩鼻古墳地形図(1/200)



第3図 岩鼻古墳土層図(1/60)

2. 墳 丘

古墳は尾根稜線からやや南の斜面に位置する。そのためもあってか墳形を平面的に捉えることができなかった。土層観察時の所見を以下に記す。

北側畔では盛土は奥壁から1.7mの地点まで確認できたのみで、そこで地山（旧地表）も途切れる。以北は厚く二次堆積層が覆い、旧地表層が保存されている。周溝は存在しない。

西側畔では石室中心から2.5mの地点で、東側畔では同じく2.7mの地点で盛土の始まりを確認でき、古墳の東西長は5.2mとなる。東畔では盛土開始点で小さく削り出した痕跡を残すものの、周溝はやはり存在しない。また、東西畔に旧地表は残っていない。

盛土の遺存状況が悪く、周溝もないことから墳形は確認できていない。

3. 主体部

大破していたが、石室プランはかろうじて推測できる。

掘り形は3.2×2.6mの長方形で、南側にわずかに墓道を残す。

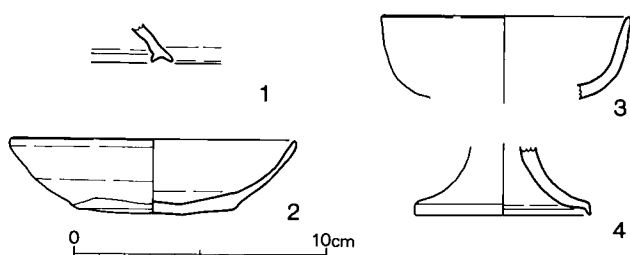
石室は右側壁3枚、奥壁2枚、左側壁1枚の腰石を残す。掘り形東南隅の位置からみて、これ以上に右側壁を延長するのは無理のように思える。また、掘り形コーナーに対応するように位置する2個の小竈は、両側壁線上からやや内側に入り、袖石を埋め込んでいたと推測できる。以上のことから、石室の平面プランは幅1m、長さ2.1mほどに復原される。床面には径10cm前後の扁平な河原石を敷きつめていたようである。

また、玄門前面の構造は残っていない。

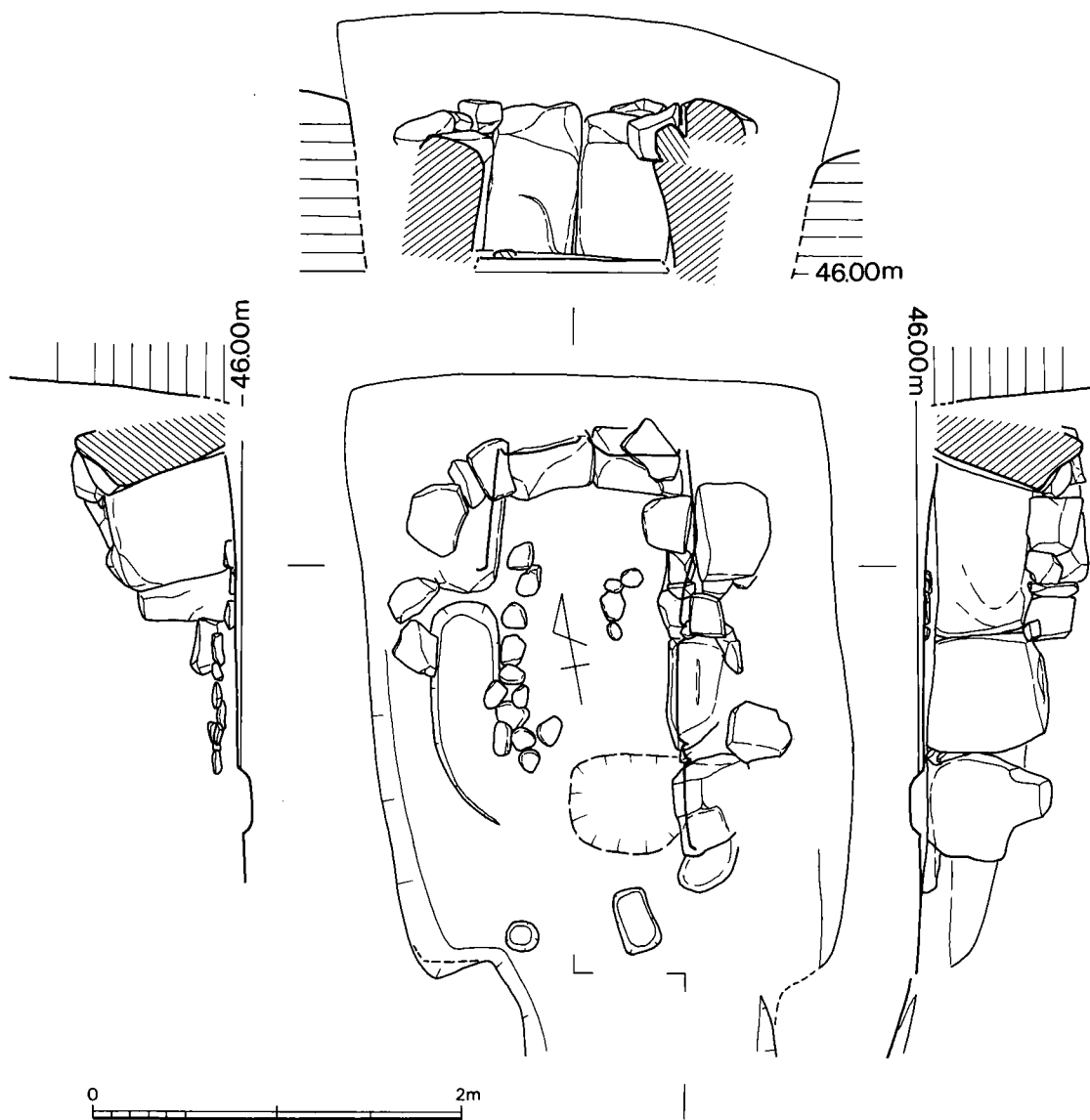
4. 遺 物

主体部内は上述したように徹底した攪乱を受けており、過去に大刀を取り出して中元寺川へ投げ捨てたこともあると聞いた。こうした状況下において石室内は無遺物であった。

墓道を確認するために石室前面の発掘を行ったところ、若干の須



第4図 岩鼻古墳出土遺物実測図(1/3)



第5図 岩鼻古墳主体部実測図(1/40)

恵器・土師器を検出した。実測できたものを第4図に図示する。

1は極めて小片であるが、2との関連で蓋と考えられる須恵器である。2も残片であるが全体を知りうる。口径はやや不確実であるが、底部は小さく膨らむものの平底となって内弯気味の口縁部へ続く。胎土は比較的精良で、焼成はやや甘い。3、4も小片からの復原である。おそらく同一の高杯であろう。杯部は大きく曲線を描き、脚端部は小さく踏んばる。

5. おわりに

以上が池尻岩鼻古墳の調査内容である。

土器は小田富士雄氏の編年によるとⅣ期^{註1}、およそ6世紀終末頃の特徴を有する。

北部九州ではいわゆる群集墳が盛行し、地域によっては巨石墳が出現あるいは盛行する時期であるが、本古墳は小型の石材をもって構築する。主軸がほぼ南北方向と重なることが偶然の帰結ということはあっても、群集墳盛行期の中にあって一基単独で立地する点では終末期古墳に類似する。

註

1. 小田富士雄編 『天観寺山窯跡群』1977

付編

号四郎窯跡 採集遺物

付編 号四郎窯跡採集遺物

第1次の調査中に、川崎市在住で、元福岡県文化財保護指導委員の吉田基衛氏に案内して頂いて川崎町田原にある号四郎窯跡を訪れた。開墾により、旧状を変じており、灰原出土と思われる須恵器片が多数散乱していた。8世紀中頃の窯跡出土品として好資料を得たので、ここに紹介しておく。採集した須恵器の器種は、杯・皿・壺・甕である。

杯蓋(第1図1～6)

口縁端部を短く屈曲させたものであり、この折りまげた口唇部に沈線を入れるもの(4・5)もみられる。頂部には扁平なつまみが付く。天井部外面を回転ヘラ削り、体部は横ナデ、頂部内面はナデ調整である。4は口径17.1cm、器高3cmほどであり、5は小形で口径14.4cm、器高2cmほどである。6は天井部と体部の境に稜が入るものであり口径に比して器高の高い形態のものと思われる。色調はいずれも灰色ないし、灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土は精選されていて良好である。2は生焼けである。

杯身(第1・2図7～24)

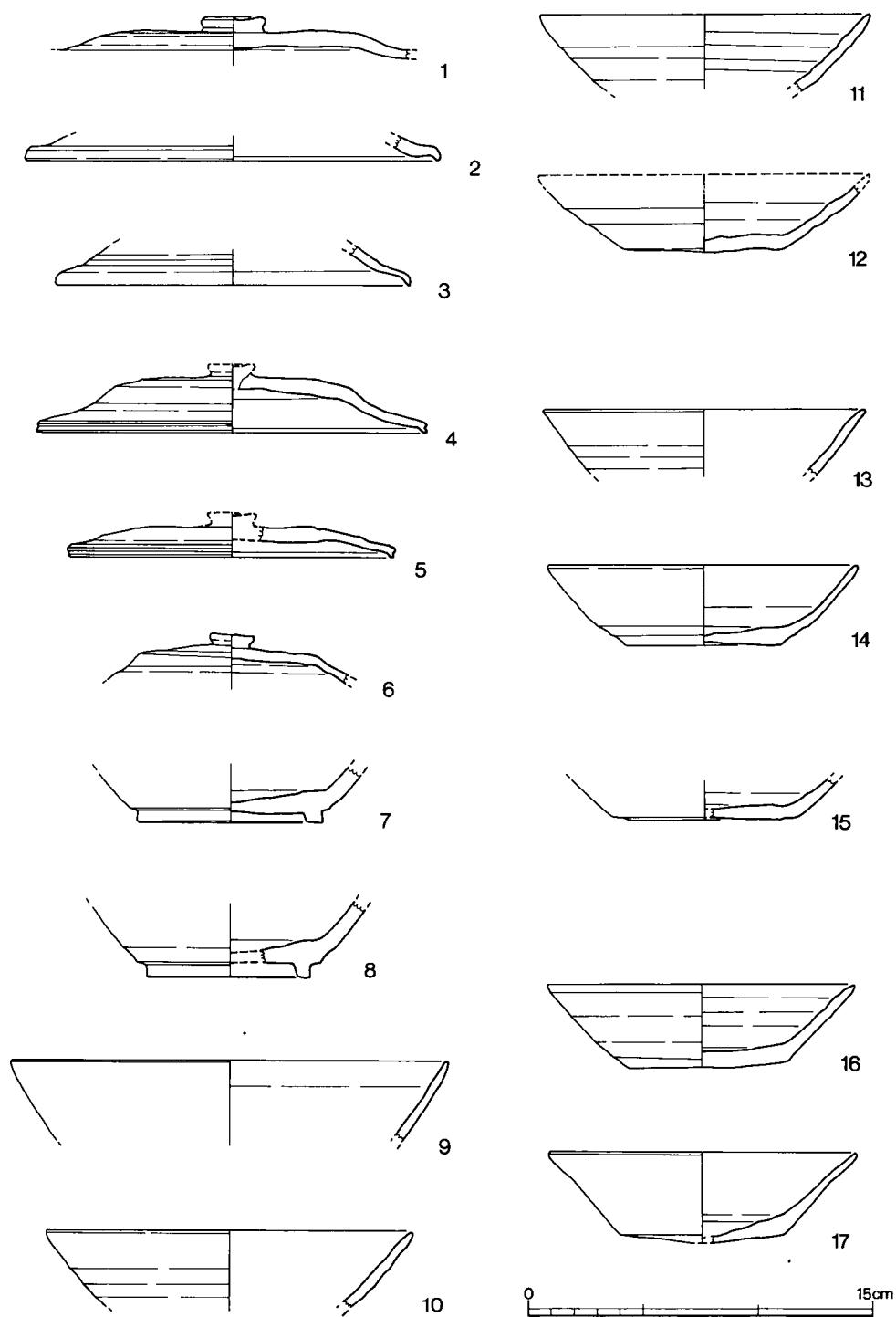
高台杯(7・8)と無高台杯(9～24)の2種類がある。7・8はヘラ切り離された底部の外周近くに、断面方形を呈する丈の低い高台を貼付しており、体部と底部の境は稜線が入る。外反度の強い体部内外面は横ナデし、底部内面はナデ調整する。底径7.2～8.1cmである。無高台杯の口径は19cmの9、16cmの10、13.2～14.4cmの11～19、12.1～12.5cmの20～22の4種類に分けられる。いずれの土器も底部はヘラ切り離し上をナデしており、底部と体部の境に稜線が入る。大きく外反させた体部内面は横ナデ調整であり、16・17・20・21・23は内底部のみナデている。20・21は内底部に重ね焼きの痕跡が残る。16の底外面には粘土紐の巻きあげ痕が残っている。12は外底部に、15は底部内外面に、23は外底部に×印の同一ヘラ記号が入る。器高は3.5～3.9cmである。22のみ体部の外反度が他に比して少ない。色調は灰色ないし灰褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土はいずれも精選されていて良好である。24は口径15.1cmに比して器高3.1cmと低く、前4種類の杯とは異なっている。

皿(第2図25～28)

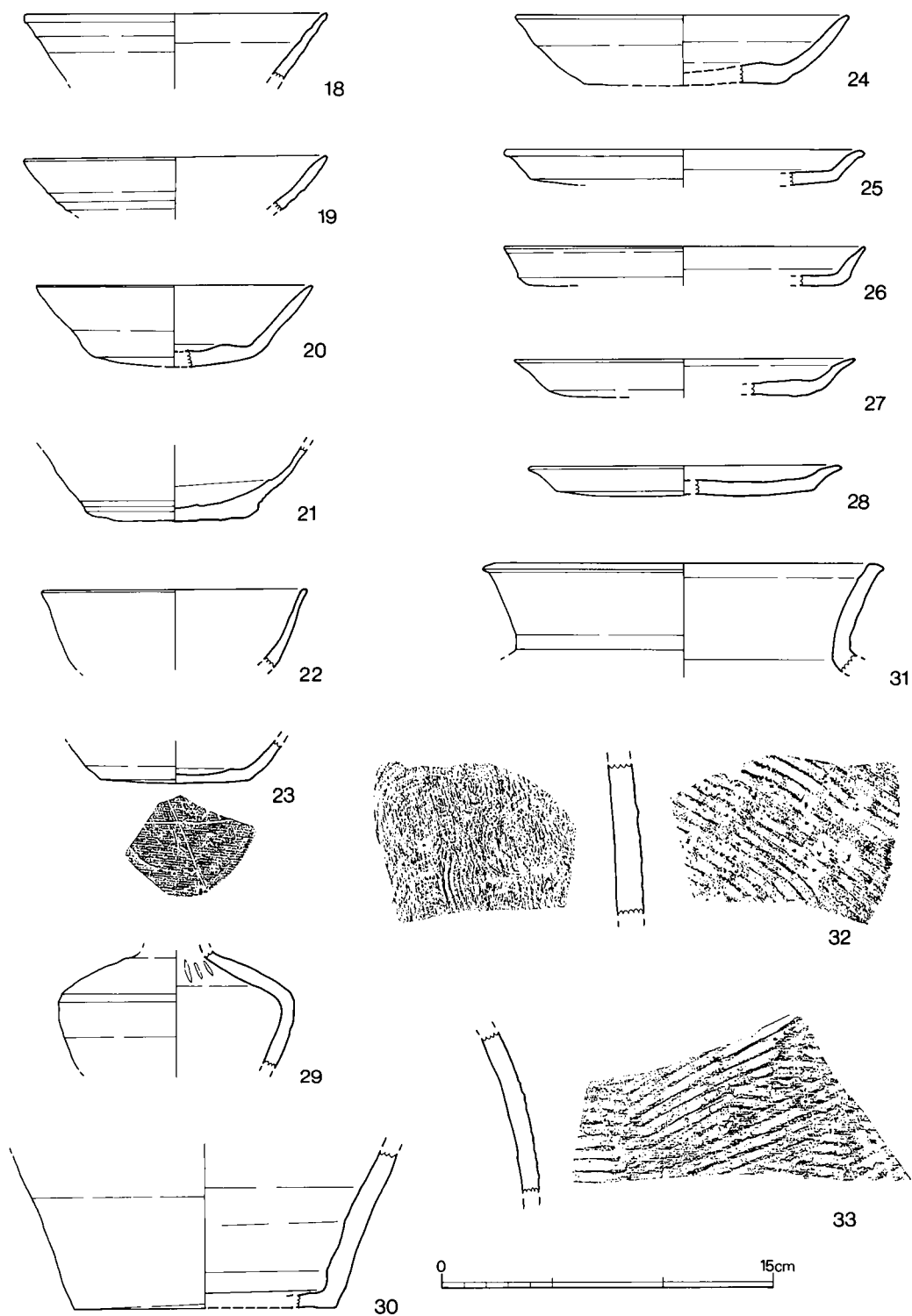
体部は短くて大きく外反し、口縁部近くを更に大きく外反させる。底部はヘラ切りし、ナデている。体部内外面は横ナデ調整であり、内底部はナデを施す。25・26は口径16～16.2cm、器高1.6～1.8cm、27は口径15.2cm、器高1.7cm、28は口径13.8cm、器高1.3cmである。底部と体部の境は稜線が入る。色調は灰色を呈し、焼成は良好である。胎土は精選されていて良好である。

甕(第2図29)

小片であるため全容は不明であるが甕、もしくは埴の胴部と思われ、これのみ時期が古く、



第1図 号四郎窯跡採集土器実測図(1/3)



第2図 号四郎窯跡採集土器実測図(1/3)

混入品であろう。胴上部の頸基部近くにはしぼり痕が入る。現在する内外面とも横ナデ調整である。灰色を呈し、焼成、胎土ともに良好である。

壺(第2図31・32)

31は底部はヘラ切り離しであり、ナデを施す。体部下半は回転ヘラ削りし、上面と内面はナデ調整である。底径12cmを測る。灰黒色を呈し、胎土、焼成ともに良好である。31は30とは別個体である。口縁部は外反し、口縁端部は平坦面を有している。横ナデ調整である。灰黒色を呈し、焼成良好である。

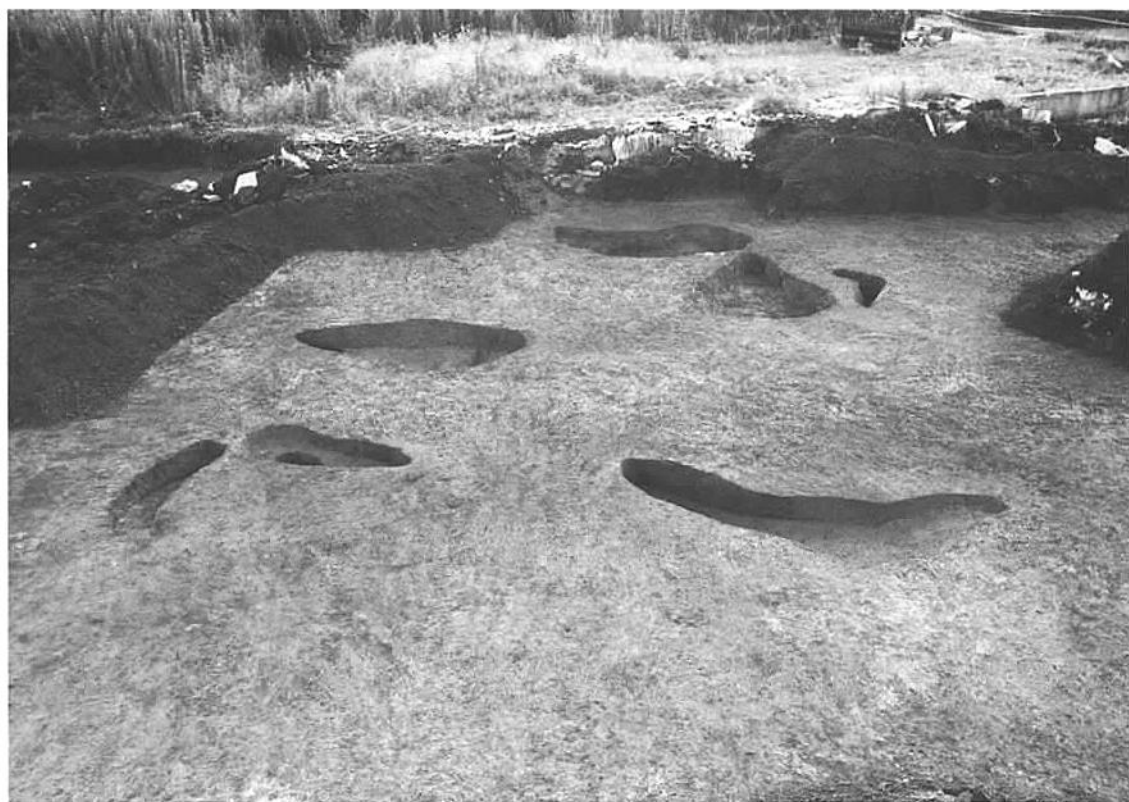
甕(第2図32・33)

32・33ともに胴部の破片であり、外面は目の粗い平行叩きが入り、内面は同心円叩きの上をナデている。33はナデが丁寧であり、同心円叩きをほとんど消し去っている。

圖 版



冥加塚遺跡遠景



第1次の調査(南から)



第1次の調査(拡張部分)



第1次の調査(拡張部分)



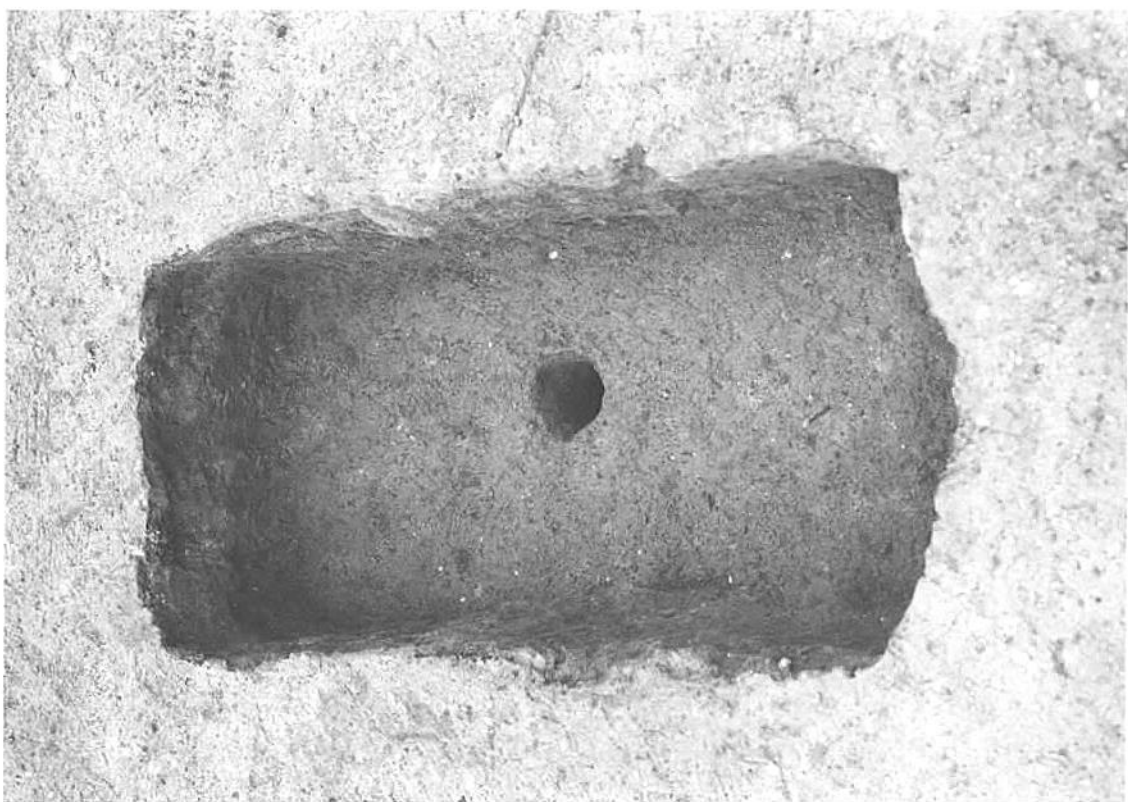
埋 甕



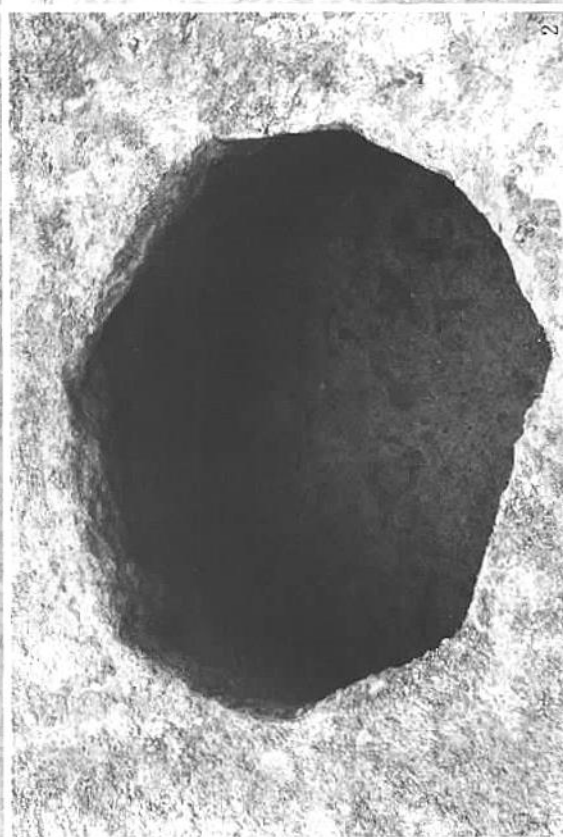
1号土壙墓



3号土罐墓



2号土罐墓

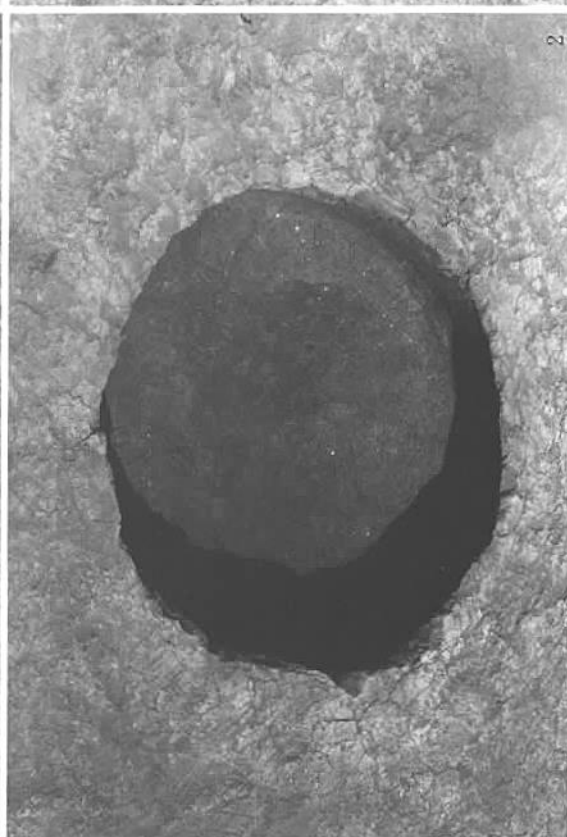
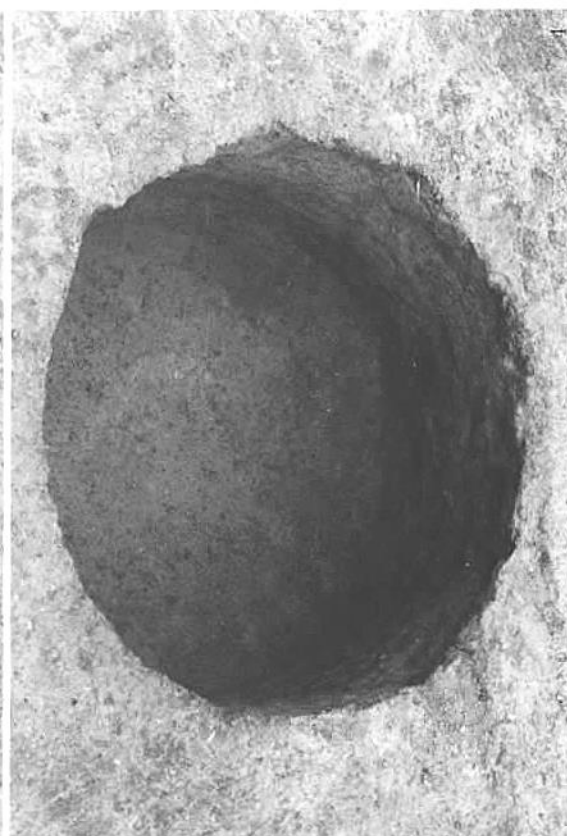
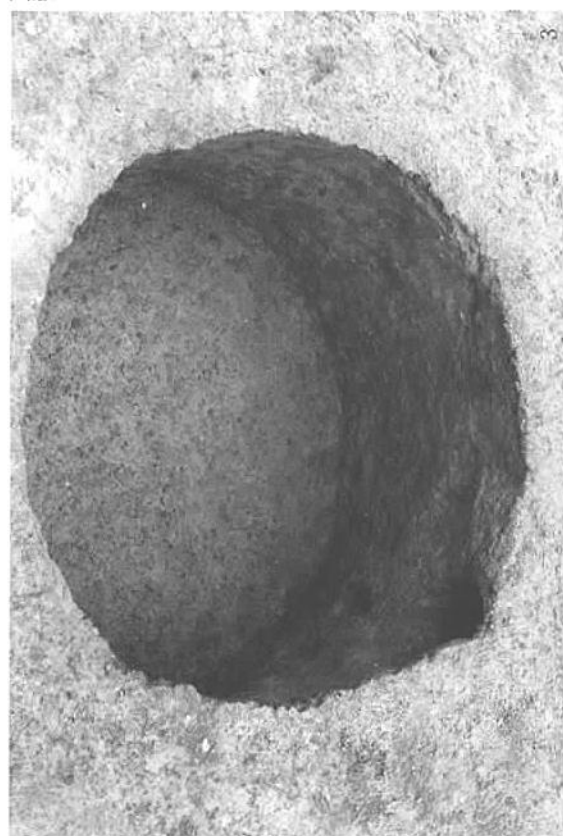


2 号袋状竖穴

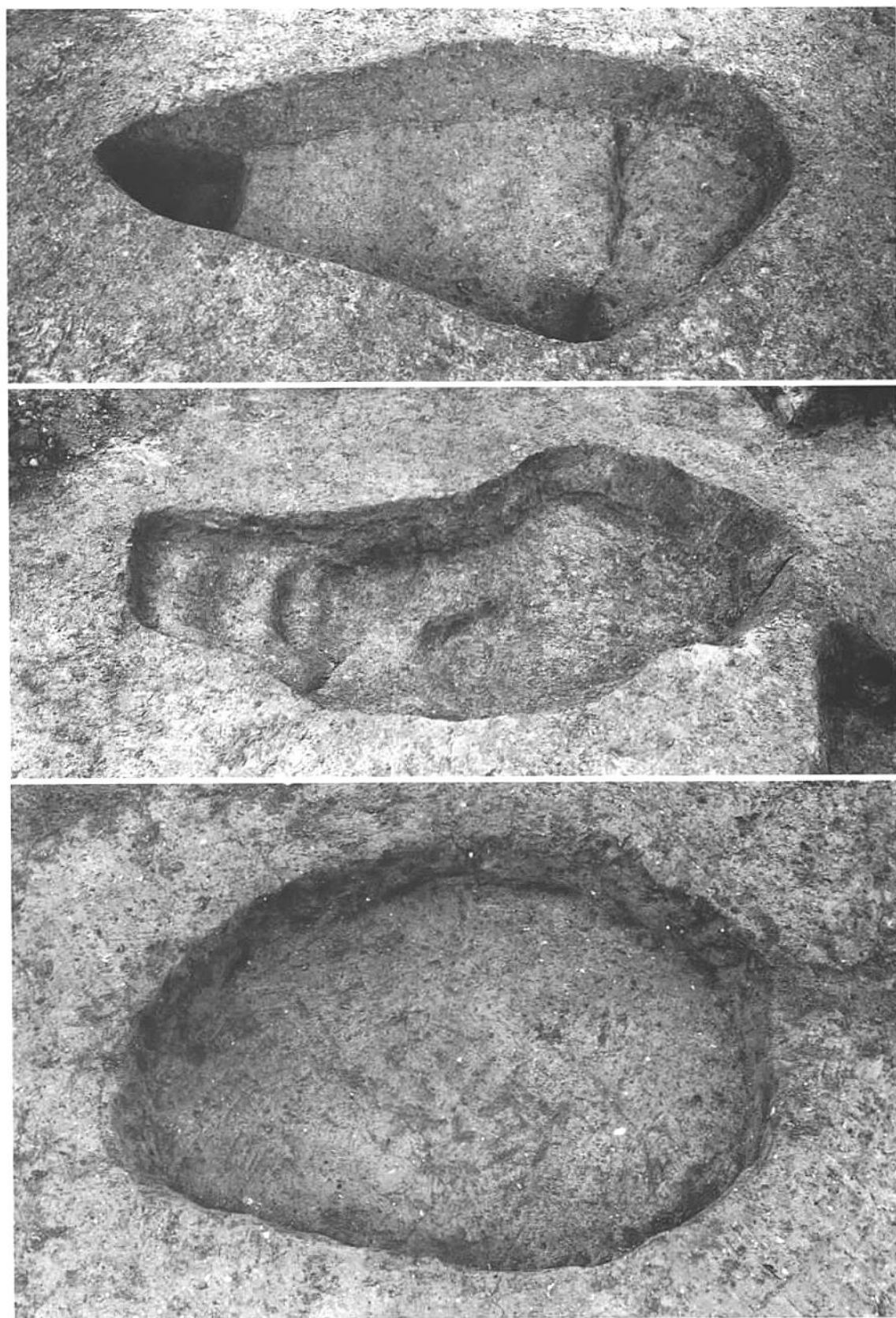
2 号袋状竖穴

1 号袋状竖穴

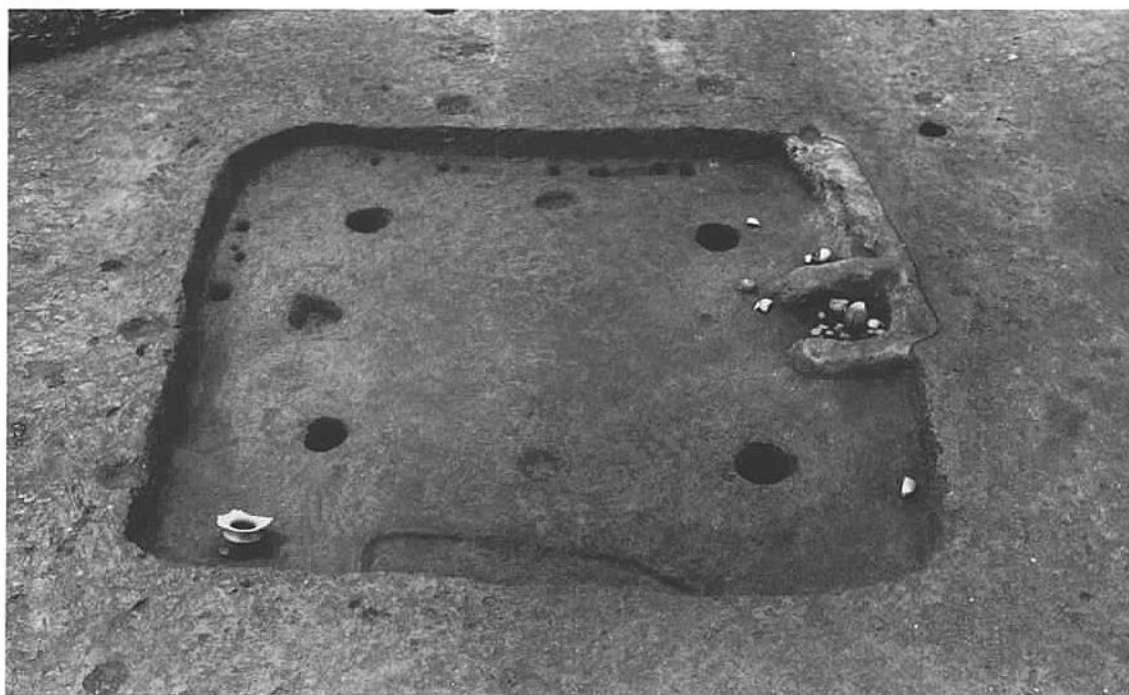
4 号土城墓



1 3号袋状竖穴 2 4号袋状竖穴 3 5号袋状竖穴 4 土坑



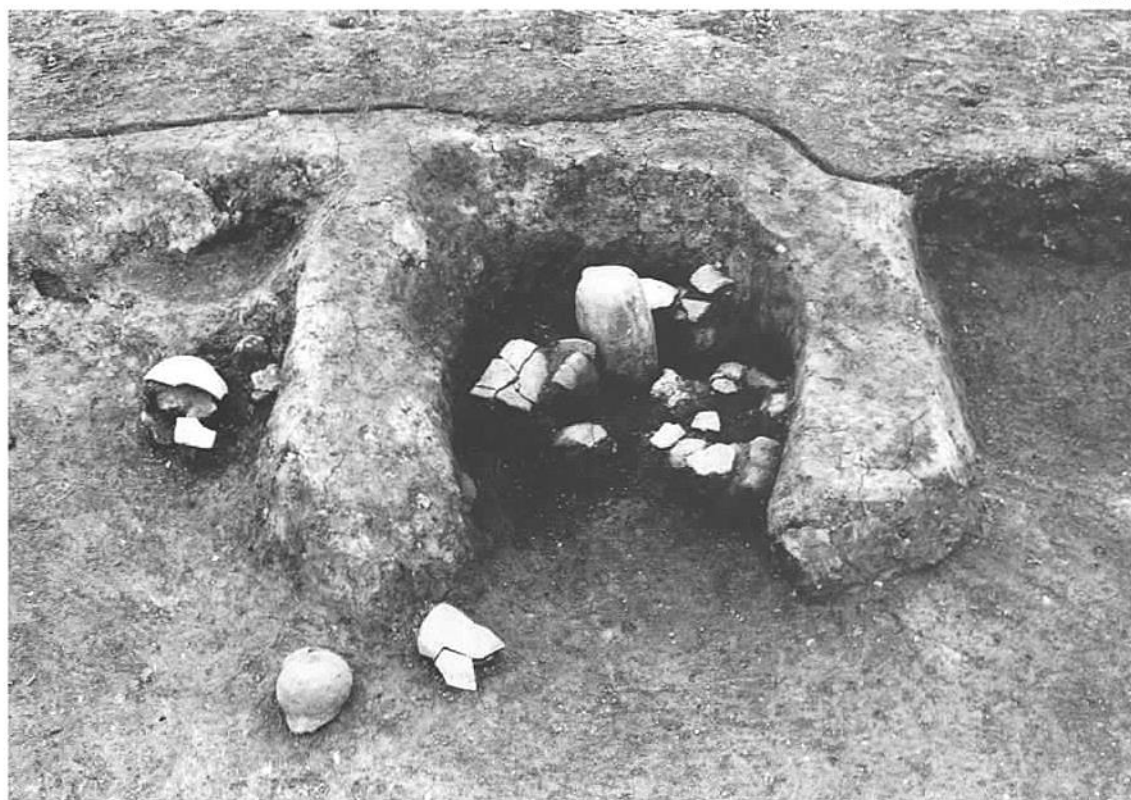
土境検出状態



1号住居跡全景



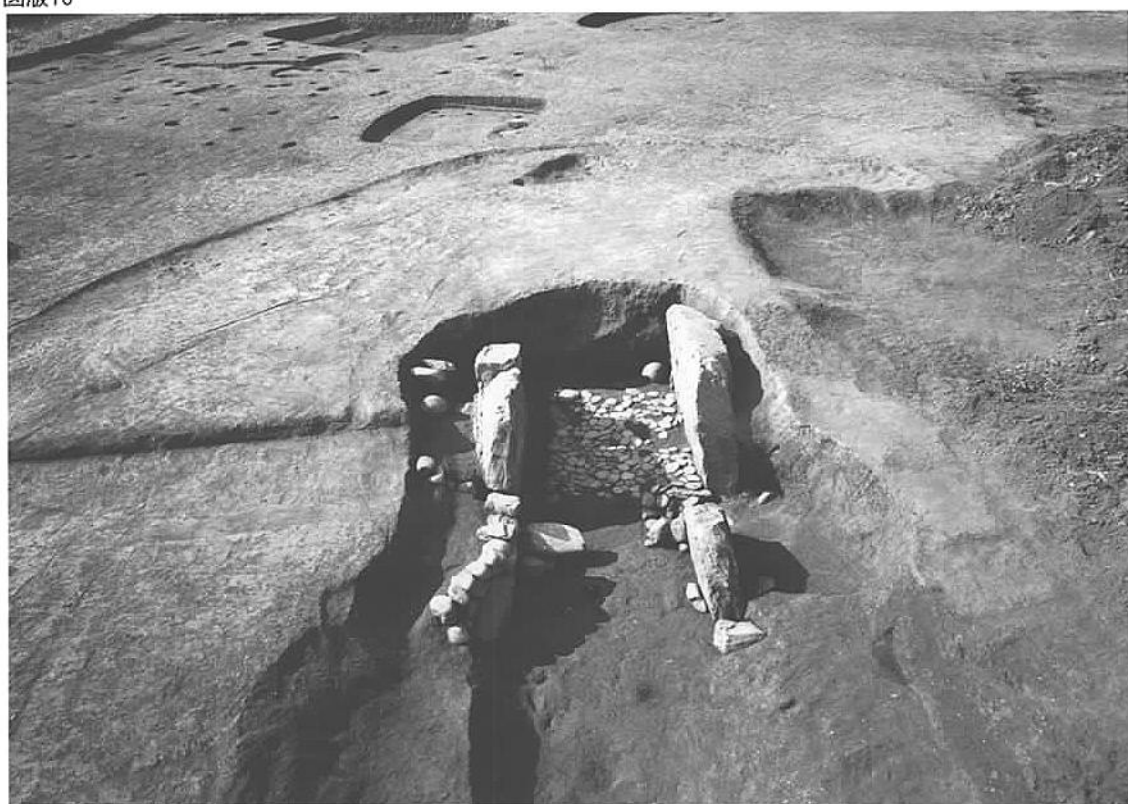
1号住居跡の柱穴とピット



1号住居跡カマド出土状態



1号住居跡カマド断面(中央部が石製支脚)



第2次調査全景



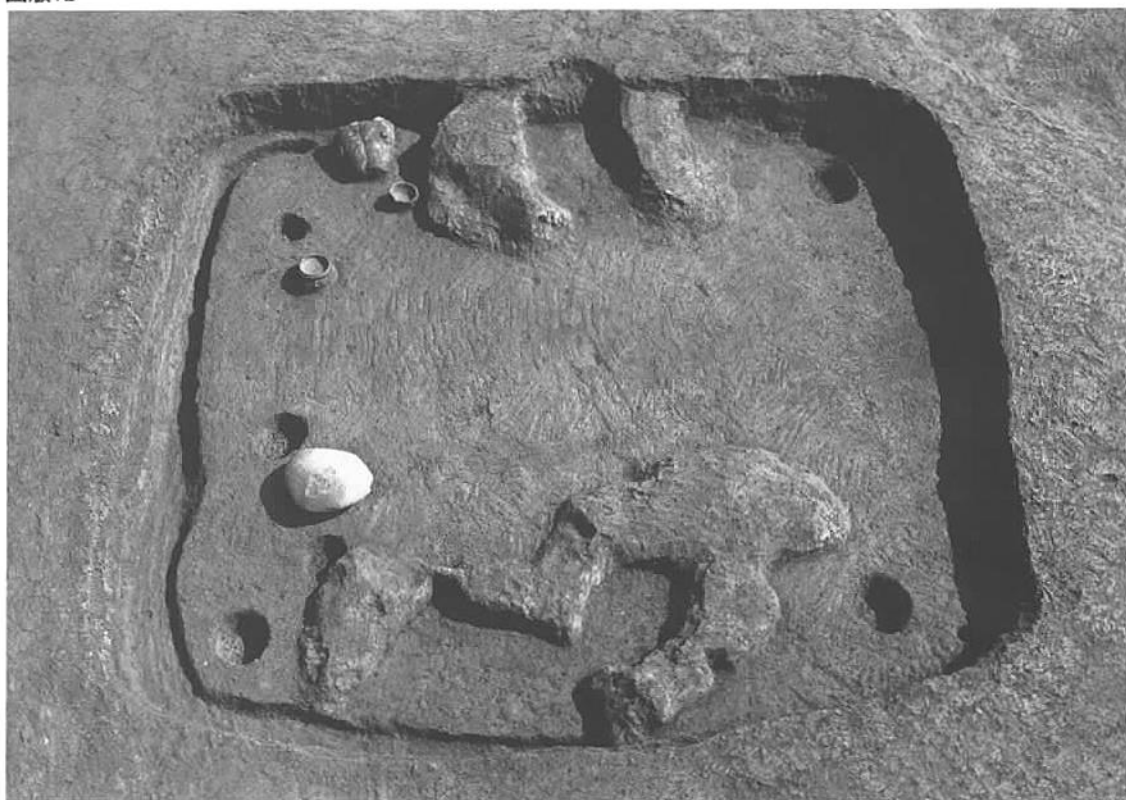
4号住居跡・1号掘立柱建物・2号土坑



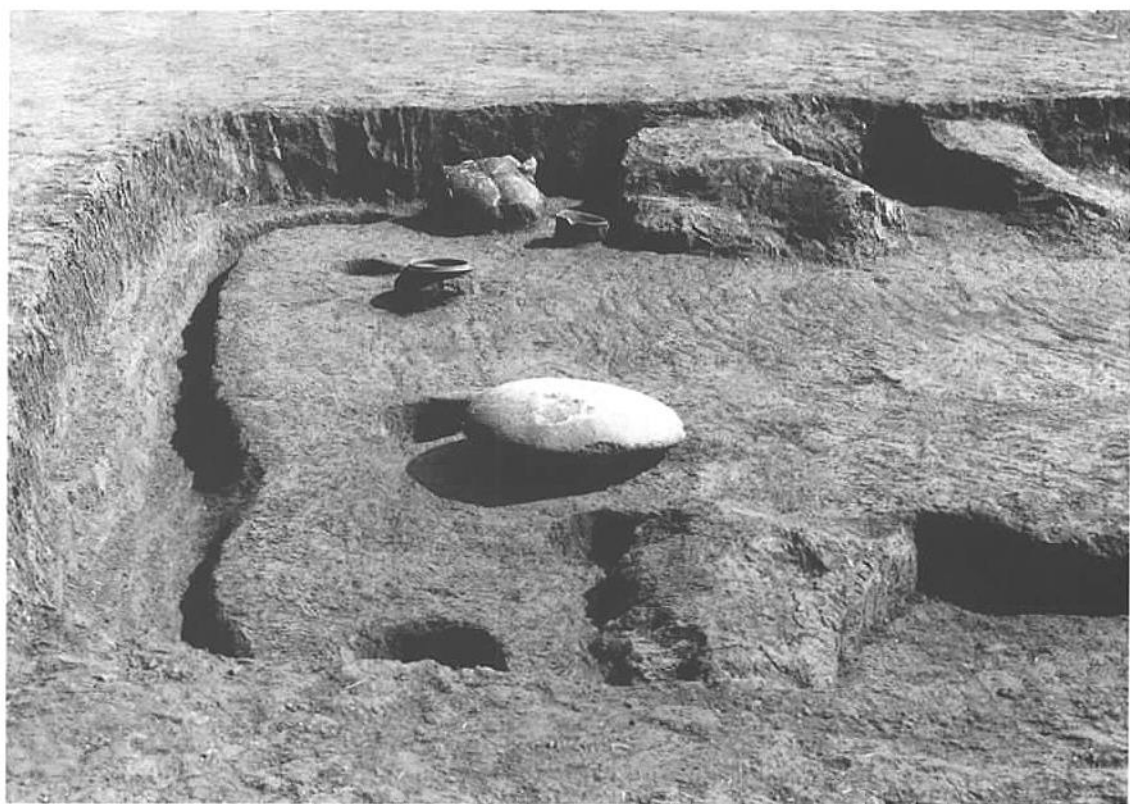
3号住居跡



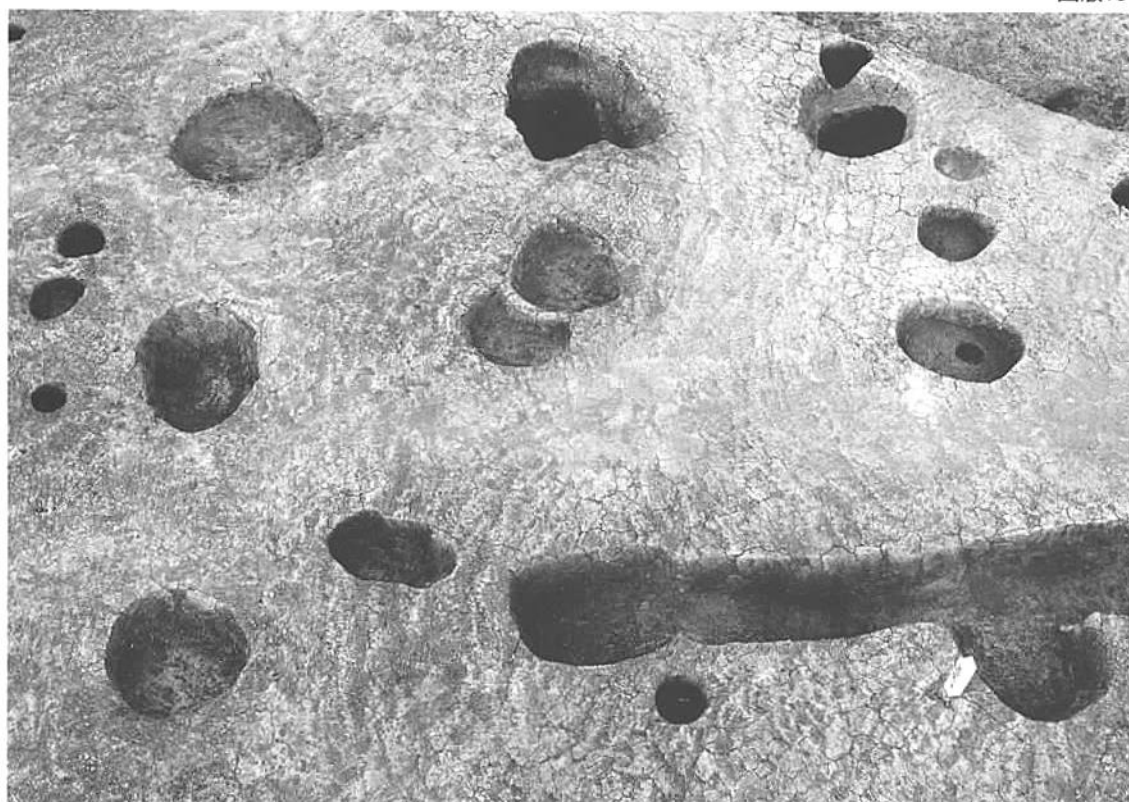
4号住居跡



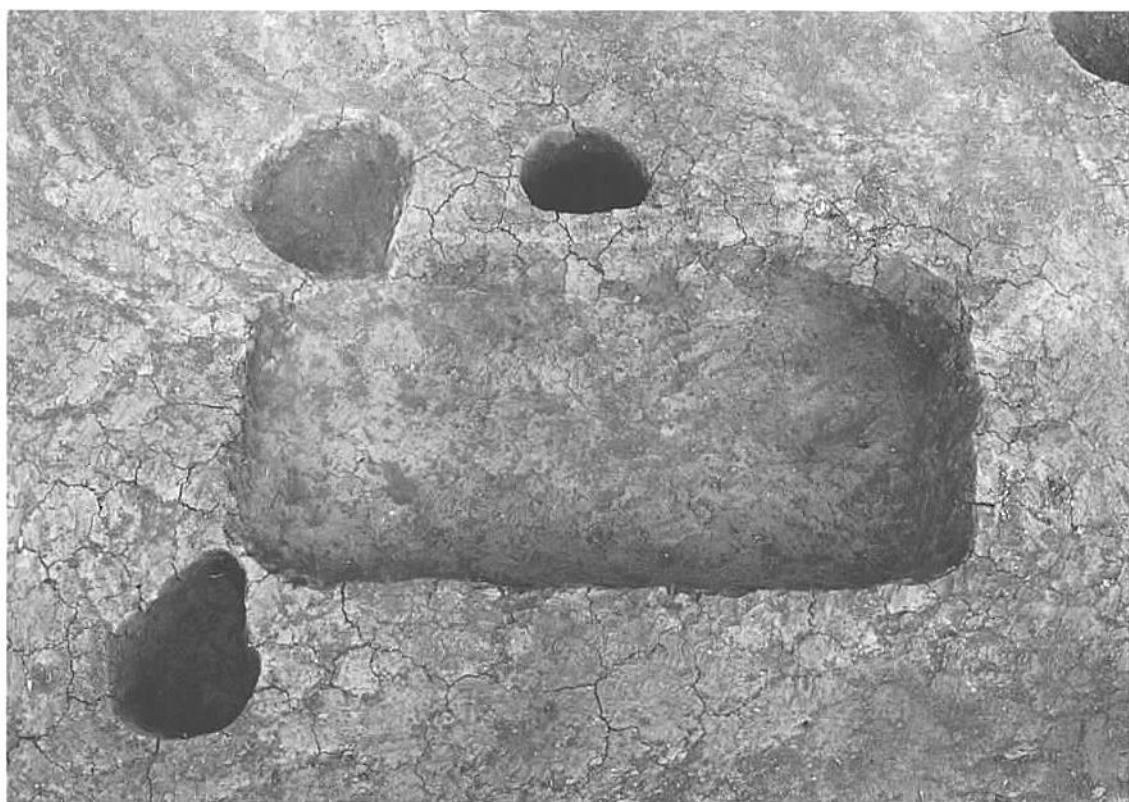
2号住居跡



2号住居跡部分



1号掘立柱建物



1号土城



1号墳全景



1号墳石室



第3次調査区西半



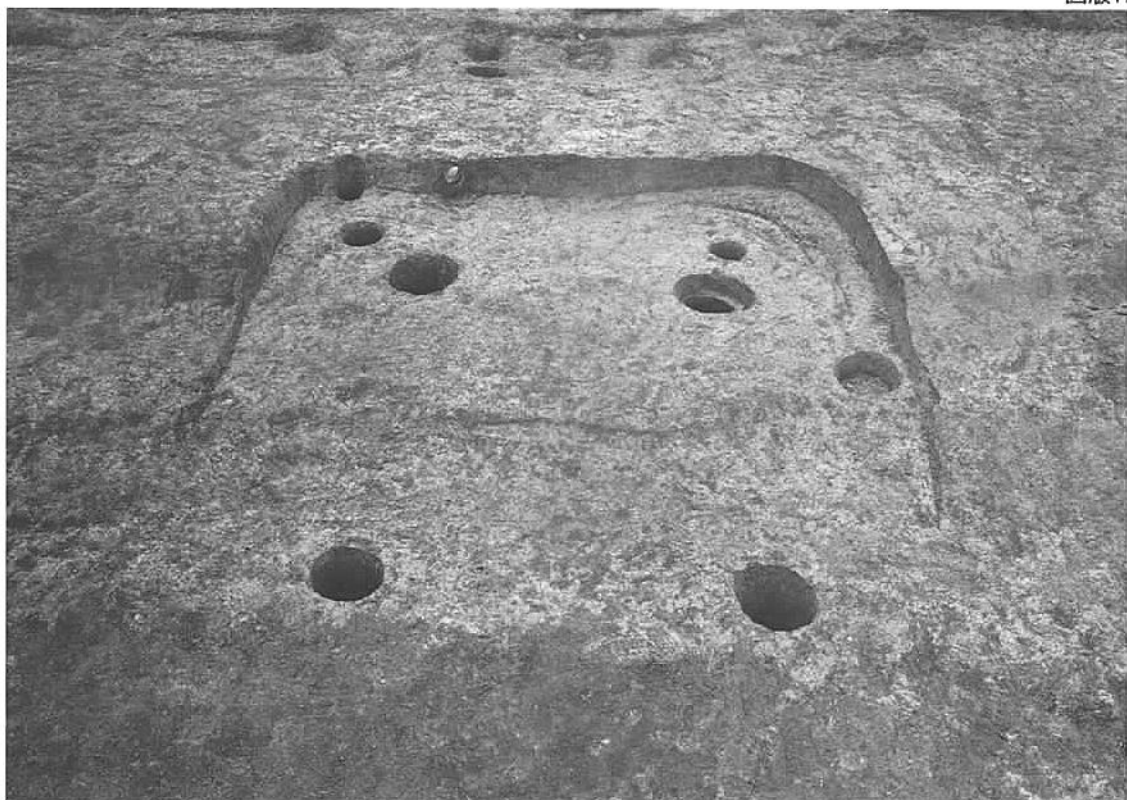
第3次調査区東半



5号住居跡



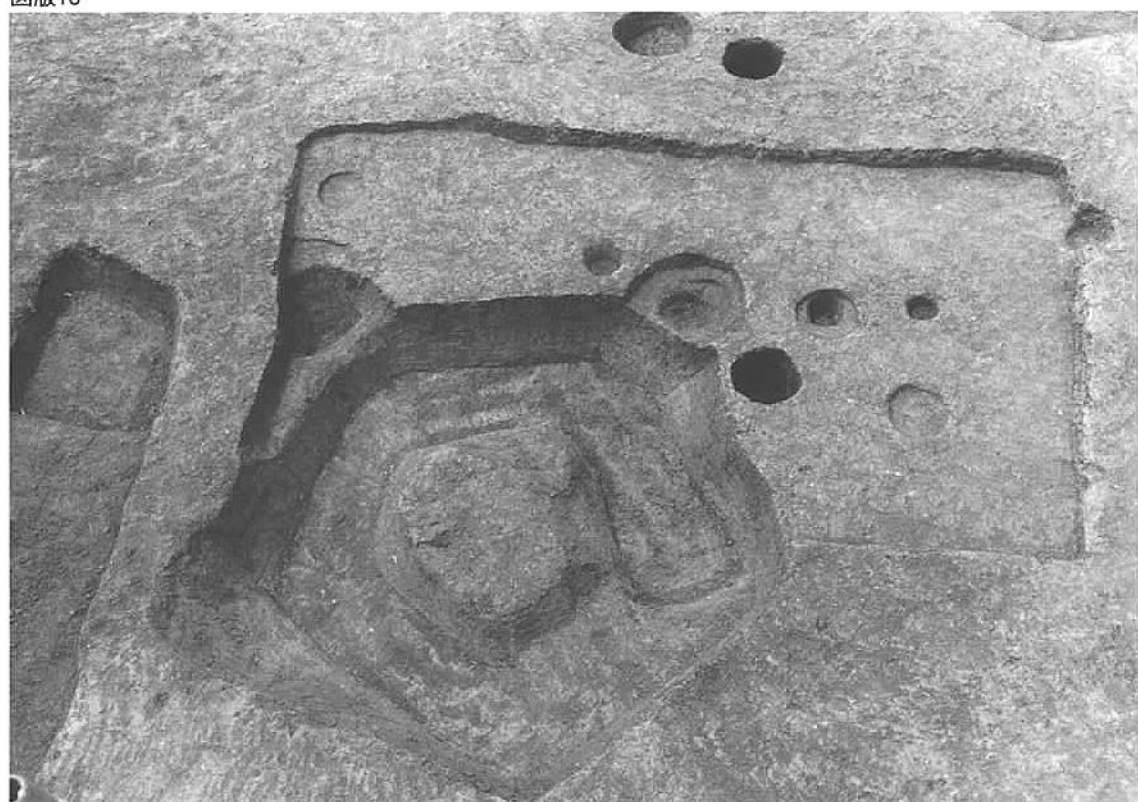
5号住居跡カマド



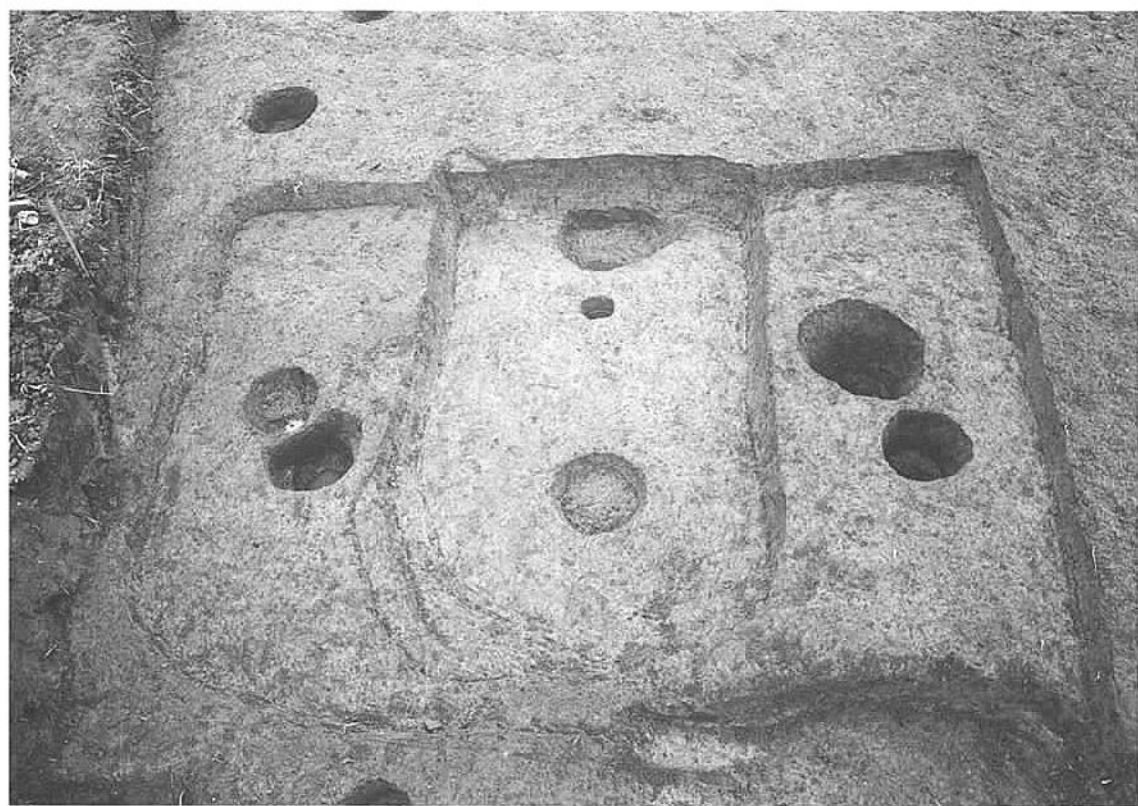
6号住居跡



7号住居跡



8号住居跡



9号住居跡



6号袋状竖穴



3号土坑



第9図6



第9図7



第9図8



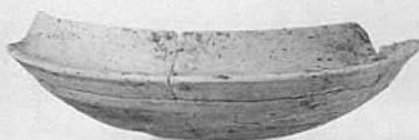
第9図14



第9図9



第16図2



第16図5



第16図6



第16図8



第16図9



第16図10



第27図 2



第21図 2



第27図 3



第21図 3



第27図 4



第22図 S 1



第27図 6



第22図 S 2



第24図 1



第28図 M 1



第25図



第33図 3



第33図 4



第33図 5



第33図 6



第37図 1



第37図 2



第37図 3



第37図 4



第37図 8



第37図 9



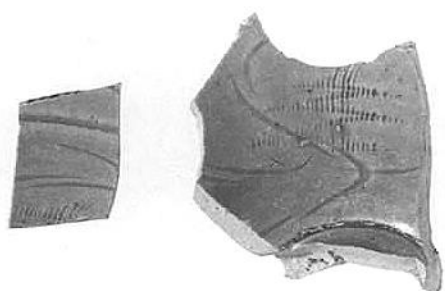
第37図10



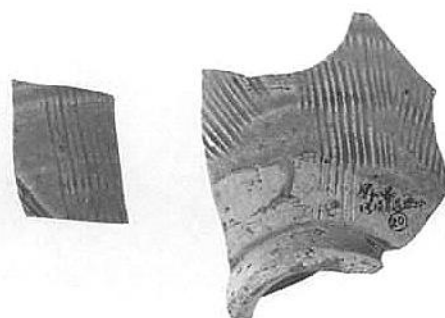
第37図13



第38図22



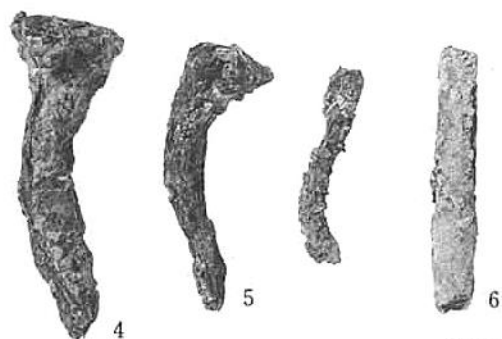
第39図33



第39図34



第40図 S 1



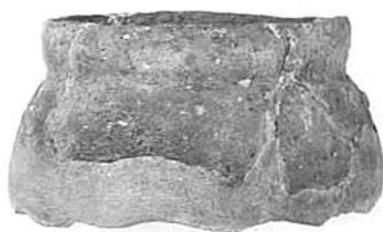
第40図



第40図



第43図 1



第43図 2



第43図 6



第45図 2



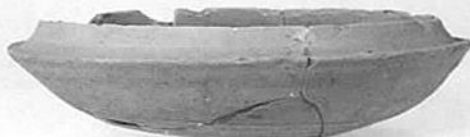
第47図 6



第47図 7



第47図 10



第47図 11



第47図 12



第47図 5



第52図 1



第52図 9



第52図 11



第54図 6



第55図 1



第55図 3



第57図 1



第58図 1



第57図 2



第58図 2



第60図 7



第60図 8



第60図



池尻岩鼻古墳現況(南から)



同調査後(南から)

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 61	登録番号 12

冥 加 塚 遺 跡

福岡県文化財調査報告書
第 77 集

昭和62年 3 月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 瞬報社写真印刷株式会社
福岡市中央区天神 5 丁目 4 番16号